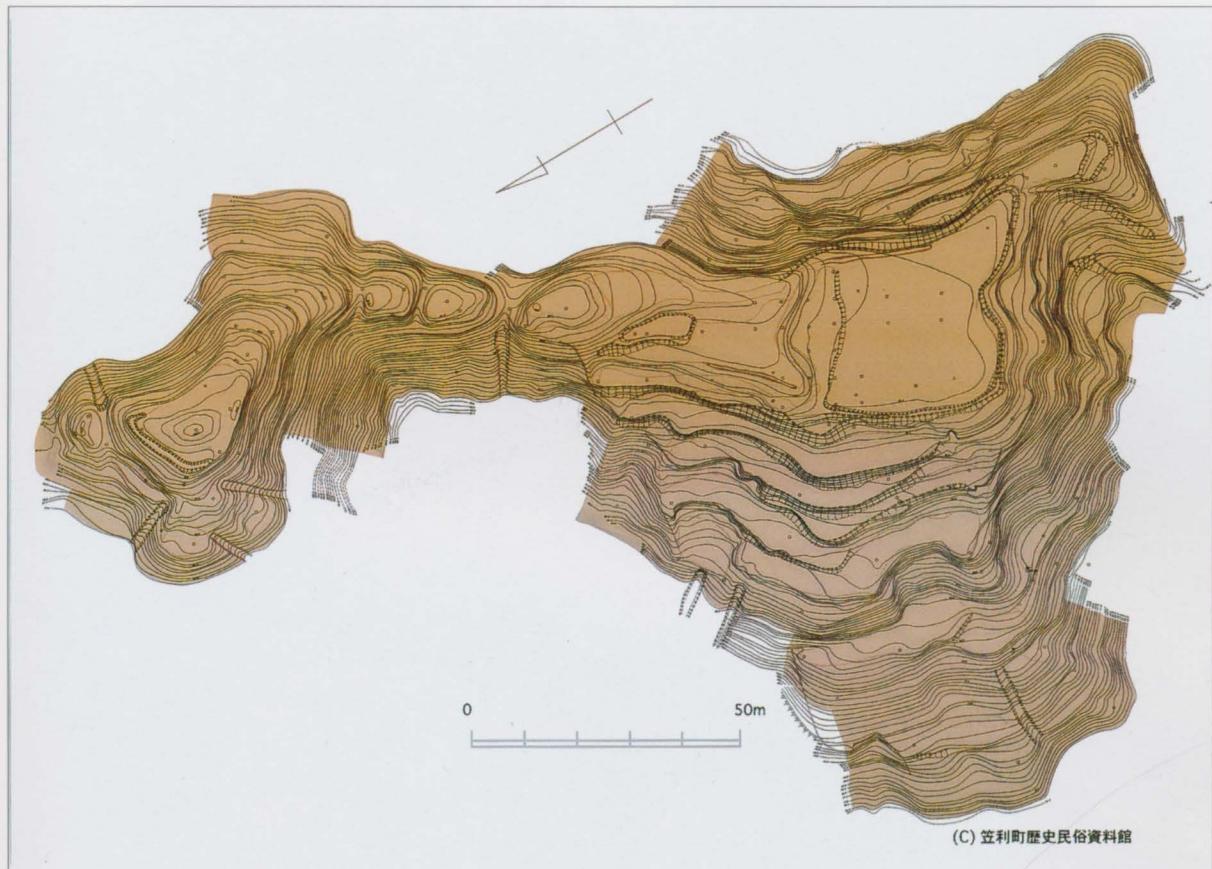


赤木名グスク遺跡



2003年3月

鹿児島県大島郡 笠利町教育委員会



地形図



空撮写真



第1掘切



豎掘



第3掘切から南側



北側台遺構



曲輪 1 北側石積



石積 4



曲輪1 10、11—G区礫層



旧石器チャート出土

序 文

本書「赤木名グスク」は、平成11年度から平成14年度まで、文化庁と鹿児島県文化財課のご協力をいただき発掘した。重要遺跡確認調査の記録です。

赤木名グスクから一望できる笠利湾は、北方に大きく開口しており、湾の基部から外海に向かって突き出るように打田原半島があります。当グスクは、この湾を見張らせる東側山頂に位置しており、12・3世紀頃に奄美の交易の拠点になっていたと言われています。このことは、奄美の中世グスクを取り巻くロマンと、当時の人々がこの湾から果敢に黒潮に乗り出し、海外へと北上・南下していた暑い息吹きが感じられます。

赤木名グスクは、調査が進むにつれてその成果が各方面より注目されるとともに、このような限りない大きな夢を与えてくれています。日本の山城と沖縄のグスクの狭間で、奄美大島の中世はこれまでやや小さく感じていました。

しかし、赤木名グスクの地形的特徴や出土品は、当時の貿易陶磁器や流通経路等、また、その拠点を解明する上で重要な資料となり、多大な成果を上げることができました。ここで得られた成果は、私たち奄美人の貴重な文化遺産でもあります。

本書が赤木名グスクの更なる調査に、また、日本・中国・奄美・沖縄を含めた東シナ海交易の歴史と奄美の研究に、そして、文化財の保護・活用に役立てれば幸甚に思います。

おわりに、この度のグスク調査に関して、ご指導をいただきました文化庁・鹿児島県文化財課・現場の御指導に来られた多くの先生方、また、この調査に対し快く快諾して頂いた地主の故友野義国先生を始め、地元の方々に対し、衷心より敬意と感謝を申し上げます。

平成15年2月

笠利町教育委員会

教育長 中村武秀

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	あかきなぐすぐ 赤木名城		
副書名			
シリーズ名	笠利町文化財報告		
シリーズ番号	No. 26		
編集者名	中山清美		
著者名	中山清美・新里亮人・高宮広土・宇田津徹朗		
編集機関	笠利町教育委員会		
所在地	鹿児島県大島郡笠利町中金久52-7		
発行年月日	2003年(平成15年)3月24日		
ふりがな 所収遺跡名	あかきなぐすぐ 赤木名城		
所在地	鹿児島県大島郡笠利町里溜池の又		
調査期間	(1999年~2003年3月) 平成11年10月12日から11年11月30日 平成12年10月17日から12年12月25日 平成13年10月22日から13年2月28日 平成14年8月2日から15年1月24日(整理報告書作成)		
調査面積	27,000m ²		
調査原因	重要遺跡確認調査		
時代、遺物、遺構	主な時代	主な遺構	主な遺物
	グスク時代 (12・3世紀)	土壘 グスク道 曲輪 帶曲輪 腰曲輪 堅堀 掘切り 台 石垣 土構 焼土 ピット	カムイヤキ 黒漆カムイヤキ 滑石 玉縁白磁 青磁
旧石器		フレイク チップ	

例　　言

- ・ 本書は笠利町教育委員会による鹿児島県大島郡笠利町里溜池の又所在の赤木名グスクの発掘調査報告書である。
- ・ 発掘調査は笠利町教育委員会が1999年から2002年まで文化庁・鹿児島県文化財課の補助を受けて実施した。
- ・ 調査期間は第2章3節に記載のとおりである。
- ・ 調査の組織は第2章2節に記載のとおりである。
- ・ 本書の編集は中山清美が行ない、「徳之島カムイヤキ古窯産製品」は熊本大学大学院生新里亮人、「赤木名グスクの出土の植物遺体」(速報)は札幌大学助教授高宮広土、「プラント・オパール分析」は宮崎大学農学部宇田津徹朗、他は中山清美が執筆した。
- ・ 出土遺物、測量図は笠利町歴史民俗資料館で保管している。

本文目次

序文

報告書抄録

例言

第1章 位置と環境	1
第1節 位置的環境	1
第2節 地理的環境	5
第3節 歴史的環境	9
附節 「シマの地理と四季と主な民俗行事」	13
第2章 調査にいたる経過	16
第1節 調査にいたる経過	16
第2節 調査組織	17
第3節 調査の概要	21
第3章 調査の成果	27
第1節 地形図に見る赤木名グスクの成果	27
第2節 地形図に見る	33
第3節 発掘調査の成果	41
徳之島カムイヤキ古窯産製品	62
赤木名グスク出土の植物遺体（速報）	66
奄美大島の遺跡土壌のプラント・オパール分析	70
まとめ	75
GUSUKU on Amami Island	77

表目次

第1表 奄美大島グスク分布地名表	7
第2表 名瀬市一覧表	8
第3表 遺跡分布地名一覧表	12
第4表 調査区出土遺物一覧表	59
第5表 調査区出土遺物一覧表	60
第6表 カムイヤキ観察表	64

挿図目次

第1図 南島広域図	2
第2図 東シナ海逆図	3
第3図 赤木名グスク位置図	4
第4図 奄美大島グスク遺跡分布図	6
第5図 笠利町遺跡分布図	11
第6図 赤木名グスクグリット配置図	19
第7図 赤木名グスク調査区域図	20
第8図 1999年調査区域図	22
第9図 2000年調査区域図	24
第10図 2001・2002年調査区域図	26
第11図 1999年作成赤木名グスク縄張略図	28
第12図 赤木名グスク縄張名称図	29～30
第13図 赤木名グスク周辺地形図	32
第14図 赤木名グスク周辺地形図	38
第15図 赤木名グスク地形断面図1	39
第16図 赤木名グスク地形断面図2	40
第17図 土壙外 8・9-J・K区	42
第18図 10・11・13-G区, 12・13-H区遺構平面図	43
第19図 13-H区 土坑・遺物出土状況	44
第20図 15-G・I・J区, 14-G・I・J区平面	45
第21図 曲輪2 19・21-H・G区 平面図	47
第22図 曲輪1 11-G区 土層断面図	49
第23図 曲輪2 19-H区 土層断面図	50
第24図 14-I区 (1・2 ピットより出土, 3・4・5・6 カムイヤキ, 7 白磁口縁部)	53
第25図 13-G区 (6・7 カムイヤキピット内), 14-I区 (8 カムイヤキピット内, 9 カムイヤキ), 15-I区1層出土 (1 玉縁口縁白磁, 2 青磁, 3・4・5 カムイヤキ)	54
第26図 13-G区 (1 青磁, 2 白磁底部), 13-H区 (4 カムイヤキ表土, 5 カムイヤキピット内), 12-K (3 カムイヤキ土壙)	55
第27図 曲輪2 19-H区 出土遺物	56
第28図 滑石	58
第29図 11-G区 旧石器 1/1	61
第30図 土坑、平場出土のカムイヤキ (S=1/2)	63
第31図 表面採集によって得られたカムイヤキ (S=1/2)	64

図版目次

図版- 1	赤木名グスク遠影, 調査前の曲輪 (1999年), 伐採作業 (1999年)	81
図版- 2	第 1 掘切 (2001年), 第 2 掘切 (1999年), 第 3 掘切 (1999年)	82
図版- 3	曲輪 1 南側より (1999年), 曲輪 1 北側 (1999年)	83
図版- 4	曲輪 2 南より (1999年), 曲輪 2 21 - G・H 区 (2000年), 曲輪 2 19 - H 区焼土 (2000年)	84
図版- 5	曲輪 1 城道 (1999年), 曲輪 2 土壘 (1999年), 竪掘り (2000年)	85
図版- 6	曲輪 1 13 - G 区ピット遺構 (1999年), ピット内出土カムイヤキ (1999年), ピット内出土滑石 (1999年)	86
図版- 7	曲輪 1 13, 14 - J 区土壘 (1999年), 曲輪 1 13 - G・H 区 (2001年)	87
図版- 8	曲輪 2 13 - H 区土坑 (2001年), 土坑内カムイヤキ出土 (2001年), 土坑内黒うるしカムイヤキ出土 (2001年)	88
図版- 9	曲輪 1 玉縁口縁白磁 (2000年), 曲輪 1 グスク土器 (2000年), 曲輪滑石出土 (2000年)	89
図版- 10	曲輪 1 土壘断面 (1999年), 曲輪 1 土壘断面 (1999年), 曲輪 1 9 - K 区土壘外, 炭化木出土	90
図版- 11	曲輪 2 19 - H 区東側より (2000年), 曲輪 2 19 - H 区西側より (2000年)	91
図版- 12	北側台 (2001年) 92, 北側台下石積遺構 (2001年)	92
図版- 13	発掘調査作業 (1999年), 測量作業 (1999年), 発掘体験学習 (赤木名中学校) (2000年) ..	93
図版- 14	曲輪 1 カムイヤキ, 土坑出土黒漆カムイヤキ, 骨石	94
図版- 15	磁器とカムイヤキ, 玉縁口緑磁器, 玉縁口緑磁器	95
図版- 16	カムイヤキ, 石製品, 鉄滓	96
図版- 17	カムイヤキ, カムイヤキ, グスク土器	97
図版- 18	カムイヤキ口縁部, 赤褐色カムイヤキ, 黒漆カムイヤキ	98

第1章 位置と環境

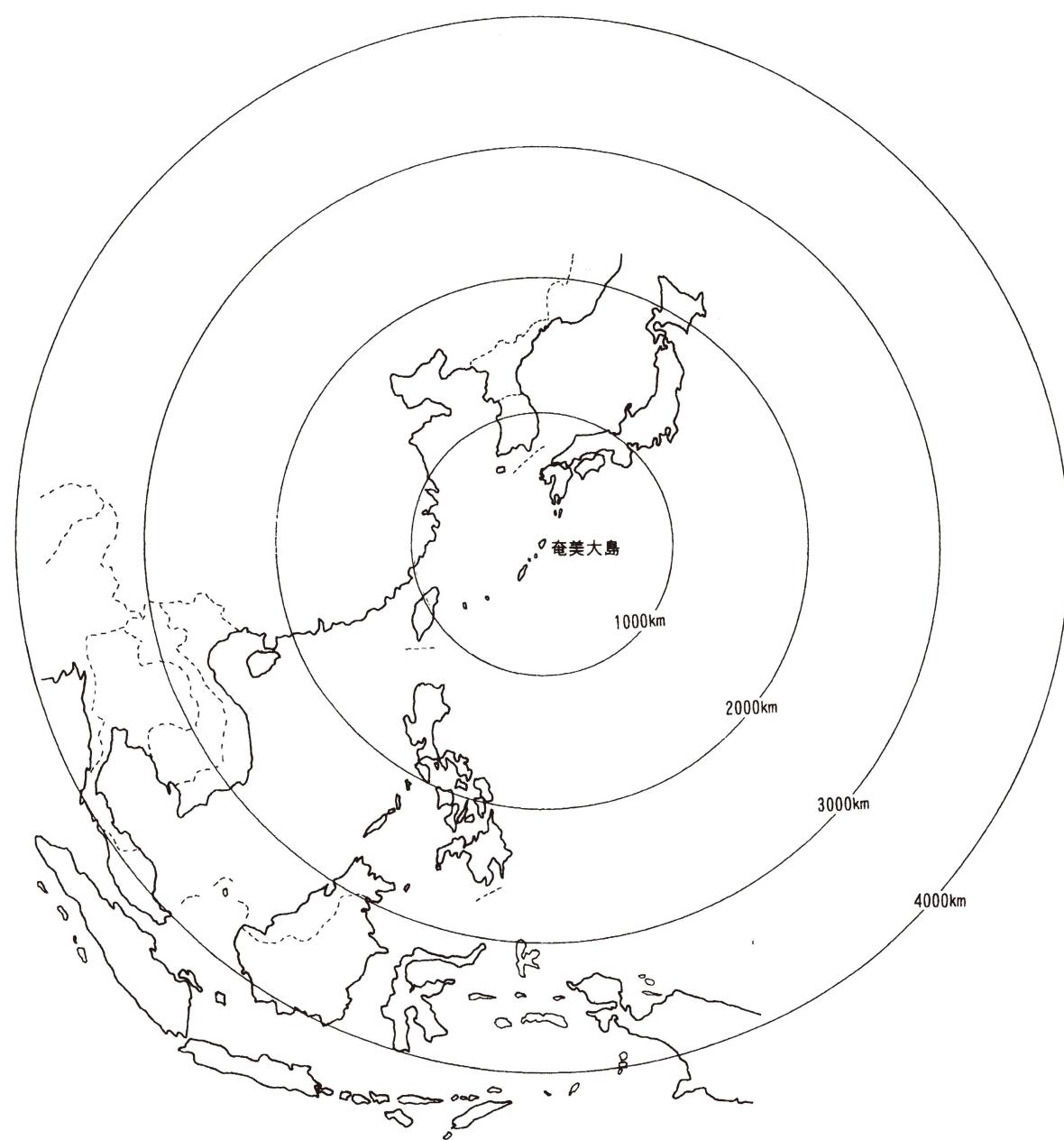
第1節 位置的環境

奄美のグスク出現についてはようやく本格的な発掘調査が行われた段階であり、まだまだ不明な点が多い。グスクを広域的な視点でとらえ、奄美の位置をもう一度再確認してみたい。

南島の文化圏は国分直一によって北部文化圏、中部文化圏、南部文化圏に大別されている。^{注1}(このことは地理的環境で述べることにする) 南島に於ける奄美考古学の視点は縄文時代の土器の北上・南下の問題、弥生時代に於ける貝文化の交流も含めた文化の北上・南下そして、そのルートなど南シナ海まで含めた調査研究の必要性が指摘されている。^{注2} そして、古墳時代から12, 3世紀にかけては南島と中国大陆、朝鮮半島、九州西海岸をとりまく海域が近年にわかつに注目されるようになってきた。7世紀代の『日本書紀』『続日本紀』などの古文書による南島の記述や遣唐使の南島路の航路に関する文献からの研究も注目されている。^{注3, 4} 考古学的には徳之島カムイヤキの発見、奄美のグスクや中世遺跡の調査成果などが上げられる。さらに宇検村倉木崎海底遺跡の発見と調査報告により12, 3世紀の南島と中国大陆、朝鮮半島、九州西海岸域の考古学的動向など新たな視点から考察されてきている。^{注5, 6, 7} 遣唐使のコースはこれまで中国の東海岸から朝鮮半島南岸が正規のコースとされてきた。近年の倉木崎海底遺跡の調査成果や宇検村・龍郷町の海底から引き上げられた碇石の発見や鹿児島県金峰町持株松遺跡などの考古学的調査が増加するにつれ、奄美路は当初からの交易ルートであったのではないかと考えらるようになった。このような交易ルートの拠点となるのは当然何らかの大きな権力および、勢力が存在していたことなどが考えられる。そして、新たな事実の発見などから奄美の置かれている地理的、位置的条件に加え、今回の赤木名グスクの調査から中世の東シナ海をめぐる貿易の拠点が奄美大島のグスク全体に求められはしないか(第3図)。

今回の調査で奄美大島のグスクの特徴が少し明らかになり、新たな問題も提起することになったが、従来の南島の位置図を逆さにして考察してみると奄美の位置が大陸の大きな湾の外周部分に位置していることが良く理解できる(第2図)。台湾から先島、沖縄、奄美、九州西海岸、朝鮮半島西海岸の黄海・東シナ海をとり囲むことになり、奄美のリーフのイノーを感じさせる。そして、12, 3世紀の沈船や海底遺跡やグスク時代の遺跡などが発見されている位置は東シナ海湾の内側に発見されている。

黒潮はこの湾内を左回りに3月から9月まで北上している。この時期は奄美では「トリバイ」(鳥南風)、「ハイヌカゼ」(南の風)、「ボンバイ」(盆の風)などの季節風が強く吹く時期もある(本文のシマの地理と四季と主な民俗行事を参照)。また、9月下旬から2月までは「ミーニシ」(新北風)、「ニシ」(北風)が吹き荒れる。そのことから黒潮と季節風を利用して泉州・福州から台湾・沖縄・奄美と北上することも可能であり、反流に乗って南下することも可能で、奄美の季節風の事例と相違はない。さらに金沢陽はこのことを倉木崎海底遺跡報告書「倉木崎沈船考」の中で「出土した陶磁器から1隻の船の積荷であり、陶磁器の生産地からして福建省付近から夏



1:50,000,000

第1図 南島広域図



第2図 東シナ海逆図



第3図 赤木名グスク位置図

の間に北上した、10月から2月にかけては南下する反流に乗って、台湾から福建省方面に向かったと考えられる。」と記している。このように黒潮を北上・南下することは多くの研究者が指摘するところであり、金沢陽は佐久間重男が「明代の琉球と中国との関係」においてより実証的に論じていることも紹介している。

赤木名グスクの前田川上流には航海のため、風待ちをするマーラン船が待機する「船だまり」と呼ばれている地名も残る。こうした地名の由来もこれと関連するのかも知れない。奄美のグスクの系統やルーツを考察するのに東シナ海域は重要な役割を果たしていることから、これまでと違う視点からとらえる意味で「逆さ地図」にしてみた（第2図）。

第2節 地理的環境

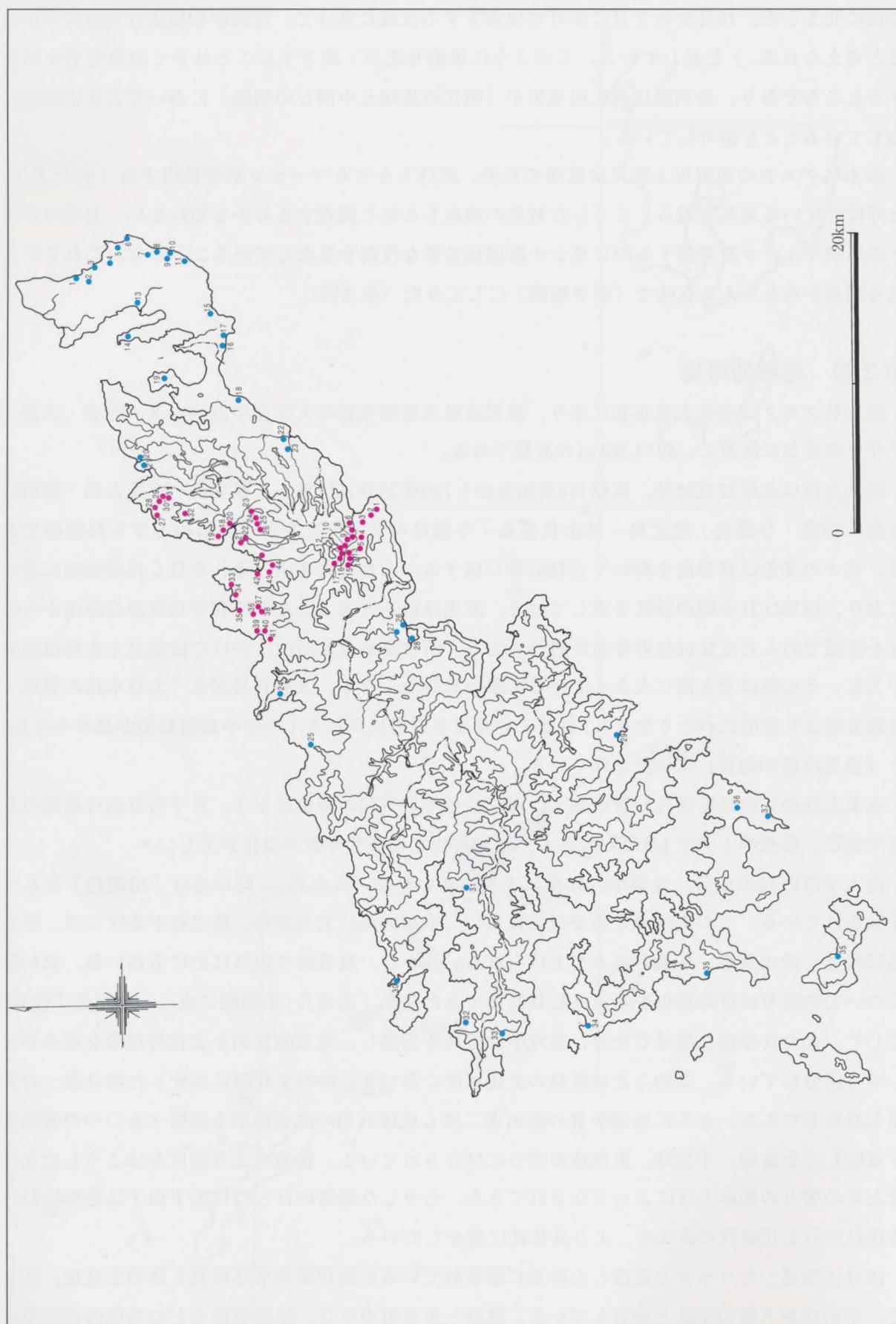
赤木名グスクは奄美大島北部にあり、鹿児島県大島郡笠利町大字里字溜池の又・赤亦・大亦・アサラ亦などに位置し、約74,381m²の面積である。

奄美大島は北緯27度02分、東経128度26分から130度23分に位置し、喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島の8島の有人島をはじめとする島嶼群である。島々の基盤は喜界島を除いて古期岩帯に属する。山地は古生層とそれを貫く花崗岩類になっており、地形は壯年期の特性を示している。^{注10}鹿児島県地質図によると笠利半島東海岸節田から須野を直線で結んだ東側は和野砂岩頁層からなる。明神崎から大刈山にかけては細長く古期花崗岩が入る。その他は北大島に大きく広がる大勝頁岩層からなる。大勝頁岩層は「大島本島の龍郷・名瀬東部より住用にわたり分布し、砂岩より始まり頁岩に終わる4つの小堆積輪廻が認められる」と『鹿児島県の地質』には記されている。

奄美大島の気候は黒潮の影響が強く、海洋性亜熱帯気候の特徴を示す。月平均気温は最高の7月で28℃、最低の1月でも14.3℃であり、年較差12℃前後と年間の変化が乏しい。

南太平洋の島の地形、地質学的分類によると高い島は「火山島」、低い島は「珊瑚島」として分類されている。^{注11}このような分類を奄美においても高い島に大島本島、徳之島があげられ、低い島に喜界、沖永良部、与論の島々が上げられる。しかし、地質的に南島における高い島、低い島についての論考は目崎茂和が新第三紀以前にできた島を「高島」、第四紀に成立した島を「低島」として、より具体的な論考で分け、地理学的差異を指摘し、地質的要因と文化的現象を明らかにして三区分している。^{注12}このことは南島の文化状況に基づき三つの文化圏に区分した国分直一の分類とおなじである。さらに地理学者の藤岡謙二郎も琉球列島の海底地形を横断する二つの割れ目を重視して北琉球、中琉球、南琉球の三つに区分されている。^{注13}南島の文化圏区分はこうした先学者たちの努力の積み上げによってなされてきた。そうした研究のひとつに木下尚子は近年における南島の貝文化研究の成果を、より具体的に紹介している。^{注22}

南島は発達したリーフと発達した砂丘に恵まれているが海岸線の名称は貝と魚の生息域、そして、季節感が人間の生活と密着している。遺跡と魚貝類の生息、植物遺体などの地理的自然環境の研究も用見崎遺跡、湊グスク、フワガネク遺跡などで行われている。^{注14、15、16、17}当グスクでも今回調査報告がなされている。



第4図 奄美大島グスク遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	特徴・出土中国製陶磁器
1	ウーバル遺跡	大島郡笠利町笠利	青磁皿、白磁碗
2	赤峰城	大島郡笠利町笠利	笠利中学校台地全体
3	辺留城	大島郡笠利町笠利	青磁、白磁
4	辺留窪遺跡	大島郡笠利町辺留	青磁雷文帶碗、印花纹碗、白磁、染付碗
5	コビロ遺跡	大島郡笠利町須野	青磁碗、染付碗
6	あやまる城	大島郡笠利町須野	現在、国民宿舎になっている。
7	宇宿貝塚	大島郡笠利町宇宿	青磁通弁碗、青磁盤、染付、白磁玉縁碗
8	宇宿貝塚東地区（だんべ山遺跡）	大島郡笠利町宇宿	青磁同安窯系皿
9	宇宿・高又遺跡	大島郡笠利町宇宿	白磁碗
10	宇宿港遺跡	大島郡笠利町宇宿	青白磁碗
11	万屋城遺跡	大島郡笠利町万屋	青磁皿、輪花皿、青磁碗、口碗、櫛搔文碗、印花纹碗、細連弁文碗盤、白磁玉縁碗、染付、鎬連弁文碗
12	和野トルフ墓遺跡	大島郡笠利町和野	褐釉四耳壺
13	赤木名城	大島郡笠利町赤木名	山の上に屋敷跡がある。
14	サウチ遺跡	大島郡笠利町サウチ	青磁盤
15	土浜ヤーヤ遺跡	大島郡笠利町土浜	染付碗
16	用安湊城遺跡	大島郡笠利町用安	青磁双魚藻文皿、白磁端反碗、青白磁碗、玉縁碗
17	フーグスク遺跡	大島郡笠利町用安	青磁、白磁玉縁碗
18	コシマ遺跡	大島郡龍郷町加世間	白磁
19	白間遺跡	大島郡龍郷町赤尾木	青磁碗
20	嘉渡Ⅱ遺跡	大島郡龍郷町嘉渡	青磁、白磁
21	里遺跡	大島郡龍郷町嘉渡	青碗連弁文磁、盤
22	戸山ヒラキ城遺跡	大島郡龍郷町戸口	青碗連弁文磁、盤、鉢、白磁、黒釉壺
23	戸口城	大島郡龍郷町戸口	平家落人の行盛の居城という。行盛城。山城で空堀などが残る。松元雅明氏の調査で13世紀半ば、15世紀半ばの火災跡が確認された。
24	国直遺跡	大利村国直	白磁皿
25	毛陣貝塚	大島郡大和村毛陣	青磁碗
26	サモト遺跡	大島郡住用村サモト	青磁連弁文碗
27	住用城	大島郡住用村城	青アジの居城。遺構は見当たらない。
28	石原城	大島郡住用村石原	展望台になっている。堀り切りを有する。
29	節子遺跡	大島郡瀬戸内町節子	不明
30	倉木崎海底遺跡	大島郡宇検村倉木崎	龍泉窯産、同安窯系、泉州系
31	部連遺跡	大島郡宇検村部連	青磁
32	屋鈍遺跡	大島郡宇検村屋鈍	青磁盤、褐釉
33	西古見城	大島郡瀬戸内町西古見	アジ屋敷。部落背後の山が城址。
34	実久遺跡	大島郡瀬戸内町実久	青磁
35	西阿室遺跡	大島郡瀬戸内町西阿室	青磁碗、皿、染付
36	諸鈍城	大島郡瀬戸内町諸鈍	加計呂麻島にある。平家落人の資盛の居城という。琉球王朝期、大親の居城。叛乱の際、手々の挾八大目に攻略される。
37	(徳浜城) 名称未定	大島郡瀬戸内町徳浜	サンゴ石垣、掘り切を有する。
38	(請島) 名称未定	大島群瀬戸内町請島	掘り切を有する。青磁、白磁

第1表 奄美大島グスク分布地名表（・青印分）

番号	地区分類	集 落	遺 跡 名 称	通称名称	グスク地名重複	発見年
1	古見方	小 湊	ムエンヤマ（前山）遺跡市街地	トノチュモリ	×	H7
2			名称未定遺跡		×	H7
3			ナーデヤマ（中武山）遺跡		×	JH7
4		前 勝	グスク（城）遺跡	グスク	○	H7
5		西仲勝	名称未定遺跡	テラヤマ	×	S57
6		名瀬勝	シギマタ（杉又）遺跡	タテヤマ	×	H10
7			名称未定遺跡		×	H7
8			ハーベ（赤貝）遺跡		×	H10
9		伊津部勝	名称未定遺跡	アジ屋敷	×	H7
10			グスクバル（城原）遺跡	ターダスク	○	S57
11			名称未定遺跡	タテヤマ	×	H7
12			名称未定遺跡		×	H7
13		西 田	イケバタ（池畑）遺跡		×	H8
14			マスザト（増里）遺跡		×	H8
15		朝 戸	名称未定遺跡		×	H7
16			ダイズゴモリ（大豆籠）遺跡		×	S57
17			名称未定遺跡		×	H11
18	上 方	大 熊	マエビラ（前平）遺跡		×	H8
19			ウシロビラ（後平）遺跡		×	H8
20			名称未定遺跡		×	H8
21			名称未定遺跡		×	H10
22			名称未定遺跡		×	H8
23		浦 上	アリモリ（有盛）遺跡	ウンテラ・シャンテラ	×	S57
24		有 屋	名称未定遺跡	アジ屋敷	×	S57
25			グスク（城）遺跡	グスク	○	H8
26		仲 勝	名称未定遺跡		×	H8
27		有 良	名称未定遺跡		×	H10
28		芦花部	名称未定遺跡		×	H7
29			名称未定遺跡		× ×	H8
30			名称未定遺跡	コクナヤマ	×	H8
31			名称未定遺跡	コウエン	×	H8
32			名称未定遺跡	テーブリ	×	H8
33	下 方	朝 仁	名称未定遺跡		×	H11
34			名称未定遺跡	コウエン	×	H9
35		小 宿	グスク（城）遺跡	ユカリッチュコウエン	○	S57
36			ウサキ（尾崎）遺跡		×	H7
37			名称未定遺跡		×	H9
38			名称未定遺跡		×	H12
39		知名瀬	名称未定遺跡	ハンゴバカ	×	H9
40			名称未定遺跡		×	H8
41			セッペ（節配）遺跡	アジ屋敷	×	H7
42	市街地	金 久	シユバマ（塩浜）遺跡	ヤマトグスク	○	H11
43			マツザト（松里）遺跡		×	H11
44		伊津部	名称未定遺跡	オガミヤマ	×	S43
45			名称未定遺跡		×	H11

奄美大島、名瀬市「グスク詳細分布調査報告書」より
第2表 名瀬市一覧表（・赤印分）

赤木名グスクはこうした時代区分の中北部文化圏の中心的地理条件にあり、北からの文化を受け入れる南島の窓口的役割としてもとらえられる。北に開いた笠利湾の基部部分に位置しており、交易港としても恵まれた地理的環境にあり、グスクを形成する条件などを兼ねそろえているといえよう。

第3節 歴史的環境

赤木名グスクの所在する笠利半島は奄美大島の最北端に位置する南北約15km、東西約4.5kmの細い半島をなしている。笠利半島は高岳（183.6m）をはじめとして、150から170mの大刈山、淀山などの山々が南北に走る小山脈をなし、東西に分けられる。東側と西側では地理的にもかなり異なっている。

東側は奄美大島のなかでも最も遺跡の集中している地域である。山裾から海岸まで緩やかに丘陵が続き、海岸砂丘になる。砂丘もほぼ県道を境に新規砂丘と旧期砂丘に分けられ、遺跡の時代区分も大まかにできる。新規砂丘は道路より海岸沿いで弥生時代併行期から古墳時代併行期の遺跡が多く立地している。道路より山手側の旧期砂丘からは縄文時代から旧石器時代の遺跡が多い。その代表的な遺跡として旧石器時代の喜子川遺跡と道路向かいの古墳時代から奈良・平安時代にあたるマツノト遺跡などがある。^{注18} そして、縄文時代の国指定史跡宇宿貝塚も道路より山手側に位置し、^{注19, 20} 弥生時代相当期の宇宿港遺跡は対面の海岸沿いに位置している。

東海岸砂丘北端の用見崎遺跡から約13km南にある明神崎遺跡までは大小の砂丘遺跡が点在している。グスクにおいては笠利ウーバルグスク、宇宿ダンベ山、万屋グスク、用安湊グスクなどが東海岸沿に立地し、発掘調査されている。

一方西側は山から急峻に海へとつながる。海岸線は深く入り組んでおり、集落は入り組んだ湾の前面の砂丘上にある。集落を形成する砂丘の後方は山合いから海に流れる川で、低湿地をなしている。低湿地は田んぼとして利用され、稻作が盛んであったが今ではサトウキビ畑に変貌している。

西海岸の深い入り江の集落はずれに位置するサウチ遺跡は昭和51年に発見され、昭和52年に笠利町教育委員会によって発掘調査が行われている（縄文時代後晩期から弥生時代前中期併行期）。^{注21} その他先史時代の遺跡は佐仁遺跡などが知られているが、東海岸に比べて極めて少ない。ただし、中世のグスクにおいては屋仁按司グスク、赤木名グスク、喜瀬グスクなど大型グスクが存在しているのである。

注1 国分直一「史前時代の沖縄」『日本の民族・文化』講談社 1959年

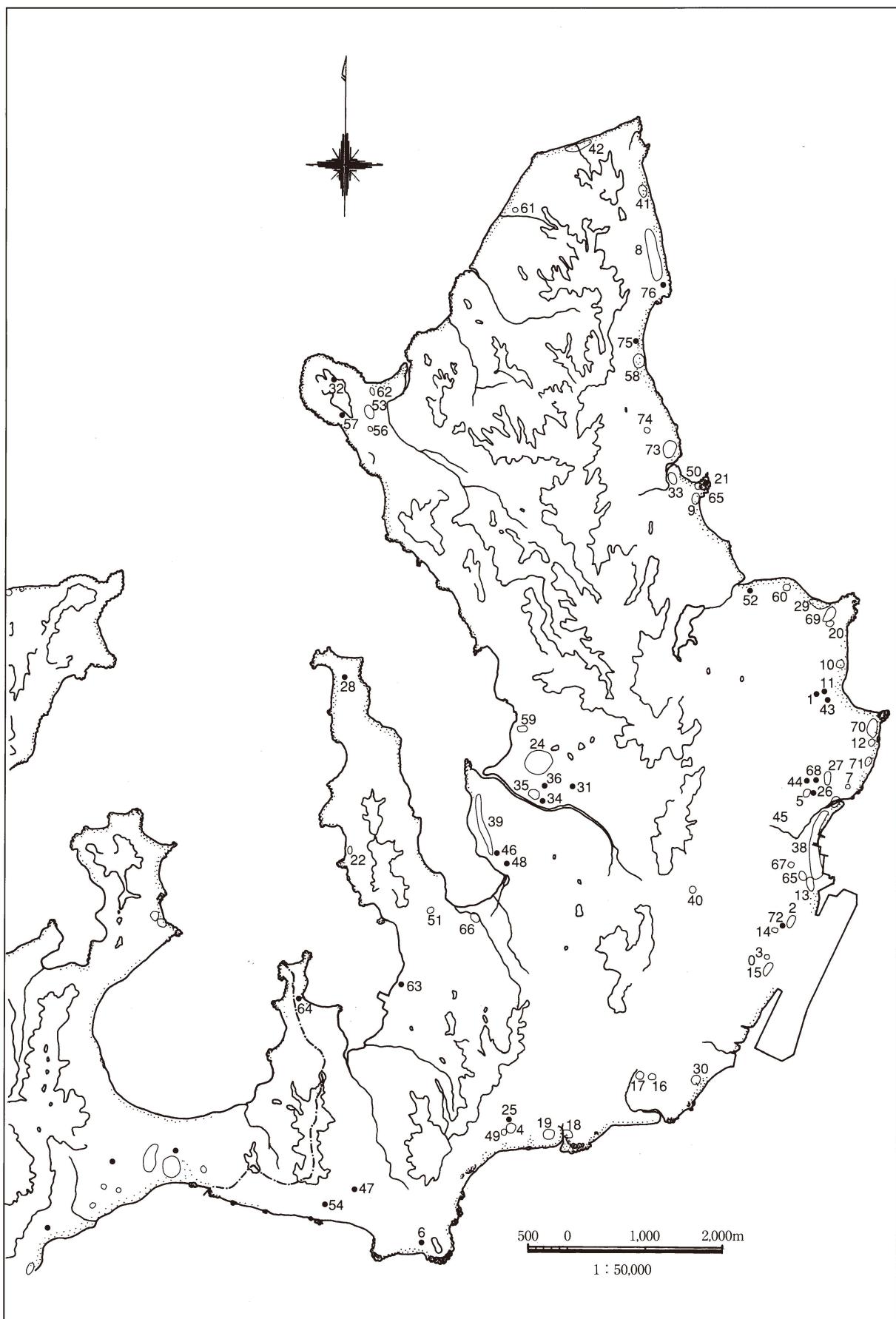
注2 白木原和美「琉球弧と南シナ海」『海から見た日本文化』－海と列島文化10 小学館 1992年

注3 山里純一『古代日本と南島の交流』吉川弘文館 平成11年

注4 中村明藏『ハヤト・南島共和国』春苑堂出版 平成8年

注5 青崎和憲・伊藤勝徳『カムイヤキ古窯跡群』伊仙町教育委員会－文化財発掘調査報告書（11）－2001年

-
-
- 注6 中山清美「発掘された奄美のグスク」『先史学・考古学論究』」—白木原和美先生古稀記念献呈論文集—
- 注7 高梨 修『奄美大島名瀬市 グスク詳細分布調査報告書』名瀬市教育委員会 2001年
- 注8 田村晃一・手塚直樹・金沢陽・中山清美・元田信有・足立拓郎・林克彦『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村教育委員会 1999年
- 注9 kiyomi Nakayama 「Castle Sites (Gusuku) on Amami Island」『The Indo - Pacific Prehistory Association』中華民国中央研究院 2002年
- 注10 波多江信広・露木利貞・郡山 栄『鹿児島県の地質』鹿児島地質調査研究会、内外地図株式会社
- 注11 高山 純・甲斐山佳子『珊瑚礁の考古学』大明堂 平成5年6月
- 注12 目崎茂和『南島の地形—沖縄の風景を読む』新報出版 1988年
- 注13 藤岡謙二郎『新日本地誌ゼミナールⅦ 九州地方—含南西諸島』大明堂 1985年
- 注14 樋泉岳二「用見崎遺跡出土の脊椎動物遺体」「用見崎遺跡」熊本大学文学部考古学研究室 1997年
- 注15 黒住耐二「1997年の用見崎遺跡調査で得られた貝類遺存体(予報)」「用見崎遺跡」熊本大学文学部考古学研究室 1997年
- 注16 高宮広土「用見崎遺跡(奄美大島大島郡笠利町)におけるフローテーション法の導入とその成果について」『用見崎遺跡』熊本大学文学部考古学研究室 1997年
- 注17 名島弥生『奄美大島・小湊フワガネク遺跡における漁労活動について』慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻民族学考古学分野修士論文2001年
- 注18 中山清美「奄美考古学研究の現状」『古代文化』第52巻代号 平成12年
- 注19 河口貞徳・出口浩『宇宿貝塚』笠利町教育委員会
- 注20 『宇宿港遺跡』笠利町教育委員会
- 注21 河口貞徳・出口浩・本田道輝『サウチ遺跡』笠利町教育委員会 1978年
- 注22 木下尚子『先史琉球の生業と交易』－奄美・沖縄の発掘調査から－ 熊本大学文学部 2002年



第5図 笠利町遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代
0	和野トフル墓	和野長浜金久	近世
1	喜子川遺跡	マツノト	旧石器・縄文
2	下山田遺跡	万屋下山田	縄文、中世
3	ケジ遺跡	万屋ケジ	縄文
4	土浜第2遺跡	土浜	縄文
5	宇宿小学校構内遺跡	宇宿166-口	縄文
6	明神崎遺跡	用安字入瀬	弥生
7	宇宿港遺跡	宇宿港	弥生
8	用長浜遺跡	用長浜	古墳
9	辺留窪遺跡	辺留窪	古墳、中世
10	崎原遺跡	須野字崎原	古墳
11	マツノト遺跡	喜子川	6から12世紀
12	土盛遺跡	土盛	古墳
13	万屋遺跡	万屋	古墳
14	泉川遺跡	万屋字泉川	古墳から平安
15	長浜金久I、II、III	和野字長浜金久	縄文から平安
16	節田ヨフ井遺跡	節田ヨフ井	中世
17	節田大漆遺跡	節田大漆	中世
18	節田立神遺跡	節田	古墳
19	土浜遺跡	土浜	縄文
20	あやまる第1遺跡	須野字崎原	
21	辺留城	辺留城	中世
22	鯨浜遺跡	鯨浜	中世
23	前金久遺跡	宇宿字前金久	近世
24	赤木名城	里溜池の又ほか	中世
25	イャンヤ洞窟遺跡	土浜イャンヤ	縄文、弥生
26	宇宿高又遺跡	宇宿高又	縄文
27	宇宿貝塚	宇宿大籠	縄文、弥生、中世
28	サウチ遺跡	喜瀬字サウチ	縄文、弥生
29	あやまる第2貝塚	須野字大道	縄文、弥生
30	ナビロ川遺跡	和野字ナビロ川	古墳
31	赤木名観音寺跡	里川道326ほか	近世
32	蒲生崎	屋仁アヤンギ1550	
33	大島奉行所跡	大笠利字富城88	近世
34	大島代官屋敷	里11	近世
35	大島代官屋敷	里12	近世
36	大島代官屋敷	里910	近世
37	アマンデー	竹弥703	
38	戦浜	宇宿字前金久265	近世
39	津代古戦場	大字手花部津代	近世
40	ハーデー	万屋川原勝	
41	用見崎遺跡	用見崎	古墳
42	ヤドリ浜遺跡	佐仁	古墳
43	土盛第2遺跡	土盛	古墳
44	宇宿箱型石棺墓	宇宿	近世
45	城間トフル墓	城間	近世
46	アナバリトフル	手花部穴帳346	近世
47	蘭家の庭園	用安字当原1529	
48	手花部墓石	手花部	
49	土浜ヤーヤ遺跡	土浜イャンヤ	旧石器・縄文
50	富城	大笠利字富城	中世
51	大和城	手花部字大和原	中世
52	崎城	須野字崎城	中世
53	按司城	屋仁字崎山	中世
54	用安湊城	用安字湊城	中世
55	万屋集落	万屋	古墳
56	アニ城	屋仁蒲生	中世
57	ヤンアジガナシ墓地	屋仁蒲生	
58	用安良川遺跡	用安良川	古墳
59	船倉	船倉	
60	コビロ遺跡	辺留字コビロ	古墳
61	佐仁遺跡	佐仁	古墳
62	屋仁遺跡	屋仁	古墳
63	喜瀬石棺墓	喜瀬	
64	一屯ノロ墓	一屯	近世
65	辺留城箱型石棺墓	笠利字富城	近世
66	手花部城	手花部	中世
67	万屋城	万屋字城	中世
68	宇宿小学校第2遺跡	宇宿166-口	縄文
69	アヤマル城	須野字あやまる	中世
70	大瀬第1遺跡	宇宿字大瀬	古墳
71	大瀬第2遺跡	宇宿字大瀬	古墳
72	下山田トフル	万屋字下山田	近世
73	笠利ウーバルグスク	大字城927-1	中世
74	笠利トフル	大笠利	近世
75	用墓地箱型石棺墓	用	近世
76	用風葬墓跡	用	近世
77	佐仁城	佐仁	中世

第3表 遺跡分布地名一覧表

附節 「シマの地理と四季と主な民俗行事」

大島本島は古生層の岩石によって大部分が構成されており、全島の約85%は森林及び原野に覆われている。地下資源はマンガン、銅、金、銀、石灰石等があり、戦前まで採掘が行われていた。笠利町楠野には金山跡、龍郷町屋入には金山、銅山跡が今も残る。屋入の鉱山跡は戦時中に武器弾薬庫としても利用されており、入り口洞窟部分はコンクリートで補強された部屋がいくつもある。

天然記念物ではアマミノクロウサギ、ルリカケス、アカヒゲなどが指定されているが大島本島と徳之島、沖縄に生息している猛毒ハブは保護されるのではなく、逆にハブ撲滅運動がなされている。

気候は亜熱帯海洋性で四季を通じて温暖多雨である。本土のように四季は鮮やかでないが動植物などにその四季を見ることができる。

春（2月下旬～4月上旬）

平均気温も15℃を超えるようになるが冬の名残がまだ残り、ときおり、季節風が吹き荒れる。植物ではヒカンザクラや赤いツバキの花などが咲き誇る。そして、これらの花には“トリバイ”（鳥南風）にのって渡ってくるヒヨドリやメジロなどが花の蜜を吸う。3月上旬頃は本土で言う菜種梅雨と同じように奄美では“サクラナガシ”といわれ、雨が多い。この頃から桜も葉桜に変わる。

ヒヨドリなどの渡り鳥は奄美の産業のひとつであるタンカンの収穫時期と重なり、近年はこのタンカンの味を覚え、農家が困り始めている。この時期はまた“キブツメ”（木萌芽）と呼ばれ、シマの野山が一斉に新緑に変わっていく。平均気温も20℃になり、「春雷とともにハブも目覚める」といわれ、ハブも活動期にはいる。

「サンガツセック」女の節句をはじめ四月の「ハマオレ」行事でカシャ餅などを作つて一重一瓶のごちそうを持ち寄つて健康と豊作などを祈りながら一日中遊ぶ。「むしあそび」といつて畠の虫を捕つてきて葉っぱに包んで海に流すと作物に虫が付かないとも言われる。今では各集落も土、日にあわせた行事になり、簡素化されはじめている。

初夏（4月中旬～5月上旬）

天気も比較的穏やかで晴天が続く。野山は新緑に覆われ、「ハハヤマ」と呼ばれる。これは「ハハモモ」（もっこく）の葉が鮮やかな濡れた朱色のように見え、山々が赤く目立つため、初夏の代名詞として呼ばれている。また、グラジオラスの赤やテッポウユリの白なども映え、一番美しい季節でもある。野鳥などは子育てに忙しく、ここ数年ルリカケスは3月頃から民家の軒下にも巣づくりを行つてゐる。

夕方から夜になるとこの時期はハーガンなども山から一斉にニヤトジリ（川尻）に降りてきて産卵をはじめる。5月節句は大和で言う端午の節句になる。シマでは菖蒲とヨモギを軒下につるすことから菖蒲の節句とも言われる。神棚や墓前にも生けられる。ここ近年は大和と同じように鯉のぼりなどを上げる家庭が一般的になつてきつた。

梅雨（5月中旬～6月下旬）

揚子江流域で梅の実が熟する頃に降る雨なので「梅雨」と呼ばれている。奄美ではこの時期をナガシ「長雨」と呼んでいる。この時期はハイヌカゼ「南の風」ともいわれ、南の季節風が吹き荒れる。ナガシも終わり頃になるとアラボエ「新南風」と呼ばれる季節風が強く、晴っていても海はシケの日々が続く、このアラボエが終わるとシマはいよいよ本格的な夏本番を迎える。

夏（7月上旬～9月上旬）

野山はコンロンカの白い花やゲットウの花、ソテツの雄花などがニヨキニヨキと出始める。集落海岸近くのデイゴは真っ赤な花が咲き乱れるとナガシも完全にあがり、水平線や山際には空の青、海の青、山の青に入道雲の白が冴える季節である。南海の楽園を思わせる唯一の時期もある。

七夕も終わり、旧暦の7月13日～15日はお盆に当たる。この時期に季節風や台風などがやってくるがこれを「ボンアレ」とか「ボンバエ」となどと呼び台風のことを言う。

アラセツ8月最初の丙の日に行う行事で「こうそ祭り」ともいわれる。稲刈りも終わり、豊年祭りでもある。新米で作ったミキを作つてカシキ（赤飯）とともに火の神様に供えられ、夕方から村中の家々を回つて踊り狂う。一軒一軒回るので三日三晩踊り続けるためかなりの体力を必要とした。各家々では採りたての魚やごちそう焼酎などでもてなす。現在では広場踊り、グループ踊りといって一軒一軒回らずに夜を徹して踊り狂うということはなくなつた。少し寂しい。

秋（9月中旬～11月下旬）

9月中旬までは平均気温31℃と残暑が厳しい日々であるが秋雨前線と台風に見舞われる日が多くなる。2000年9月12日は南太平洋あたりで発生した大型台風が日を重ねるにつれて奄美・沖縄に接近してきた。日本列島には秋雨前線が停滞し、大陸からは暖かい高気圧、南からは台風14号の湿った気圧が日本列島に集中する形になり、中部日本は観測史上記録的な大雨で大きな被害をもたらしている。

シマでは冬の季節風のことをニシと呼んでいる。最初のニシカゼを「ミィーニシ」（新北風）と呼ぶ。このニィーニシにのってサシバなどの冬鳥が渡ってくる。野山はススキの穂で覆われるようになる。昔はこのころに茅やススキを刈り込んでかやぶき屋根を葺いていたと言うが今ではほとんど見られなくなった。台風も季節風もない夏日が10月下旬から11月初旬にかけて穏やかな天候に1週間ぐらい恵まれる。この時期は「ノウタグ」（糸朽）といつてヒュースイユ（シイラ）などの回遊魚がよく釣れはじめめる。糸が朽ちるまでつれると言うことからノウタグと呼んでいる。そしてやがて秋の終わりを告げる所以である。

冬（12月上旬～2月中旬）

大陸からの発達した移動性高気圧で強い北風が吹く。西高東低の冬型である。アラレも降る日がある。気温も12℃前後になると越冬するチョウ「リュウキュウアサギマダラ」の集団越冬が各地で見られる。森ではゴゴメキランやチケイランなどの珍しいランも古木に付着して小さな花を咲かせる。

このように季節感の薄いシマではあるが動植物にはっきりと見ることができる。このような奄

美大島の四季を文化の色にたとえると何色だろうかと親しい仲間たちと話した。結論は「グレー」であった。全体的な季節感からすると梅雨明け後約1ヶ月の間に見せる「青い空」、「青い海」、「白い砂浜」など……はこのグレーの世界が強いから引き立つことでもある。このことからしても、まさに奄美大島の文化の色は「グレー」ということに同感である。

この原稿は『宇宿貝塚』－ふるさと歴史の広場整備事業報告書－「シマの地理と四季と主な民俗行事」に加執した。

参考文献

笠利町教育委員会・跡見女子大学「用の民俗」1982年

笠利町教育委員会・跡見女子大学「宇宿・城間・万屋の民俗」1983年

笠利町教育委員会・熊本大学「佐仁の民俗」1984年

大島支庁「奄美群島の概況」平成10年度

仲程正吉 編集「郷土のくらしと文化」新星図書出版 昭和56年2月

中山清美「シマの地理と四季と主な民俗行事」『宇宿貝塚』－ふるさと歴史の広場整備事業報告書－ 笠利町教育委員会 2001年3月

第2章 調査にいたる経過

第1節 調査にいたる経過

赤木名グスクは1986年に「鹿児島県の中世城館跡」調査が県内の文化財保護審議委員会や専門家によって踏査されたのがはじまりである。^{注1}赤木名グスクの調査を担当された当時の笠利町文化財保護審議委員岡山隆二と助手を努めた中山清美が掘切を有確認した。岡山は町内の文化財全般に詳しく、昭和47年に発行された『笠利町誌』の執筆委員でもあった。当時から赤木名グスクとしての言い伝えが残っていたと言う。字名は「溜池の又」などになっているが通称「赤木名グスク」として地元の人々から親しまれていることから報告書に「赤木名グスク」と記載して提出した。当時から掘切は確認されていたが遺物の確認がなく、山全体は大木などの木々に覆われていた。わずかに日の差し込む場所はブッシュと竹に覆われ、足を踏み入れるのがやっとであった。奄美に生息する猛毒ハブの危険もかえりみず、三箇所の堀切を確認して山を降りた。

その後、沖縄から奄美大島のグスク踏査に知念勇、名嘉正八郎、當間嗣一、安里嗣淳、中村愿、岸本義彦、池田榮史など多くの学者や研究者が毎年のように訪れ、多くの助言を頂くことができた。鹿児島や本土からも同様に鹿児島県文化財課の職員をはじめ、三木靖、永山修一、白木原和美、木下尚子、小畠弘巳、田村晃一、手塚直樹など多くの方々をはじめ、調査期間中は文化庁からも来て頂いた。

その間赤木名グスクは沖縄のグスクと比較され、「堀切を有するグスク」として沖縄県立博物館などで紹介され、注目を集めようになった。そして、その後の踏査でグスク入り口附近から青磁の低部を1点採集した。

1998年に町教育委員会は奄美北部に「堀切を有する」貴重なグスクとして重要遺跡の確認調査とグスクの本格的な地形測量を目的とした調査を鹿児島県と文化庁に申請書を提出した。その結果、1999年（平成11年）から2003年3月まで4年間かけて地形測量と発掘調査、整理報告書の作成を行うことができた。

注1 鹿児島県教育委員会『鹿児島県の中世城館跡』 鹿児島県教育委員会1987年

第2節 調査組織

調査団長	笠利町教育委員会教育長	福元廣一（平成11～12年12月まで）
	笠利町教育委員会教育長	中村武秀（平成12年12月～14年度）
調査責任者	笠利町生涯学習課長	諏訪 東（平成11～14年度）
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館副館長	中山清美（平成11～14年度）
調査指導助言者	青山学院大学教授	田村晃一（平成11年度）
	文化庁文化財調査官	小林 克（平成11年度）
	鹿児島県文化財課係長	戸崎勝洋（平成11年度）
	沖縄県公文書資料室	安里嗣淳（平成11年度）
	文化庁文化財調査官	臼杵 眞（平成12年度）
	鹿児島県文化財課	児玉健一郎（平成12年度）
	沖縄県埋蔵文化財センター所長	知念 勇（平成12年度）
	鹿児島国際大学教授	三木 靖（平成12, 13年度）
	青山学院大学教授	手塚直樹（平成13年度）
	沖縄県北谷町文化課	中村 愿（平成13年度）
	鹿児島県埋蔵文化財センター	堂込秀人（平成13年度）
	文化庁文化財調査官	坂井秀弥（平成13年度）
	鹿児島県埋蔵文化財センター	長野真一（平成14年度）
	沖縄県立博物館長	當眞嗣一（平成14年度）
	熊本大学名誉教授	白木原 和美（平成14年度）

調査作業員

（平成11年度）発掘作業員

米田静夫，米田慎一郎，安田博寿，山田忠信，泉扶代子，竹田あや子，西村仁美，
栄喜美代，今里みの子，中村幸子，今里えつ子，川畑節子，大茂千枝子

（平成11年度）整理作業員

諏訪しげみ

（平成12年度）発掘作業員

尚師義久，泉扶代子，日高しおり，加茂川路世，前田寿子，朝田久一，山田忠信，
米田静夫，丸田貴之，平島甚幸

（平成13年度）発掘作業員

諏訪貴彦，太平了一，加茂川路代，泉扶代子，平清志，米田静夫，山田忠信

（平成13年度）整理作業員

加茂川路代，泉扶代子，諏訪貴彦

（平成14年度）発掘作業員

植田康夫，滝澤裕一，諏訪貴彦，栄安清，米田静夫

(平成14年度) 整理作業員

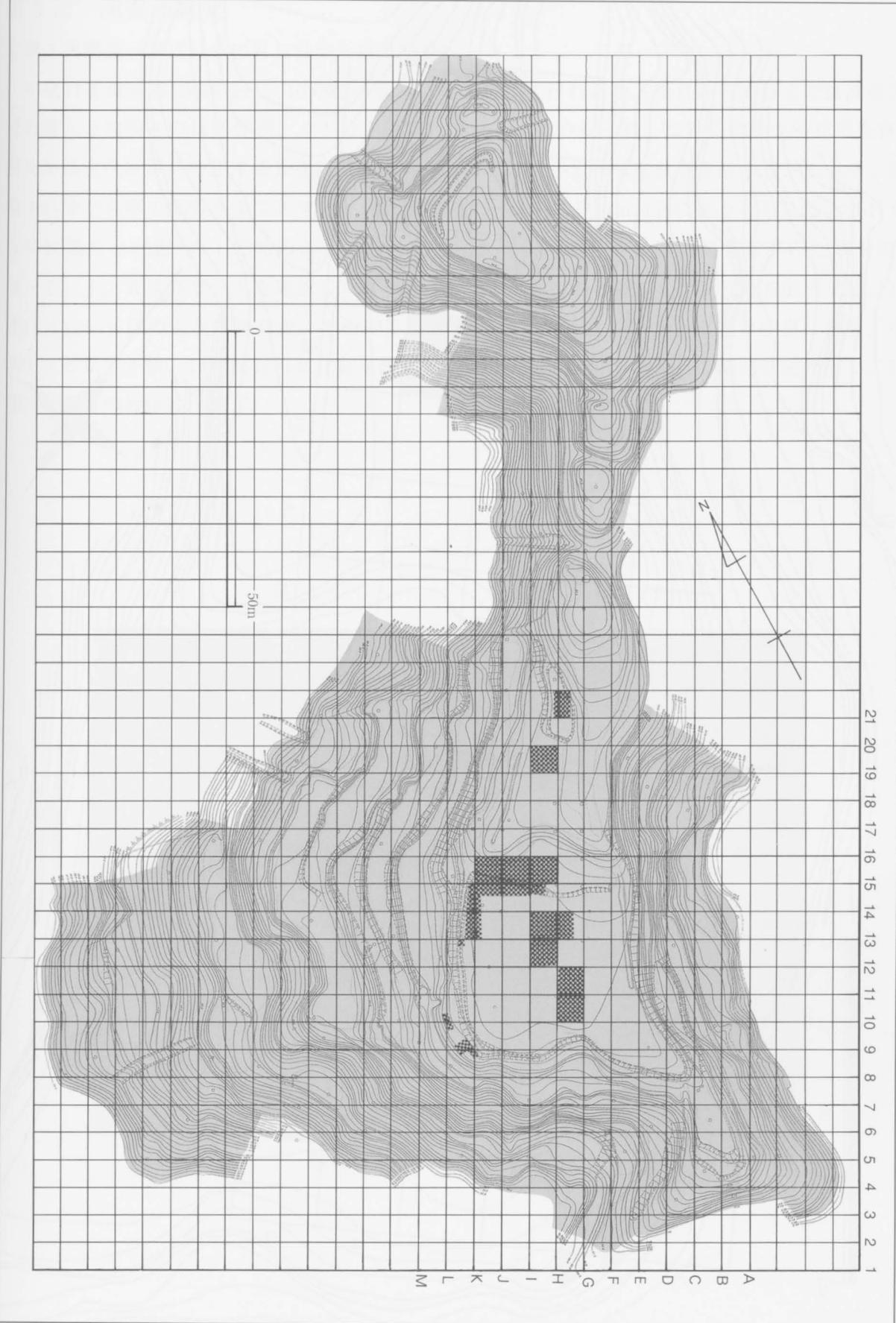
坪山俊博, 加茂川路代, 岡崎弥生

(平成14年度) 考古学調査員

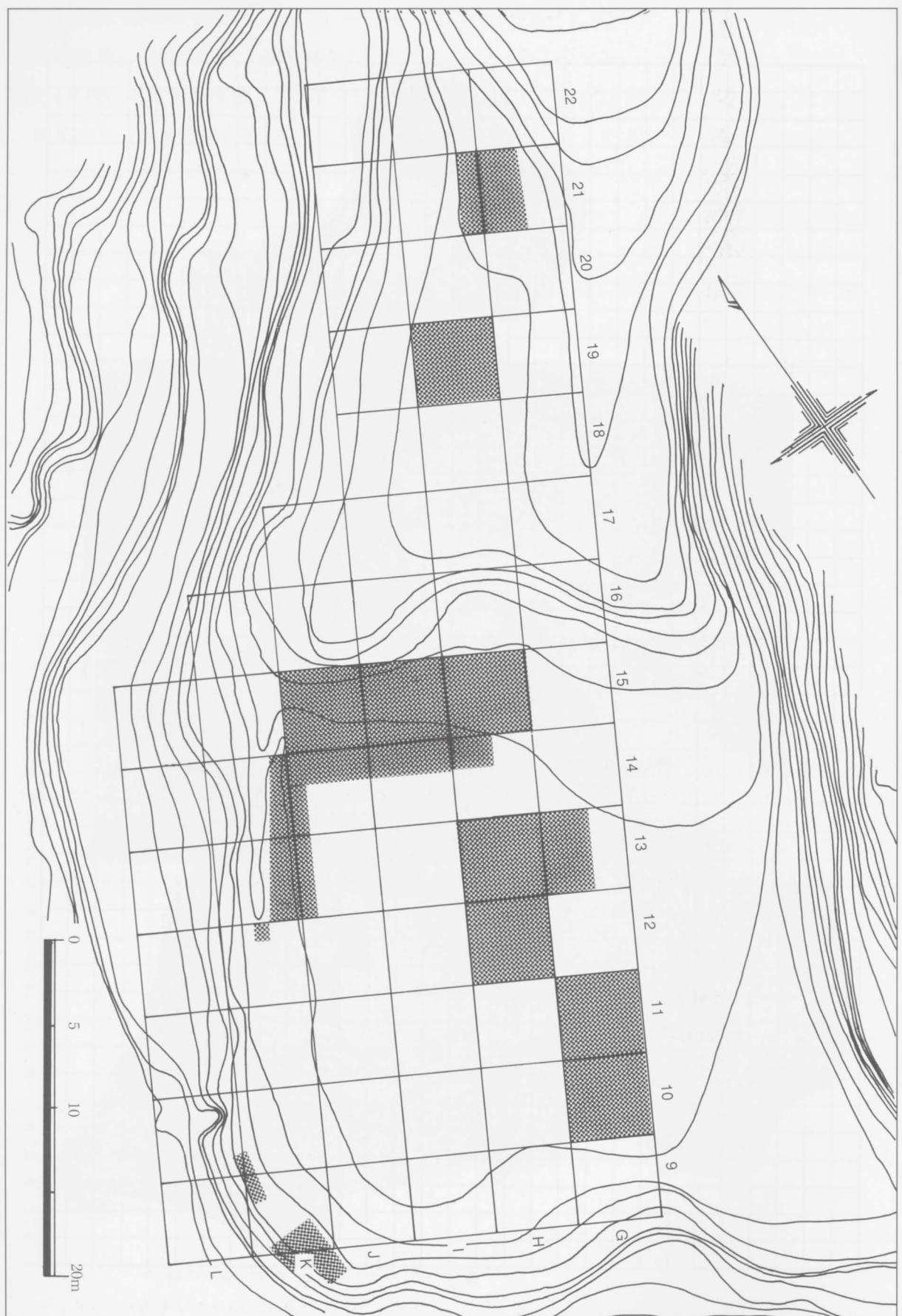
新里亮人 (熊本大学大学院生)



くつろぐ作業員さん



第6図 赤木名グスク・グリット配置図



第7図 赤木名グスク調査区域図

第3節 調査の概要

第1次調査（平成11年10月12日から11月30日）

平成11年度の第1次調査は、10月12日から11月30日まで行われた。12日から20日までは調査器材の搬入と曲輪1の伐採作業、グリット設定後発掘をはじめる。21、22日文化庁小林克調査官、鹿児島県文化財課戸崎勝洋係長視察に訪れる。22日は節田小学校家庭教育学級の皆さん見学。曲輪1部分から第1堀切りまでトランシットでセンターラインを10mおきに杭を打ち込む。25日から平板測量を200分の1で始める。28日青山学院大学教授田村晃一先生調査指導のため来現。14-I, J, Kよりピットを確認し、掘り始める。ピット内からカムイヤキと滑石出土する。11月18日12-K区の土壙断面調査、平板測量は50cmコンタをいれる。19日町教育委員、議員、中学生など見学多数。11月26日町文化財保護審議委員会視察に訪れる。29日土壙部分埋め戻し。11月30日器材の片付け、終了。



笠利町文化財保護審議委員視察



第8図 1999年調査区域図

第2次調査（平成12年10月17日～12月21日）

第2次調査は10月17日より始める。器材搬入と伐採作業を行う。1年間の雑草を刈る。初年度と違って作業はやりやすいが相変わらず、やぶ蚊が多い。昨年に続き地形測量を行う。斜面部分が急なため要注意。この部分も小さな雑木を伐採する。10月27日北側斜面を伐採中に、落ち葉の腐葉土下から石が多く出土する。石垣の可能性あり。台をなす部分もはっきりとしてきた。石垣と台遺構の発見である。さらに縦掘り3つも確認する。11月7日、文化庁臼杵勲調査官、鹿児島県文化財課児玉健一郎主事視察のため来現。北側急斜面は命綱をつけての作業を行う。11月20日、沖縄県の知念勇・鹿児島国際大学三木靖両先生調査指導のため来現。曲輪2の確認調査で遺構が検出される。記録写真4×5の撮影も行う。10, 11-G区の調査を行う。赤土の下にレキ群が出土する。12月16日、東側斜面の測量にはいる。沖縄から名嘉正八郎氏、宮城弘樹氏現場に訪れる。19日鹿児島県埋蔵文化財センター堂込秀人氏旧石器の可能性が出てきた11-G区の調査を行う。12月21日、器材をまとめて山を降りる。



三木靖氏（左）と知念勇氏（右）



第9図 2000年調査区域図

第3次調査（13年10月24日～12月18日）

第3次調査は地形測量に重点をおいた。ゲスクの全体像が見えるように、もう少し範囲を広めた地形図がほしいと1昨年度の調査指導などもあり、規模を広めて行う。毎日、測量予定地の雑木の伐採班と測量班の2班に分かれて作業を行う。50cmコンタで測量を行うためレベル移動も大変な作業である。伐採作業を行い、新たに西側斜面に「腰曲輪」を確認する。添え曲輪、縦掘りも確認される。地道に雑木を伐採して50cmコンタによる地形の変化を見ることができ、新たな発見につながった。10月29日、文化庁坂井秀弥文部技官現場を視察される。10, 11-G区旧石器と思われる礫層の下を調査する。チャート出土する。

13, 14-J, K区部分の土壌内側に柵列などがないかの確認をおこなう。さらに8, 9-J, K区の添え曲輪部分にトレンチを設定する。12月5日12, 13-H, J区の埋め戻しを行う。12月18日東側斜面の地形測量を終了して器材を片付ける。

第4次調査（平成14年8月2日から3月14日）

昨年の追加調査である。19, 20日と草刈をおこなう。今年度は報告書作成の為現場作業は昨年行えなかった旧石器部分の地層の確認調査をおこなう。25日、11-G区東側セクションと南側セクションをきれいにする。熊本大学助教授小畠弘己氏調査に参加。1m×2mトレンチを設定して礫層下を清掃する。セクション部分をきれいにするためマージ層まできれいにする。土層断面にチャート剥片確認される。26日鹿児島県埋蔵文化財センター長野真一氏参加。笠利町松元信光君、龍郷町松村智行君なども参加して頂く。その他にも奄美大島の考古学調査に来島された県本土の研究者もボランティアで参加された。27日、土層サンプリングを行う。後日、埋め戻しを行い、調査を終える。



第4次調査 2002年の旧石器の調査



第10図 2001・2002年調査区域図

第3章 調査の成果

第1節 地形図に見る赤木名グスクの成果

名称

赤木名グスクの地形図は最大幅部分（14ライン、東西）が約125m、最長部分（Hライン、南北）が約220mの約27,000m²の地形測量に3年を費やした。約27,000m²はこれまで1,000m²を小規模グスク、1,000～5,000m²を中規模グスクとして沖縄ではとらえられている。^{注1}そのことから比べると赤木名グスクは大型グスクに位置づけられる。

赤木名グスクは当初平場と堀切、堅堀などを有する奄美の特徴を持つグスクである。^{注2}として『鹿児島県の中世城館跡』に紹介されている。その後沖縄・奄美の文献に度々紹介される。

1999年度の初年度の調査では1の平場（曲輪1）、2の平場（曲輪2）、堀切、台を有し、西側には江戸時代の「隠れ畠」が残る。として紹介した（第11図）。2000年の調査でさらに雑木等の伐採を行い、地形測量を補足した。その結果「隠れ畠」としていた部分は主郭（曲輪1）部分を囲むようなものと部分的に造成されたものの2タイプが確認された。曲輪1、2（主郭部分）を取り巻く壁面の高さ、長さなどの特徴から前者を「帶曲輪」とした。そして、部分的に独立した半円月状に造成された部分、後者を「腰曲輪」として区別した。（これらの名称については鹿児島の三木靖・沖縄の當眞嗣一両氏の教示を参考にした。）

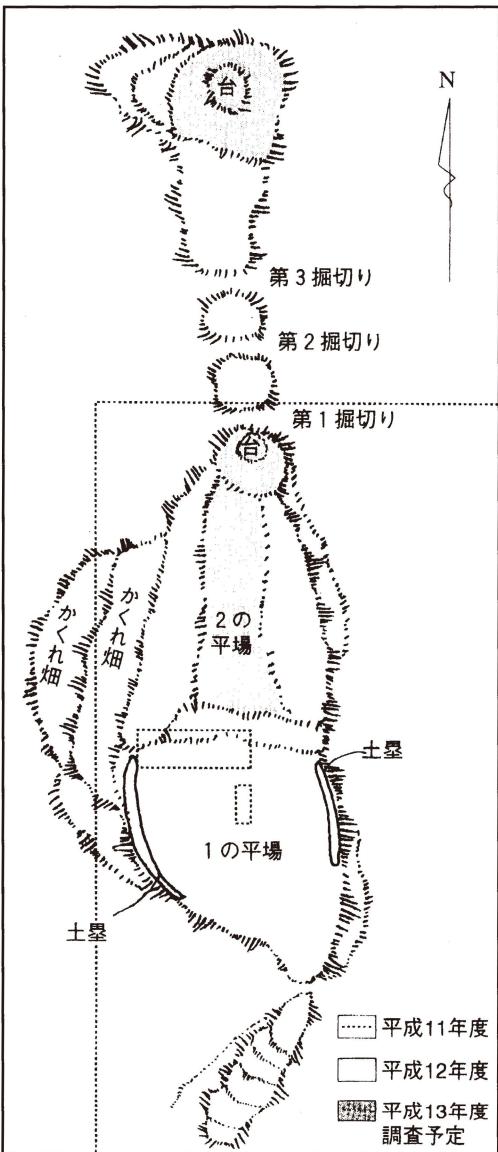
2001年の調査では8、9-J、K区からカムイヤキや青磁などが出土している。築城時の帶曲輪を廃城後、「隠れ畠」として利用されたと考えれば古老の語る隠れ畠としての伝承とも結びつくことになる。

調査の成果は年々新たな成果が得られた。50cmコンタの測量を行い、雑木をはじめ、落ち葉や腐葉土を退けて地形観察を行ったことが遺構の発見に功を奏した。

グスク機能全体の地形図が終了したことからこれまでの各名称を統一してまとめる必要性が生じてきた。沖縄でよく使われる名称を参考にしながら中世城館での機能・用途的な名称を当て、第12図のような縄張名称図を作成した。

名称説明

- ・ 曲輪（くるわ） = グスクの山において平らなところ（平場、ひらば）があり、そのまわりに土壘がある。防御された削平地としてとらえ曲輪とした。今後全体の発掘調査が進めばさらに、グスクの中心とした機能があきらかになり「主郭」として位置づけられよう。
- ・ グスク道（城道） = 土壘の外側に幅約1.2mが南側から西側にかけて土壘と平行に帯状をなす部分をグスク道とした。曲輪としては機能的にも幅が狭く、土壘外側と平行になっており、通路的な役割も考えられることも考慮した。いずれ、発掘調査によってあきらかにされることだが、ここでは現地形を観察した所見である。なお、曲輪か堀切へ抜けるような小さな小道もいくつか観察できる。



第11図 1999年作成赤木名グスク縄張略図

曲輪ひとつひとつがグスクの機能を持つものであり、これを総称したのを「グスク」としてとらえた。これもいすれ発掘調査によって明らかにされよう。

- ・ 切岸（きりぎし） = 主郭などの曲輪周辺の斜面を人工的に切って急峻にし、登りにくくすることを切岸としている。ここでは曲輪1, 2, 3との間が急峻になっている場所があり、その部分を指す。1・2mの低い場所や5・6mのやや高い場所もある。曲輪を造るとき切岸も同時に造られたものと考える。
- ・ 腰曲輪（こしぐるわ） = 曲輪（主郭）の東西斜面、特に西側斜面に有し、要所々に地形の緩やかな場所を半月状、または方形状に掘り込んで整地されている。曲輪の防御施設として帶曲輪とセットに考えられる。ここではあきらかに帶曲輪と離れて独立している部分もあるため、「腰曲輪」とした。要所を見張り場的に防御する場所と考えた。
- ・ 竪堀（たてぼり） = 西側斜面に幅約2mが溝状に延びている。斜面を回り込んでくる敵を防ぐのに効果的だとされている。我々も実際に縦に延びる竪堀の地形測量を行い、ポールを

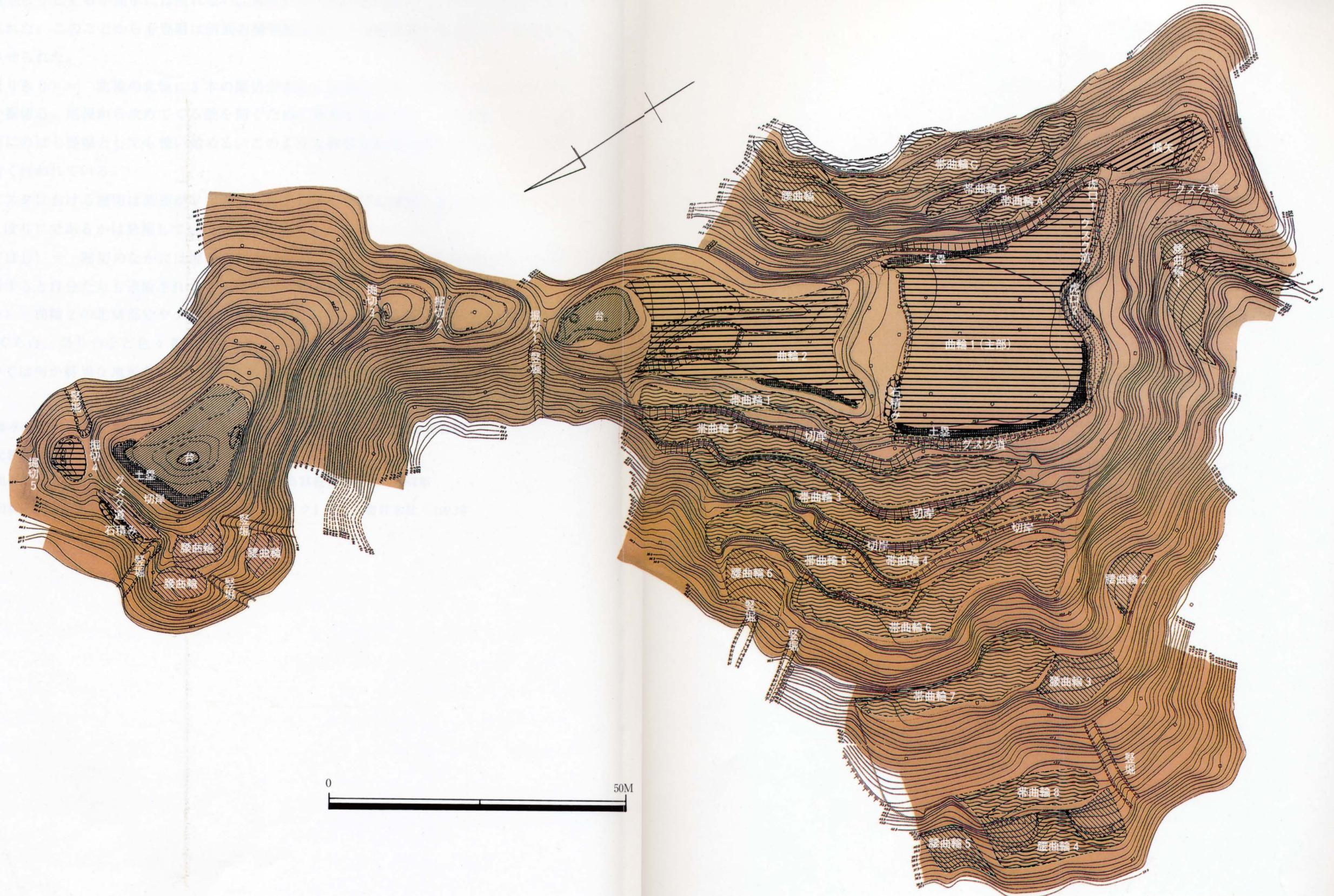
・ 横矢（よこや） = 横矢は城壁に迫った敵兵に対して側面から攻撃することができる。発掘調査が行われていないので不明であるが、ここでは地形的特長から横矢を効かせる機能も考えられる。

・ 虎口（こぐち） = ゲスクの防御された出入口部分をさします。南側部分が半円月状になり、土壙部分が切れていることからこの部分が虎口と思われる。ただし、地形の観察から曲輪の南端部分なども考えられる。これも発掘調査で明らかにされよう。

虎口は城館名称によれば、この門に迫るものは猛虎のいる口に迫るごとしというので虎口とされている。

・ 帯曲輪1・2・3・・・（おびくるわ） = 曲輪は前述したように防御された削平地のことを探した。帯曲輪は段々畠状になっている部分を指す。曲輪の幅も平均して5m前後で地形に合わせて細長くできている。腰曲輪を有する部分や竪堀を有する場所もあり、1段1段にそれぞれの機能があるように思われることから「帯曲輪1, 2, 3・・・」とした。「添曲輪」とも考えられたが添曲輪とすると主郭を取りまく付録のように受け止められるため、ここではあえて

のよう受け止められるため、ここではあえて



第12図 赤木名グスク縄張名称図

持って横ぎろうとするが簡単には渡れない。何度もくやしい思いをして、その度遠回りをよぎなくされた。このことからも堅堀は斜面の横移動を防ぐには効果的であることが身をもつて証明させられた。

- ・ 掘切（ほりきり） = 曲輪の北側に3本の掘切がある。北側から細く延びた尾根の鞍部（あんぶ）を掘切る。尾根から攻めてくる敵を防ぐために効果を發揮する。中世城館ではこの掘切を斜面にのばし堅堀としても使い始める。このような利用方法は北部九州では14, 15世紀以降に広く行われている。^{注3}

赤木名グスクにおける堀切は断面がV字型をした薬研堀（やげんぼり）なのか箱型をした箱堀（はこぼり）であるかは発掘していないので不明である。

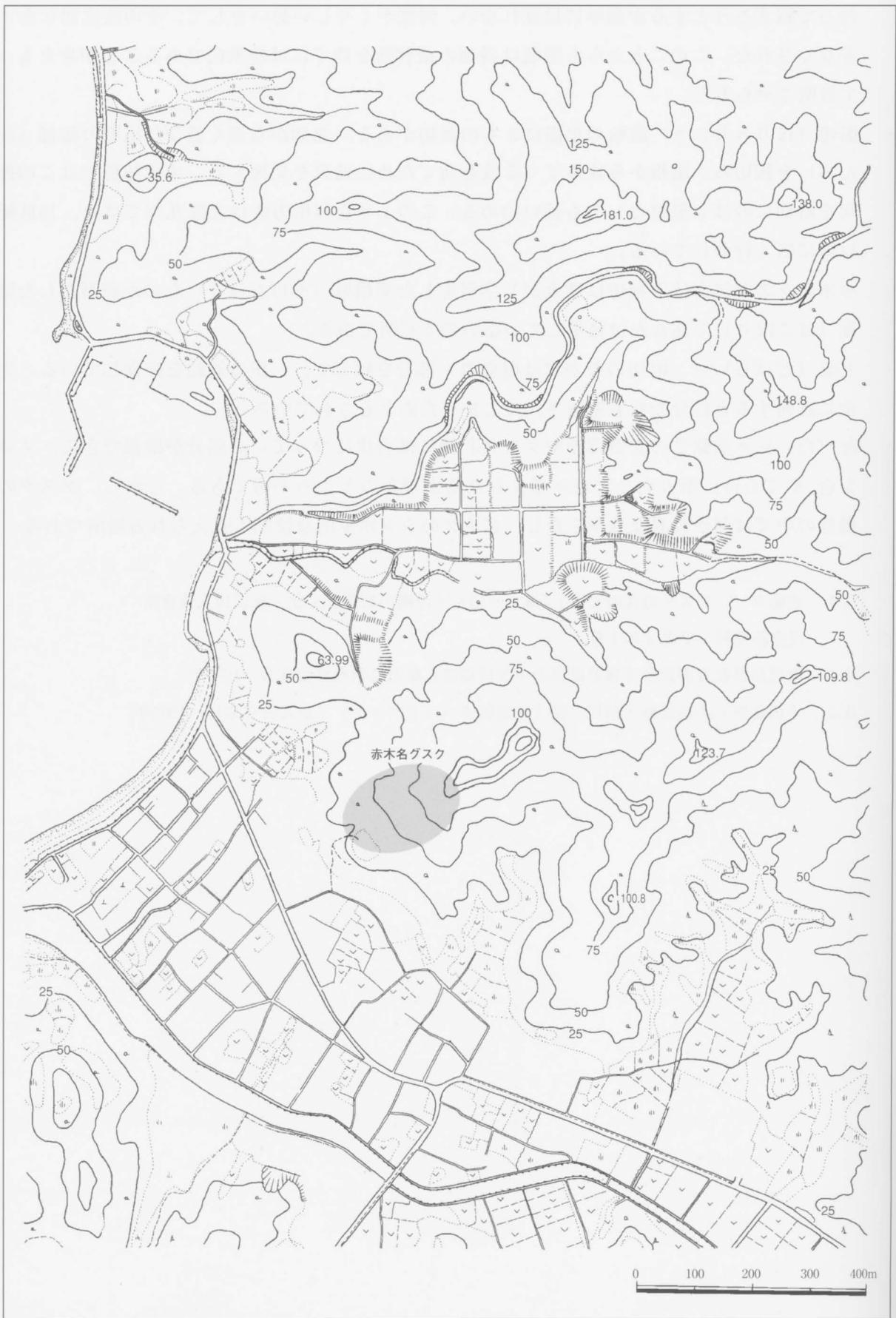
- ・ 土橋（どばし） = 堀切のなかには堀切の一部分を残して、一定の通路を確保している。完全に遮断すると自分たちも遮断されてしまうためともされている。
- ・ 台（だい） = 曲輪2の北側部分やグスク北側には台状になっている部分が確認できる。ノロシ台、やぐら台、祭り台など色々考えられるが現在のところ不明である。しかし、グスクの機能の中では何か特異な地形をなし、グスクのシンボル的な役割も考えられる場所である。

注1 安藤孝一「グスク時代の文化」『海上の道』－沖縄の歴史と文化－東京国立博物館

読売新聞社 平成4年1月

注2 鹿児島県教育委員会『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会 1987年

注3 千田嘉博・小島道裕・前川 要『城館調査ハンドブック』 新人物往来社 1993年



第13図 赤木名グスク周辺地形図

第2節 地形図に見る

赤木名城の調査に入り、町民をはじめとする多くの見学者が調査現場を訪れている。そのほとんどの方が標高約80mの曲輪1に着くと、しばらく腰をおろし、息を整え休憩をする。それほど険しく、登るだけでもきつい場所である。そして、「どら、お城は？」と尋ねる。奄美に首里城のような石垣や鹿児島の鶴丸城のような石垣、ましては熊本城、大阪城のような天守閣を持つ城をイメージして登って来られる。赤木名グスクはそうした近世の城郭とはほど遠く異質な存在である。

曲輪は戦後しばらく畠として利用され、周囲の土壘の上には食糧、暴風対策として利用されたソテツが植栽されている。そして、帯曲輪や腰曲輪は段々畠として再利用されており、こうした状況からお城を想像するにはとうてい縁遠いものに見えてくる。奄美のグスク遺跡はほとんどがこうした状況にある。日本の中世城館遺跡も同様であろう。ただし、沖縄においては中世日本の城郭よりもいち早く石垣を用いており、その影響は沖縄に隣接する与論、沖永良部島にも及んでいる。

赤木名グスクは今回の調査でそれらのグスクよりもさらに古く、沖縄で見られる石垣を用いる以前の土からなる「つちグスク」として當眞嗣一も位置づけており、赤木名グスクも氏の指摘する条件をみたしている。それらの特徴を図化するために50cmコンタの地形図を作成し、グスクの縄張を読み取ることにした。この地形図を掲載することで、すべての報告としたい。そのことが、これまであまりにも不明とされた奄美大島のグスク全般の機能、特徴を示す判断資料として活用されることと、より多くの方々の所見も頂きたいと願うからである。

曲輪1と虎口と土壘遺構

標高約75mのところで約900m²の削平地部分がある。ほぼ方形だが南東の住み部分は舌状に少し伸びる。この部分は南側向かいに位置する横矢を効かす立地的機能を考えれば敵の側面または背後を狙うことができる位置にあり、虎口として可能性が強い。そのことからこの地点を仮に「虎口1」として、ここでは標記する。しかし、地形図から見ると南側中央部分は土壘も切れ、窪んでいることからここも虎口と考えられる。虎口としての可能性を考慮し、この地点を「虎口2」として仮に標記して虎口1と区別するためにつけることにした。このように地形的な特徴からこの2箇所があげられるがあとは発掘調査にゆだねられることになる。

曲輪1の周囲は土壘が巡らされていたと思われる。東側に長さ約20m、そして南側途中から西側全面にかけて約30mの土壘が残っている。この状況から築城時の土壘は周囲に巡らされていたものと考えられる。そして、廃城後土壘にソテツが植栽された部分と削平された部分があり、現在に残っていると考えられる。

曲輪1は昭和20年の戦後間もない頃まで、イモ畠として使っていたと実際に耕作していた赤木名在住の青山則ニさんから話を聞くことができた。曲輪1部分の雑木と表土を覆っていた落ち葉を片付けると、その話を裏付ける畠の畝が面的に確認された。

曲輪1の北側は一段高くなってしまっており、西側には数段の石が積まれている。数段の石垣はマージ

の地山から積まれている。このことから築城当時のものと考えられる。石垣の間には玉縁口縁の白磁片も出土している。

曲輪1部分の調査は大きなリュウキュウマツ、アカギ、スタジイを残し、小さな木や竹類、ツタなどを伐採して発掘調査を行った。

グスク道（城道）と横矢

現在のグスク登り口は赤木名中学校裏の南側から登る。中学校裏はグスクの麓にあたり、現在の校舎や校庭のあるところは低地や田んぼであった。校庭はグスクの裾野を削り、生徒、保護者による整地作業が昭和30年頃に行われている。頁岩の割れ目のあるグスク麓の岩からはコンコンと湧き出す湧水があり、水道の普及する以前まで地区や学校の飲料水としてこの湧水は重宝がされていた。今でもお茶はこの湧水に限るとして、こだわる人が多い。

中学校校舎裏は小高い場所に赤木名観音寺跡と招魂碑がある。里集落の秋葉神社もここに祭られている。中金久、外金久のそれぞれの神社もグスク麓にあり、グスクの所在する山全体が赤木名の聖域になっている。

グスク道は細く、幅約1m弱の山道を1列になって登るほかない。グスク道は現在の登り口とほぼ同じ地区と思われる。曲輪1と横矢の間は頂上から谷状になっており、その谷は麓近くになって完全に分かれている。グスク道と現在の登り道はこの谷を通る他はない地形になっており、現にこの斜面には幾つかの小道らしき跡が数箇所確認される。その小道がグスク道なのか獸道、人の通る道「ケンキリミチ」なのは不明であるが、その都度この斜面が時代ごとに、何らかの道として利用されている。

横矢の中核はその地形から、分かれた谷の南側頂上部にあたると考えられる。まだ発掘調査によって遺構などの確認はされてないが、グスク道や腰曲輪、横矢などが西側斜面に確認されていることも考慮すると横矢を効かす機能の場所であると判断される。このことについては調査指導に現場を訪れた先生方からも賛同のご意見を頂いた。

攻撃を仕掛ける側は横矢を効かす北西側斜面の細いグスク道を一列になって登って来るしかない。防御する側は敵の右側側面を、斜め上から狙える好位置をキープしたまま虎口1近くの横矢の中核地点まで続くことになる。

横矢を効かす南側斜面は急峻な自然の崖に人工的な手を加えた「切岸」の可能性があり、攻撃を仕掛けるにはかなり厳しい場所と思われる。また、横矢の頂上は平場になっており、その南端部は東側と南側を眺める好位置の場所にある。この地形的特徴からすると「物見やぐら」も考慮した調査が必要である。このことは當眞嗣一氏からも現場にて指導を受けた。

横矢東側斜面にグスク道が確認されており、このグスク道は東側に3段ある帶曲輪をむすび、虎口1につながっている。赤木名グスクの南側に位置する横矢を効かせる場所とグスクに登るグスク道はグスクを防御するのに、自然の地形をうまく利用した機能的な築城技術が駆使されていることがわかる。グスク道は曲輪1、2にも確認されている。

地形測量は赤木名中学校麓部分まで行なわれていないため、南側グスク下方の特徴が不明であ

る。赤木名グスクは引き続き調査の必要を調査指導に来られた先生方からも強く望まれた。

曲輪2と台

曲輪2は約700m²の平場があり、その平場は2段になっている。全体的に整然と整地された状態ではない。曲輪1よりも約3m高い位置にあり、斜め方向に東西に分けられる。東側は1段高く北側に台状の切残し部分がある。曲輪2の東側と西側には土壘の一部分が確認できるが、曲輪1同様に周囲はソテツが植栽されている。

曲輪2には確認調査のグリットを設定し、発掘調査を行った。その結果、遺構・遺物の検出があった。

曲輪2の西側斜面は曲輪1と同じ帯曲輪と腰曲輪、堅堀などが配置され、防御されている。東側斜面も曲輪1と同様であるが、北側半分は急峻ながけになっており、帯曲輪と腰曲輪は南側の半分で終わっている。

北側の台は約150m²の広さがあり、高い所で標高83mである。この台に立つと木立の間から赤木名集落を眺めることができる。物見やぐらを建てる広さもあり、色々な台が想定されるが発掘調査は行っていない。そして、その北側は深い堀切を有する第1堀切と堅堀がある。

曲輪1・2に伴う帯曲輪、腰曲輪、堅堀

赤木名グスク調査初年度（1999年度）は曲輪1と曲輪2、堀切の部分をグスク遺跡として調査を進めていた。古老からの聞き取り調査においても曲輪と堀切だけに限定されており、帯曲輪や腰曲輪については薩摩藩時代の「かくれ畠」としの情報しかなかった。そのため調査初年度の現地説明会用パンフレットには帯曲輪や腰曲輪を「かくれ畠」と記述している。今考えるとかくれ畠とした赤木名グスク西側斜面は集落背後に位置し、代官屋敷や集落から目立ち、かくれ畠にはならないのではないだろうか。帯曲輪は木々に覆われ、うっそうとした現在の状況で判断してしまったからである。

帯曲輪としたのは曲輪1、2の西側斜面に帯状になっていることから帯曲輪とした。曲輪1、2の西側斜面にはその8段の帯曲輪と5つの腰曲輪、3つの堅堀が配置され、かなりの防御体制が整えられている。

帯曲輪1は曲輪1の北西コーナーから曲輪2にかかり、幅約8m、長さ約55mの帯状をなしている。西側は切岸になっており、このような大小の帯曲輪が8段続いている。一見、段々畠状になっているが畠としては幅が少し狭すぎる感がする。ただし、廃城後にこの帯曲輪を古老の言う畠として再利用した可能性は残る。

腰曲輪は西側斜面に4箇所確認された。それぞれの斜面の要所々に位置しており、斜面を掘り込んで整地したようである。

西側斜面にある腰曲輪7は帯曲輪6の北端で帯曲輪5の北側切岸下方約10m×10mの広さを方形状に切り込んでつくられている。後方3方が帯曲輪の切岸にあたり、前面（西側）が開放している。前面も切岸を有し、腰曲輪のほぼ中央の切岸から幅約2mの堅堀がのびている。堅堀はさ

らに南側へ約 6 m の腰曲輪 4 の南端部分にも確認される。この腰曲輪は帶曲輪 5, 6 から追い込んだ敵をこの中に落とし入れ、帶曲輪 5, 6 の上と側面から攻撃を仕掛けることも安易にでき、いわゆる近世の城に見られる「枒形」的機能も充分考えられる。同様な形をしたものに同じ西側斜面の腰曲輪 6 にも見られる。

南側斜面にある腰曲輪 3 は半円月状に切り込み、半円月の直線を切岸にした姿の遺構をはっきり見ることができる。南側には横矢と曲輪 1 の谷状になっている部分に前述したグスク道と腰曲輪 1, 2 があり、こちらも要所に腰曲輪が配置されている。

東側斜面は西側に比べて狭く、帶曲輪 4 箇所と腰曲輪 2 箇所と小規模である。東側の地形の状況からするとかなり急峻であるためこれで充分と思われる。こちらも麓まで含めた広い測量調査を行う必要性が生じている。

曲輪 1, 2 を防御する三方の斜面にそれぞれの帶曲輪、腰曲輪、堅堀、横矢、グスク道、虎口、土壘などを有し、防御を意識した築城と考えられる。また、曲輪 1 の虎口 1 から南側土壘の外をとおり、西側土壘から帶曲輪 1 に続く幅約 1, 2 m の犬走り状のものが廻っている。これは帶曲輪とグスク道が考えられたが特定するに至らなかった。

主郭をなす部分曲輪 1, 2 は以上のように完全に防御され、北側に細く続く鞍部も 3 箇所堀切られている。

堀切と土橋

北側の台と主郭との間は鞍部が幅約 9 m と細くなっている。その細くなっている部分を利用して 3 箇所に堀切を有している。堀切は南から 1 号、2 号、3 号「堀切」とした。

1 号堀切は幅約 5 m、深さ約 2 m と赤木名グスクの堀切の中では一番大きい。堀切は箱掘り的に見えるが、発掘調査は行っていない。さらに堀切西側は堅堀になっている。堀切東側は台風による大雨で、調査を行う 2, 3 年前に崩れている。

曲輪 2 の東側から 3 箇所の堀切下の斜面に細い筋があり、この筋は北側の台と曲輪 1, 2 を結ぶ連絡路としてのグスク道の可能性も考えられる。

2 号堀切、3 号堀切は 1 号堀切に比べて小さいが堀切の端は人が通れる部分が残っており、土橋になっている。この土橋は築城からのものなのかそれとも後のものかは不明である。

北側台部分は曲輪から徐々に高くなり、西側に舌状に延びている。そのため北側台と曲輪の間にある鞍部は西側に面して大きく弧状をなし、その斜面は深く、急峻になっている。ここから侵攻するには一番厳しい場所と思われる。自然の地形をうまく利用しているのがここでも見ることができる。

北側台と堅堀、腰曲輪、石垣遺構、土壘

標高約 80m の曲輪 1、標高約 83m の曲輪 2、曲輪 2 の北側にある台は標高 83m になり、堀切に続く。第 1 堀切から第 2、第 3 堀切に行くにしたがって高くなり、北側の台遺構最頂部に行くと標高 100m になる。この台の上からは赤木名集落を眼下に赤木名湾から龍郷湾まで一望でき、さ

らに湾外の外洋を航行する大型船も見える。東側は木々の間から深い緑の尾根越しに太平洋を望むことができ、まさに360度の大展望である。当時は目の前にある大きいリュウキュウマツやスタジイなどの木々は無く、赤木名グスクは外洋や湾からも目立つ位置に立地していたのがわかる。

台を形成する平場は北西が約15m、南東に9mと細く台形状をなす。台部分は西北側に削り残して約1mの高さになり、台の頂上部は約6mの円形状の広さがある。平場北側周囲から西側にかけては土壘を有している。特に北側の土壘は幅約3mあり、高さも約1mと立派なものである。さらに土壘基部にあたる外側には数段の自然石が積まれ、高さ4mの切岸をなしている。

切岸の下はグスク道になっており、この道は台の北側掘切りに続いている。グスク道の路肩部分は土留めとしての利用なのか人頭大位の自然石で4段の石垣が積まれ、石垣の下方は切岸になっている。石垣西側は幅約2m、長さ約12mの豊堀になっており、豊堀西側は土が積まれ、縦の土壘状になっている。南東側横には約60m²程の広さが造成され、その下に豊堀を有し、さらにその東側にも豊堀が続く。造成地の北西下も造成され、南側斜面の豊堀の間には半円月状に近い造成がなされている。これらの造成地は南側から腰曲輪8、9、10とした。

東側斜面は急峻になっており、北側は深い掘切と豊堀になっている。こうした掘切は北側に続く細い尾根に5箇所確認される。

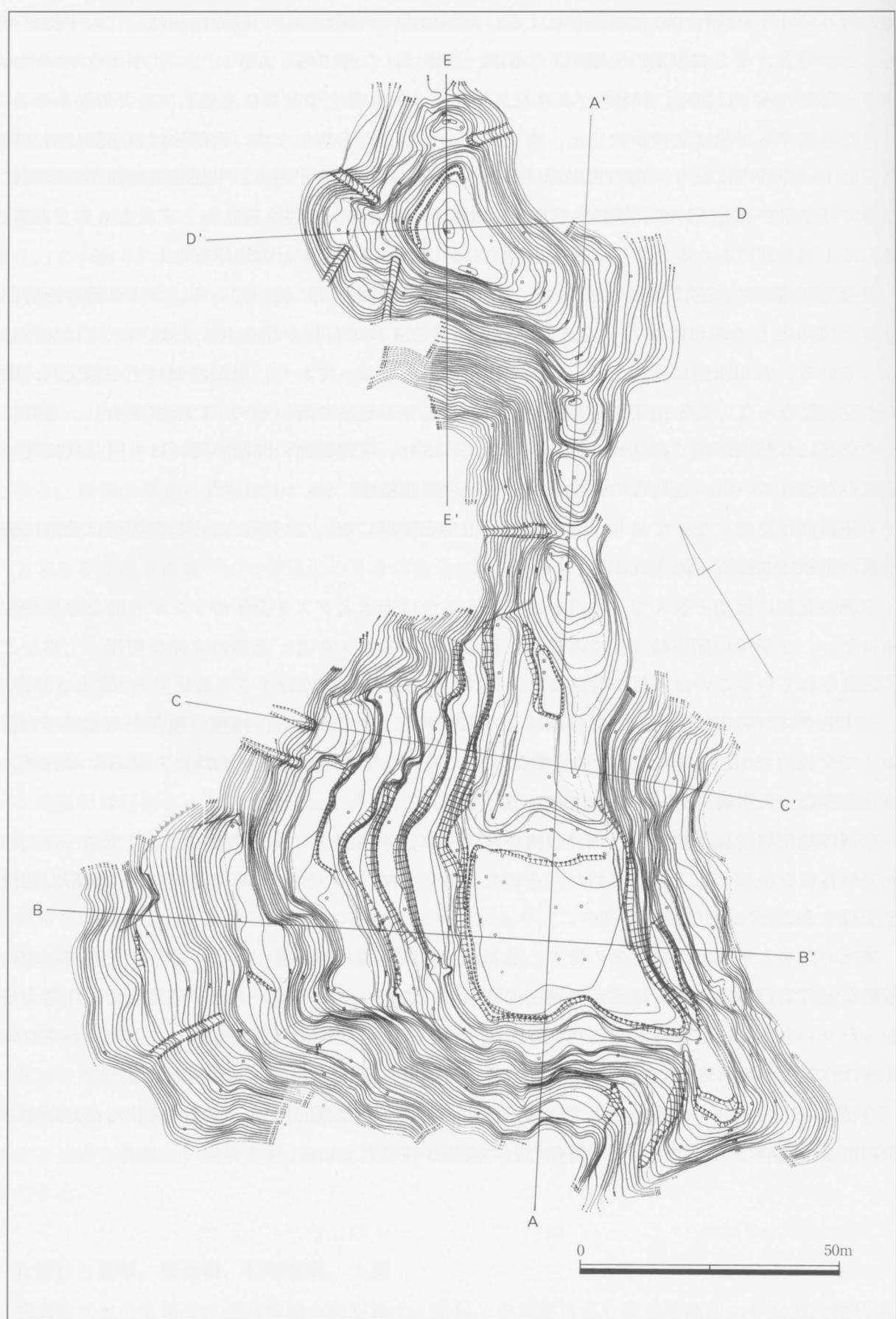
主郭の北側に掘切を挟んで一段高い位置にある台は赤木名グスク全体のシンボル的な存在かも知れない。3箇所の腰曲輪、3本の豊堀、石垣を有するグスク道、北側の立派な切岸、土壘などに防御されているこの台は何か特別な意味を持つと考えるには充分すぎる遺構である。

赤木名グスクの主郭を取りまく機能はこの北側の台までと思われ、南側の横矢から北側の台掘切まで全長約250mにおよぶ。その全貌は木々に覆われているが、木々の間から見る赤木名グスクは大きな一大事業であったことはまちがいない。

今回の地形測量は毎年新しい発見が続いた。それは本格的なグスク調査は初めてであったため地形の特徴を把握することに努めた。そのためあえて50cmコンタの地形測量を行い、地形の特徴を記録することに徹した。

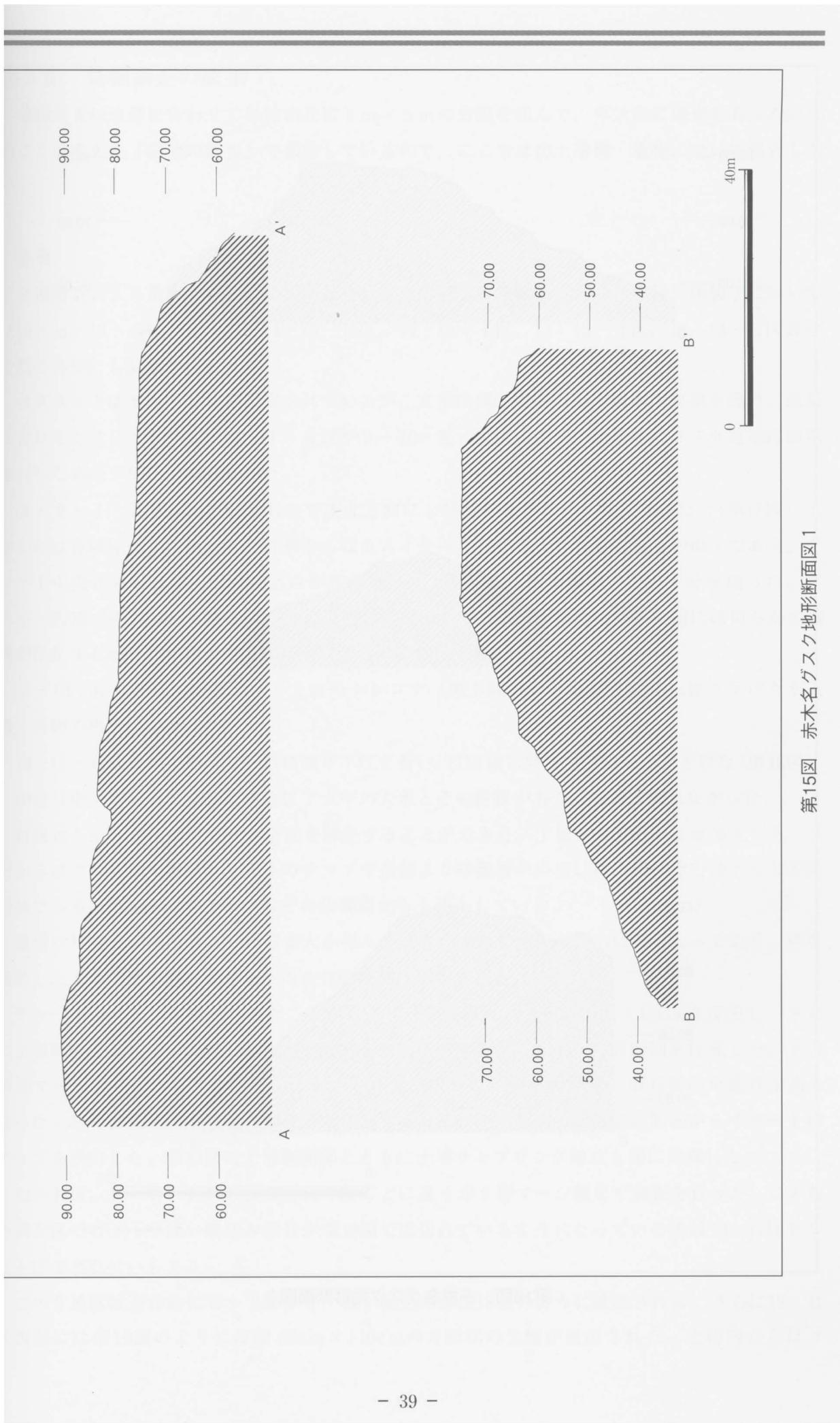
雑木の除去と下払い、落ち葉の除去、急斜面での測量器具の設置、ポールと巻き尺を持っての移動など作業員さんたちも何度も斜面を滑り落ち、またハゼの木にかぶれ、急斜面での作業が多くいたせいもあり、しばらくは筋肉痛にも悩まされた。そしてなによりも、ハブと出くわさないように作業は秋から冬にかけて行ったが、藪蚊とブヨの襲撃は冬でも関係なかった。

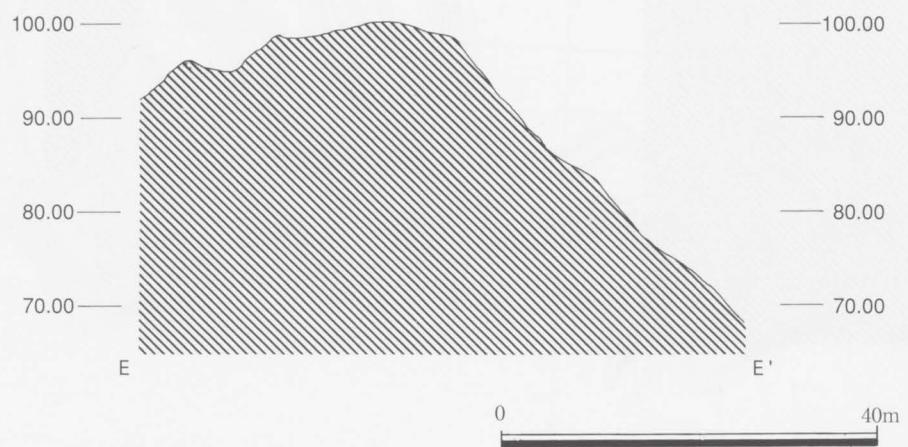
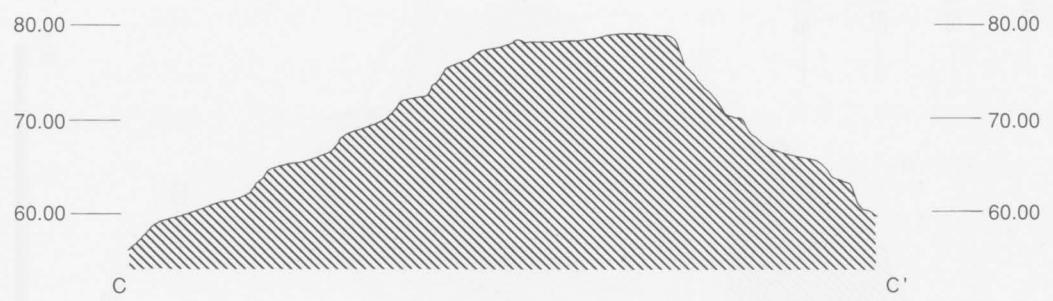
今後はさらにグスクの麓と赤木名集落を含めたグスクの位置的関係、前田川を挟んだ対岸する山の踏査、集落とグスクのセット関係などの調査が残されている。



第14図 赤木名グスク周辺地形図

第15図 赤木名グスク地形断面図 1





0 40m

第16図 赤木名グスク地形断面図2

第3節 発掘調査の成果

発掘調査は地形に合わせてほぼ南北に $5\text{m} \times 5\text{m}$ の方眼を組んで、年次的に調査を行った。このことは本文の「調査の概要」で報告しているので、ここでは出土遺構・遺物について報告したい。

遺構

発掘調査による遺構の検出は試掘調査を行った曲輪1, 曲輪2であった。特に曲輪1においては10・11・13-G区, 12・13・14・15-H区, 14・15-I区, 14・15-J区, 13, 14-K区及び土壘の外側にも試掘を行った。

各グリットは $5\text{m} \times 5\text{m}$ で設定されているが、大木は残してあるため樹木や樹根を避け、地形に合わせたグリットや8・9-J・K区や9・10-K・L区のように土壘外のグスク道遺構確認を行うためのグリットも設定した。

8・9-J・K区は地形に合わせて南北方向にL字型の変形グリットになった。(第17図) 上層からは青磁片が3点出土し、2層からはカムィヤキ2点が出土し、合計5点の出土である。グリット中央からはほぼ円形の堀込みが確認された。堀込みは断面確認のため半分を掘った。グリット西側コーナーから長さ約70cmの炭化木も出土している。土壘外のグスク道には何らかの遺構が存在するが今回の調査では明らかにすることはできなかった。

9・10-K・Lにかかる $1\text{m} \times 3\text{m}$ のトレンチ(第7図)からは深さ約30cm掘り下げたが遺構・遺物の出土はなかった。

10・11-G区は第1層まで一緒に掘り下げを行い、11区は2層まで全体を掘り下げた(第18図)。

10区は中央からH区よりによりにアカギの大木とその樹根があり、全体は掘れなかった。

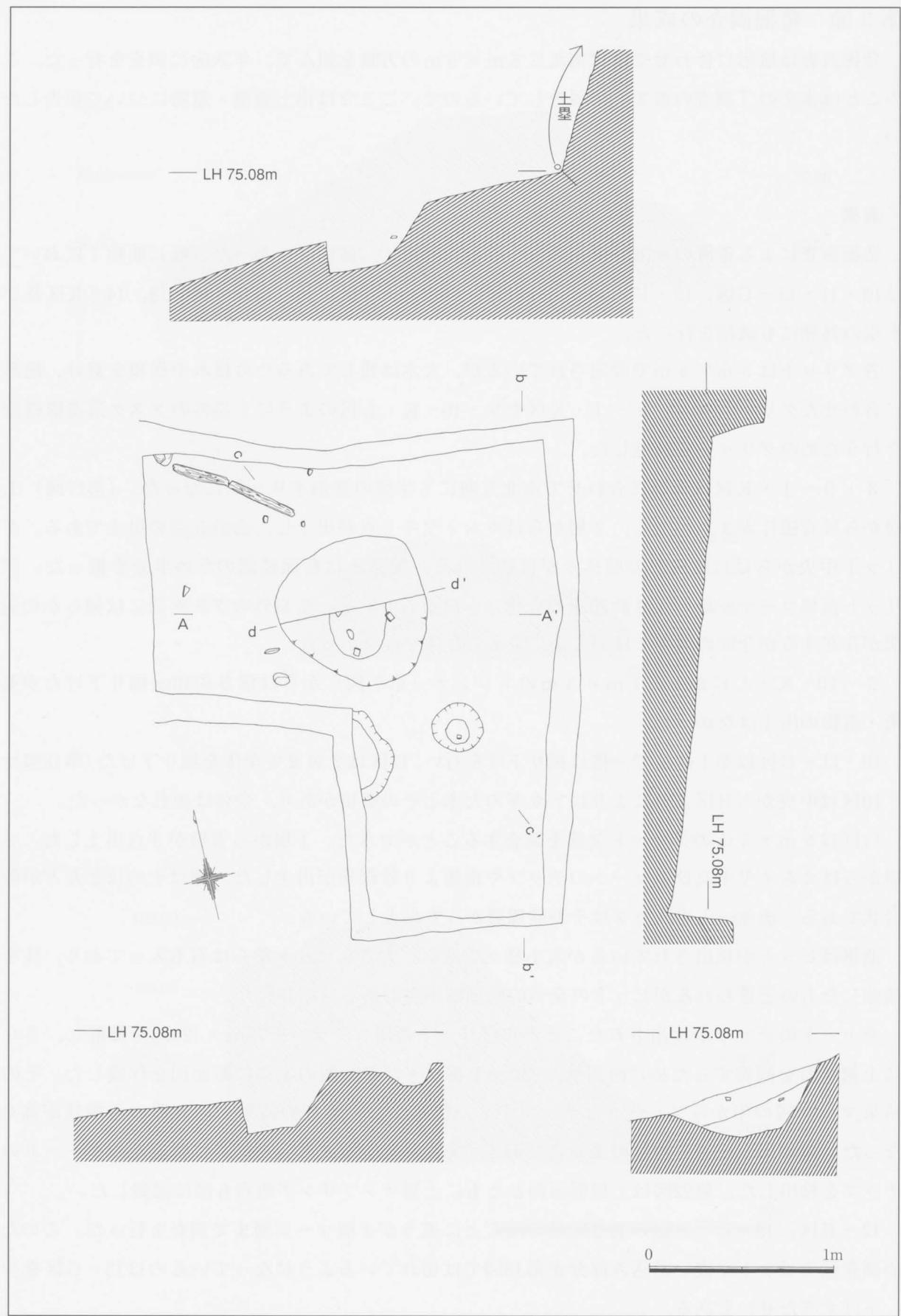
11区は $5\text{m} \times 5\text{m}$ のグリット全部を調査することができた。1層から青磁が3点出土した。2層からはカムィヤキ及びチャートのチップや南側より砂礫層が出土した。礫はそのほとんどが砂岩状である。チャートのチップはその砂礫層からも出土している。

遺構はピットが検出されているが大小様々である。大きなピットからは石も入っており、柱を補強したものと思われるがピットの全体的配列は不明である(第18図)。

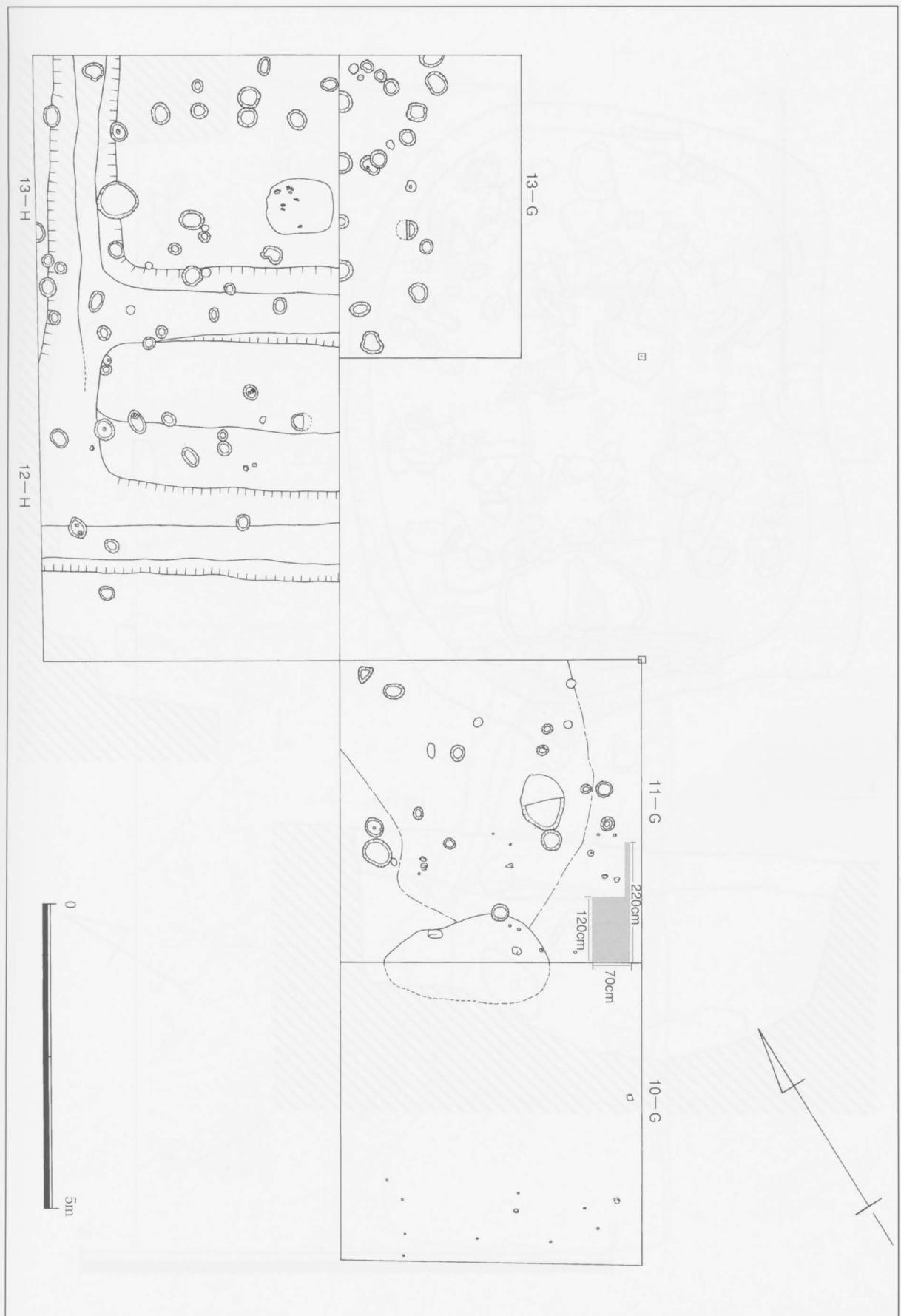
チャートのチップが検出されたことからグリット西側コーナーを70cm×120cmを深堀し、さらに土層断面を観察するために西側壁面220cmを掘り下げ第22図のように断面図を作成した。その結果マージ層の中からフレークとチップが5点出土した。調査の結果、旧石器の可能性が高くなった。遺物出土土層を複数の調査者と確認するため、土層を削った時点に断面からチャートのチップを検出した。第22図は土層断面図とともに土層サンプリング地点も図に記録した。

12-H区、13-G・H区の調査区は年度ごとに違うが2層マージ層まで調査を行った。このため調査区でピットや浅い堀込み部分が第18図では切れているようになっているのは13-G区を少し下げすぎたせいもある。

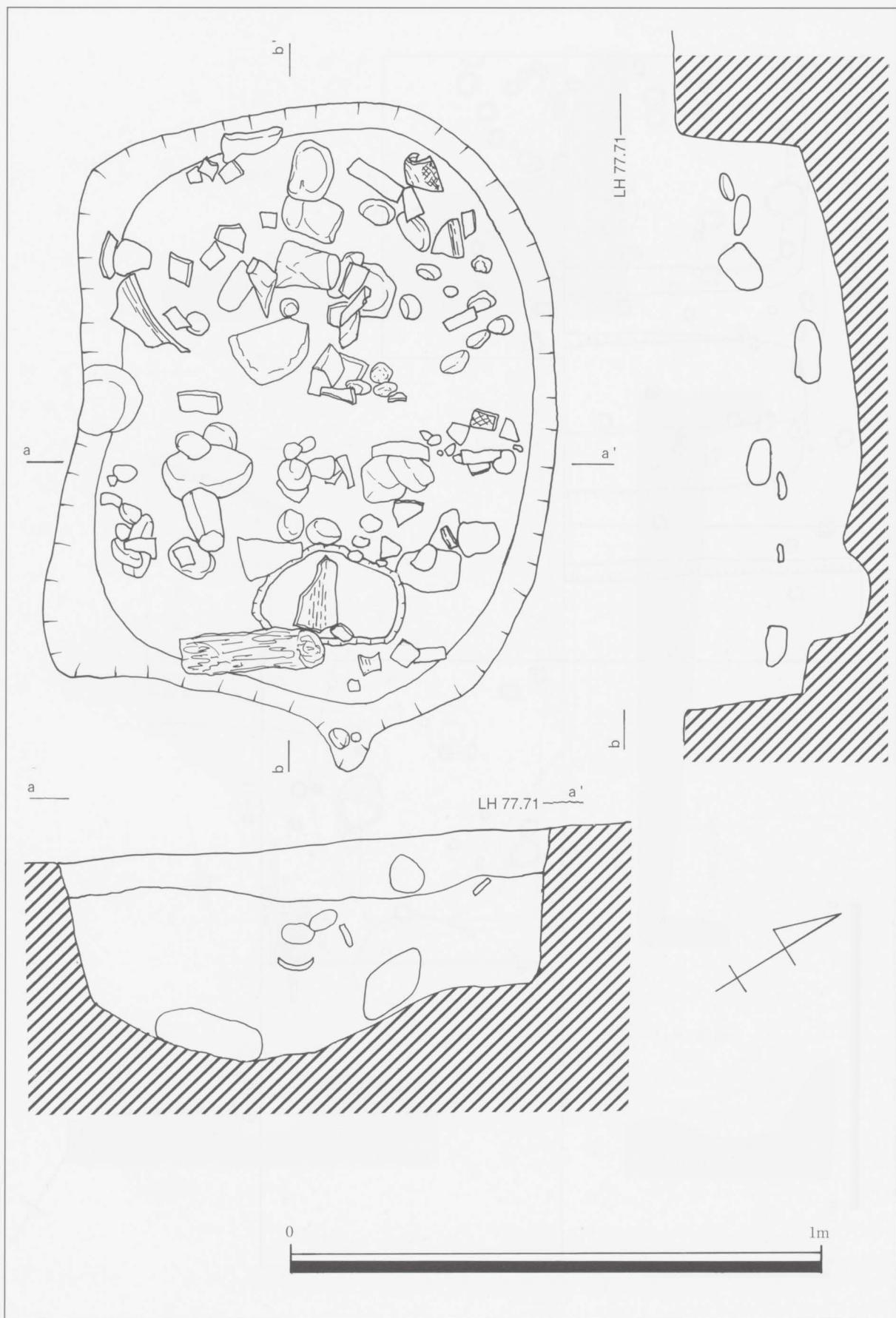
この3地区は全体的にピットが多く、浅い堀込みが第18図のように確認される。さらに13-H区西側には第19図のようにほぼ $85\text{cm} \times 110\text{cm}$ の方形状の土構が検出された。土構内からはカ



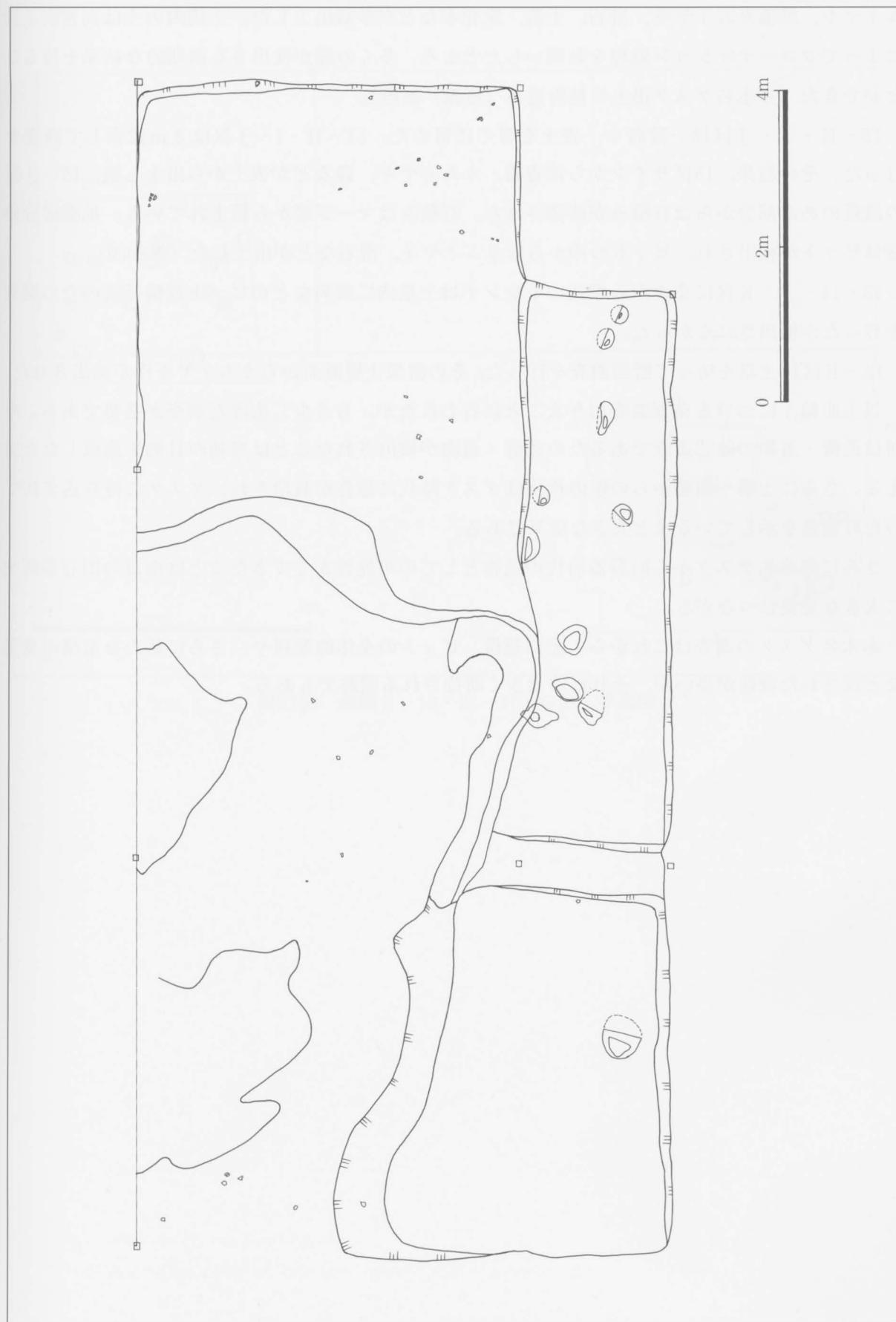
第17図 土壙外 8・9-J・K区



第18図 10・11・13-G区 遺構平面図
12・13-H区



第19図 13-H区 土坑・遺物出土状況



第20図 15-G・I・J区 平面図
14-G・I・J区

ムイヤキ、黒漆カムイヤキ、滑石、土器、炭化木などが多数出土した。土構内の土は高宮広土氏によってフローテーション処理をお願いしたところ、多くの稻が検出される画期的な結果を得ることができた（赤木名グスク出土の植物遺体（速報）参照）。

15-H・I・J区は一段高く、表土を剥ぐに留めた。14-H・I・J区は2m拡張して調査を行った。その結果、15区ラインからは青磁、カムイヤキ、鎌などが表土から出土し他、15-J区の段差のある部分からは石積みが確認された。石積みはマージ層から積まれている。拡張部分からはピットが検出され、ピットの中からはカムイヤキ、滑石などが出土した（第20図）。

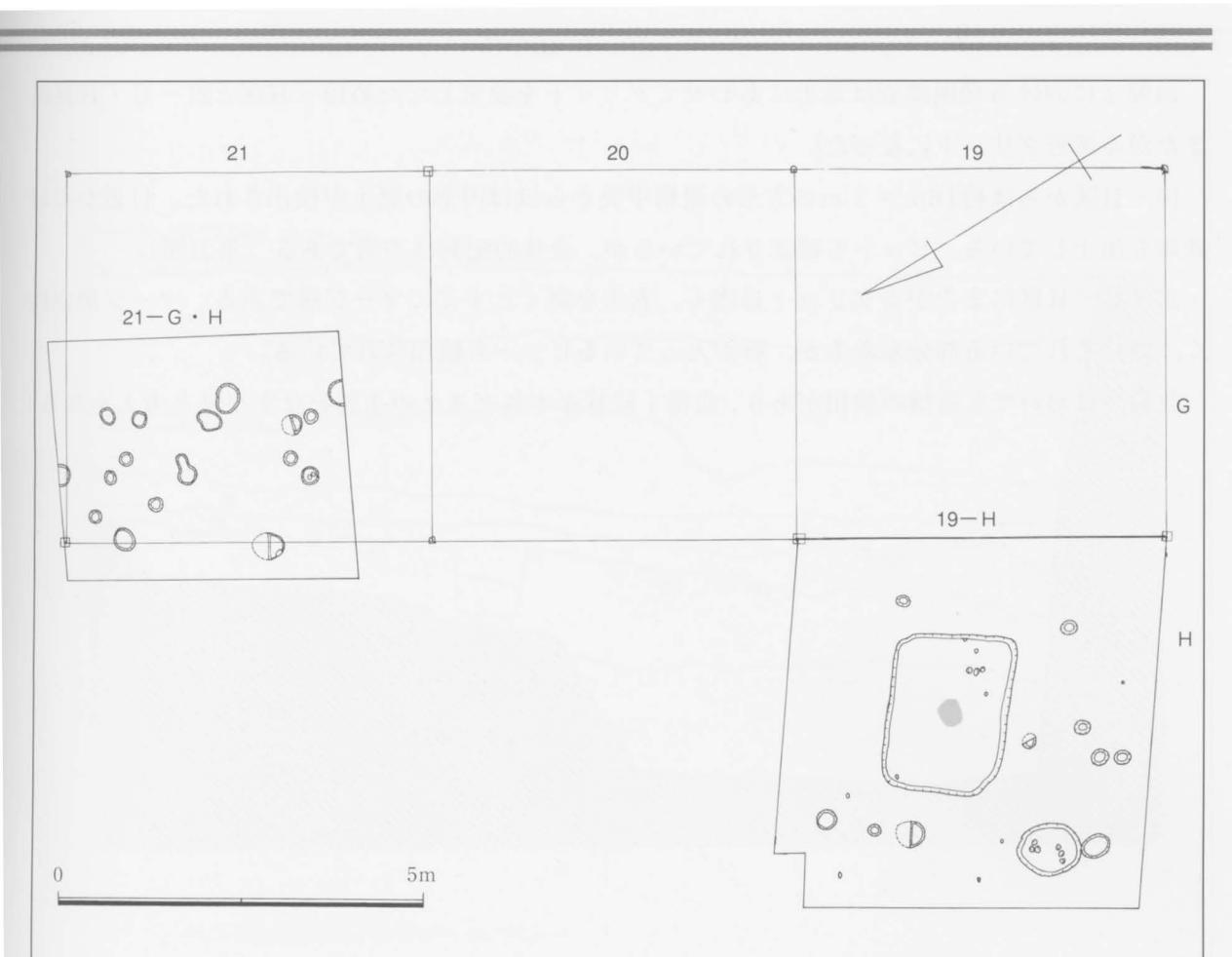
13・14-J・K区にまたがる細長いトレンチは土壘内に柵列などのピット遺構確認のため調査を行ったが検出されなかった。

12-K区は土壘を切って断面調査を行った。その結果土層断面からカムイヤキ片が検出された。

以上曲輪1における発掘調査は年次ごとに行われたが、もう少し広げた調査が必要である。今回は遺構・遺物の確認調査であるため遺構・遺物が検出されたことは当初の目的を達成したと言える。さらに土構や曲輪からの稻の検出はグスク時代に稻作が栽培され、グスクに持ち込まれていた可能性を示しているなど大きな成果である。

さらに赤木名グスクから旧石器時代の遺物としての可能性がでてきたことは南島の旧石器研究に大きな発見につながる。

赤木名グスクの調査はこれからも虎口遺構、ピットの全体的配列や、さらに新たな遺構の発見など残された課題が多いが、それだけ大きく期待される遺跡でもある。



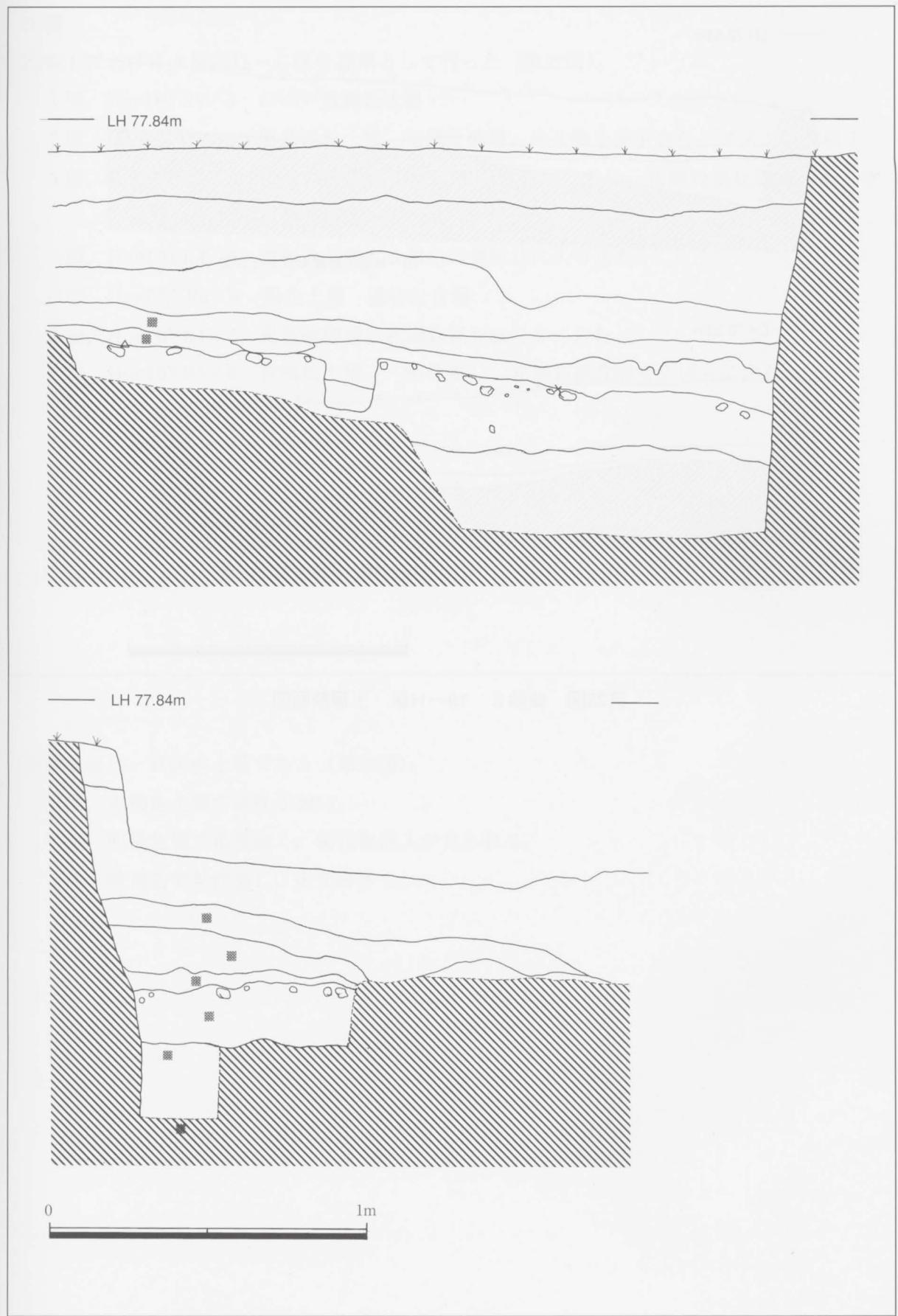
第21図 曲輪2 19・21-H・G区 平面図

曲輪2における発掘調査は地形にあわせてグリットを設定したため19-H区と21-G・H区にまたがる変形グリットになった。

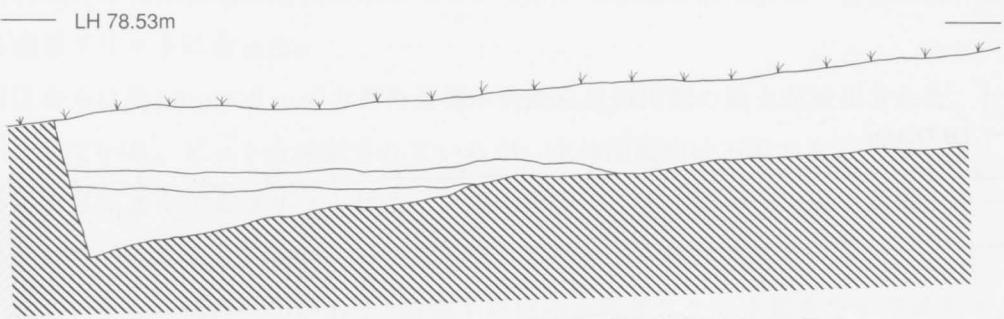
19-H区からは約1.6m×2mの方形の遺構中央からほぼ円形の焼土が検出された。付近からは鉄扉も出土している。ピットも確認されているが、全体的配列は不明である（第21図）。

21-G・H区にまたがるグリットは浅く、表土を剥ぐとすぐにマージ層である。マージ層が浅く、堀込まれている部分もあるが、石が入っているピットも検出されている。

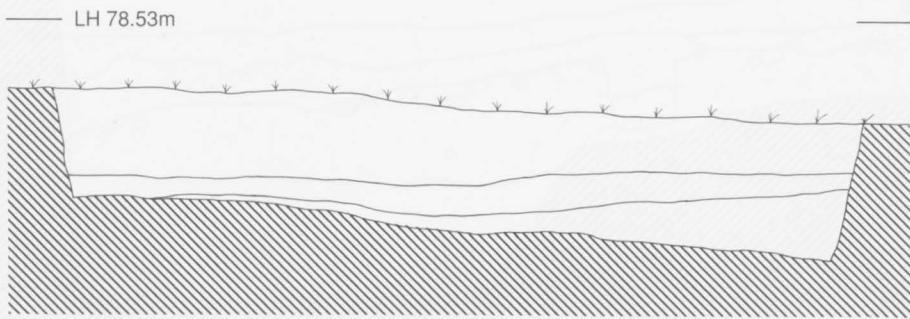
曲輪2においても遺構の検出があり、曲輪1同様赤木名グスクの主郭をなす平場と考えられる。



第22図 曲輪1 11-G区 土層断面図



19-H区 北東セクション図



19-H区 南西セクション図

0

第23図 曲輪2 19-H区 土層断面図

土層

曲輪1における土層は11-G区を標準として行った（第22図）。

- 1層, Hue10YR4/3 にぶい黄褐色土層
- 2層, Hue10YR6/8 明黄褐色土層, 花崗岩砂層, 炭化物を多少含む。グスク包含層1
- 3層, Hue10YR7/3 にぶい黄燈色土層, 花崗岩砂層, 木炭, 花崗岩風化礫を含む。グスク包含層2
- 4層, Hue10YR4/6 黄褐色土層, 5層中に樹根状に入り込む。
- 5層, Hue7.5YR4/4 褐色土層 遺物包含層
- 6層, Hue10YR4/4 褐色砂礫層, 花崗岩風化礫を多く含む。
- 7層, Hue10YR5/8 黄褐色土層, 粘性強し。花崗岩風化礫をまばらに含む。

曲輪2は19-H区の土層である（第23図）。

- 1層, 赤褐色土層で粘性が強い。
- 2層, 明褐色層で粘性強く, 炭化物混入が見られる。
- 3層, 暗褐色で粘性強し, 炭化物多し。

出土遺物

陶磁器・カムイヤキ

曲輪1からの出土遺物は染付け、青磁点、白磁、滑石等の遺物が出土している（第4、5表出土遺物一覧表）。

出土遺物は曲輪1、2とも大きく1層、2層に分けられる。1層からは現代遺物や染付けと一緒に青磁やカムイヤキが出土している。2層からは白磁やカムイヤキと滑石が出土している。

14-I区は表土から近世遺物が多く、2層からは青磁1点、白磁1点、滑石1点、ピット内よりカムイヤキ4点が出土している（第4、5表）。

第24図1は口縁部から頸部かけてのカムイヤキで、口唇部に丸みを持っている。外器面に格子の叩き目が少し残る。色調は全体的に燈褐色で、焼成は不良である。2、3はカムイヤキの頸部近くで外器面に格子目紋が残り、絹内器面は強い轆轤痕が残る。色調は青灰色で、焼成は良好である。2はピット内よりの出土である。4は頸部近くで波状紋が残り、内器面は轆轤痕を有する。色調、焼成は2、3と同じ。5、6は胴部片で外器面に平行線文叩き目痕が残る。5は内器面にも当て具痕を有するが、6は轆轤痕が残る。7は白磁の口縁部分である。

第25図8、9は14-I区出土のカムイヤキ底部資料である。色調は青灰色で、焼成は良好、内器面はやや段差のある轆轤根を有する。8はピット内より出土している。15-I区1層からは1から5が出土している。1は白磁の玉縁口縁である。2は青磁の底部である。3はカムイヤキ口縁部分で口唇部に丸みを帯びた段差をなす。内外とも轆轤根が残る。4は綾杉状叩き痕で、裏は格子文当て具を使用。5は平行線文叩き痕を有し、いずれも胴部片である。6、7は13-G区ピット内から出土したカムイヤキ胴部片である。青灰色で焼成は良好である。

第26図1、2は13-G区から出土した。1は青磁の口縁部分で、2は白磁の底部部分である。13-H区4、5が出土している。4は底部であるが表土からの出土である。5は胴部付近と思われるが内外とも雑であり、ピット内からの出土である。

12-Kの土壙断面を調査した結果、土壙の断面から1点だけカムイヤキ片が出土した。3がそれである。青灰色で焼成も良好である。以上は曲輪1出土の資料である。

曲輪2、19-H区1、2、3、4は1層出土のカムイヤキである。1は口縁部に丸みを持ち、稜線がはっきりしている。2、3は胴部片で内外の叩き目痕を有する。4は底部の資料である。19-H区2層出土5は白磁の玉縁口縁である。6は頸部近くと思われるカムイヤキである。色調は青灰色、焼成は良好である。19-H区土構内出土7、8、9は土構内から出土したカムイヤキである。

以上が曲輪2の出土遺物である。曲輪2は比較1、2層ともあまり時代差はないように思える。カムイヤキ全体の資料は曲輪1の土構から出土した資料と類似する。時期的にも新里亮人氏の分類した12世紀後半と同じである。



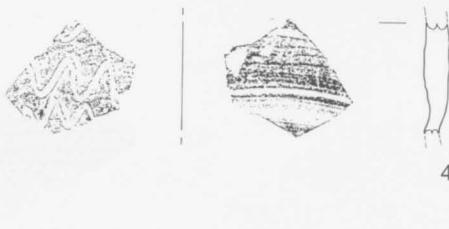
1



2



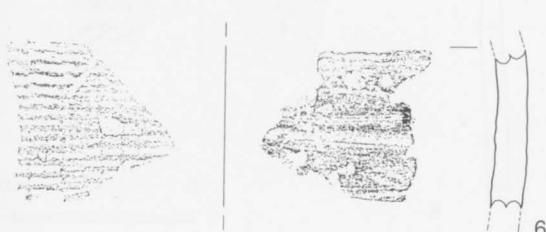
3



4

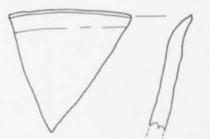


5



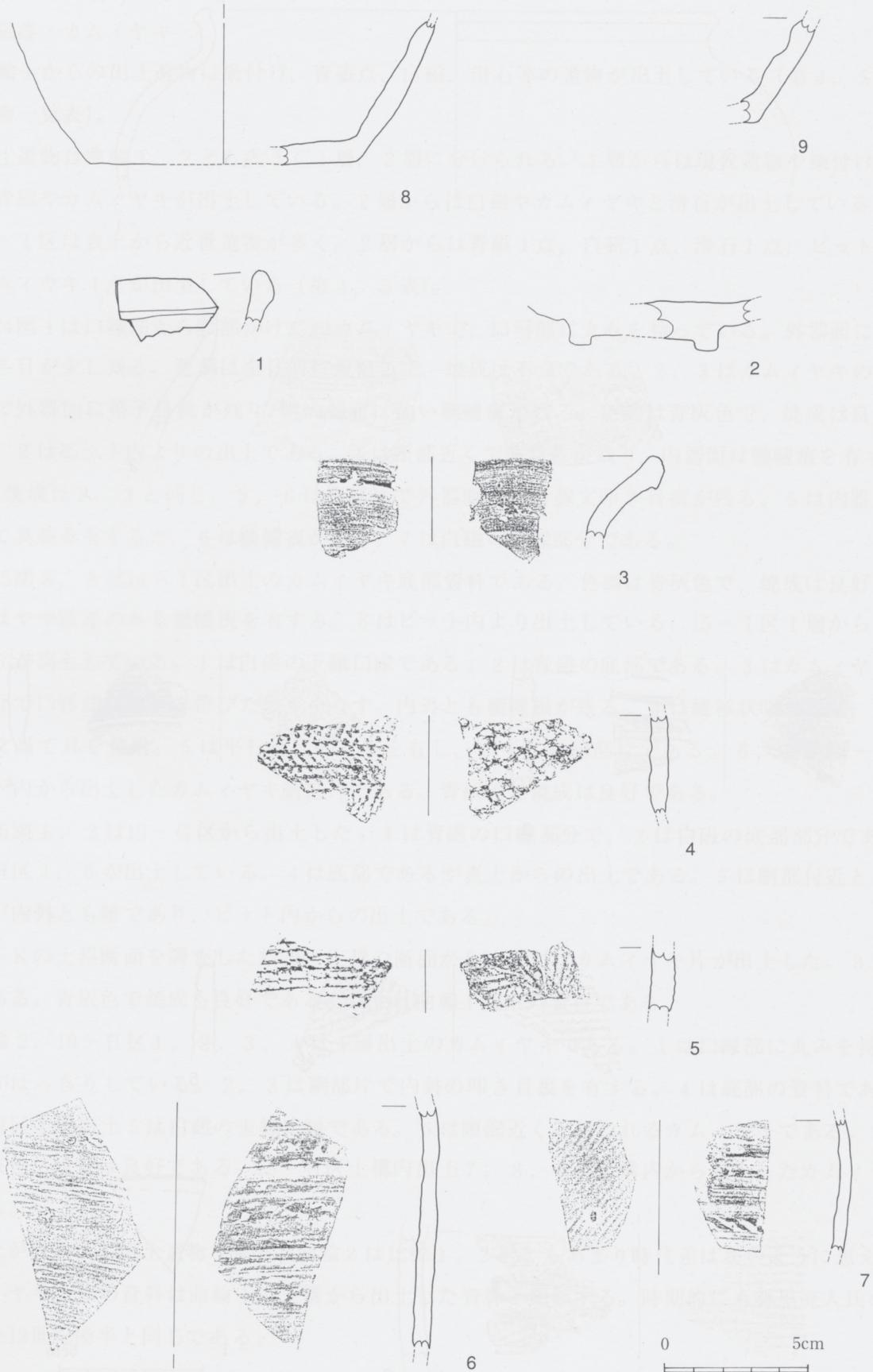
1

5cm

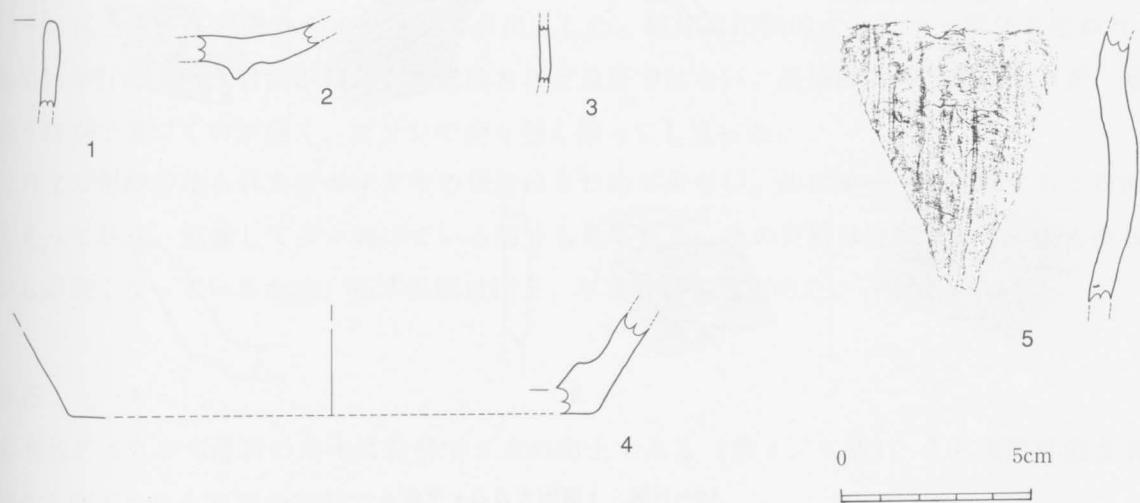


7

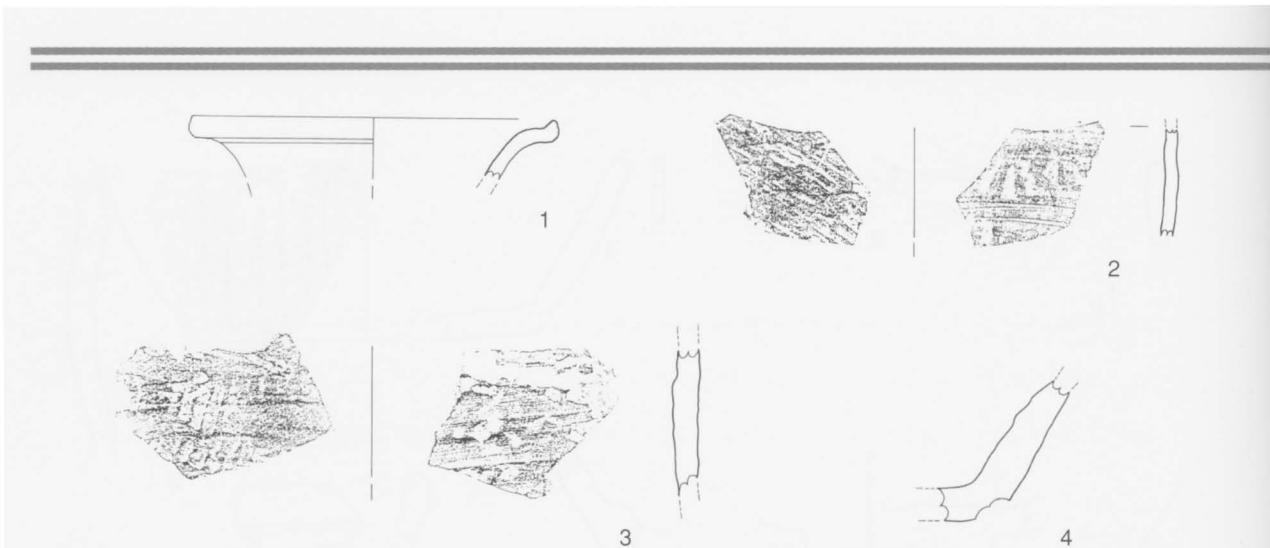
第24図 14—1区 (1・2 ピットより出土 3・4・5・6 カムイヤキ 7 白磁口縁部)



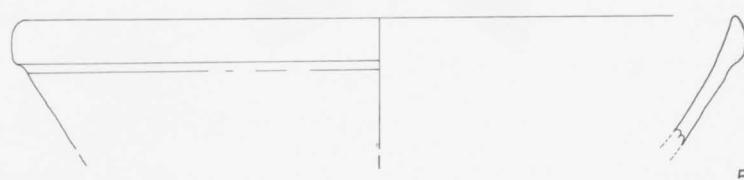
第25図 13-G区 (6・7 カムイヤキピット内)
 14-I区 (8 カムイヤキピット内 9 カムイヤキ)
 15-I区1層出土 (1 玉縁口縁白磁 2 青磁 3・4・5 カムイヤキ)



第26図 13-G区 (1 青磁 2 白磁底部)
13-H区 (4 カムイヤキ表土 5 カムイヤキピット内)
12-K (3 カムイヤキ土壙)



19-H区 1層出土カムイヤキ



19-H区 2層出土玉縁口縁白磁、カムイヤキ



7



8



9

0 5cm

19-H区 土構出土カムイヤキ

第27図 曲輪2 19-H区 出土遺物

黒漆カムイヤキ

13-H区土構から黒漆カムイヤキが5点出土した。破片は比較的大きく同一個体と思われる。外器面は平行線文叩き目痕が残る。焼成はさほど良好ではない。黒漆は内外器面にあるが、遺物を洗う時点で気づくのが遅く、ブラシで少々強く擦ってしまった。

これまで黒漆の塗られたカムイヤキの報告はきわめて少ない。漆はルーペで観察すると表面は黒く光っており、乾燥して少々剥げている部分も見られる。この資料は焼成も悪く、漆も塗られているが脆くなっているため、拓本実測は控え、写真資料にとどめた。

滑石

赤木名グスクから滑石の出土は全部で8点の出土である（第4，5表）。うち実測可能な資料は第28図1から5までの資料である。

1は13-G区2層から出土した。口縁部近くに幅のある方形の凸帯を有し、凸帯下方は黒褐色になっている。

2は19-H区土構内より出土している。小片であるが外器面と思われる凸帯下側が黒褐色になっている。

3は13-G区ピット内から出土した。大型な破片である最長13センチ、幅約4, 5センチである。ただし、上下左右不明である。破片になってから再利用されたと思われ、断面部が4面とも削られている。削られてない唯一の部分に6mmほどの小さな孔の跡がある。外器面は褐色である。外器面は彫刻刀のようなヘラ成形痕が残る。

4は14-I区、ピットから出土した。内器面は細い筋を引くような薄い条痕があり、外器面は鋭いヘラが打ち込まれたようになっている。

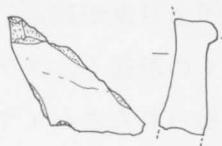
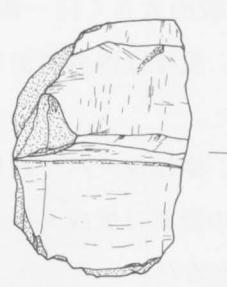
5は底部と思われる資料である。外器面は黒褐色になっている。13-G区ピットからの出土である。以上の滑石資料はカムイヤキと一緒に出土しており、奄美大島で少なかった滑石資料が追加され、今後の資料調査に期待される。

土器

その他土器片と思われる小片が19-H区土構から出土している。赤褐色で粒子が粗く、焼成も悪い。小片資料だが8点出土している。焼成の粗悪なカムイヤキは赤褐色でもろいが、これらの粗悪な資料とは明らかに違う。

鉄・石製品

19-Hの土構内から鉄扉が出土しているが、今回の調査で製品の出土はなかった。石製品はからスレート製であきらかに研磨され、硯石のように思えるが不明な資料である。



2

1



3



4



0 5cm

5

第28図 滑石

14-J区

遺物名	表土	2層		不明
カムイヤキ				
青磁		1		
白磁		1		
鉄				1
貝				1
石		1		

14-I

遺物名	表土	2層	ピット	不明
カムイヤキ			4	7
青磁			1	1
白磁			1	
サンゴ				6
貝				1
石			1	45
近世	29			
木炭			1袋	
滑石			1	

14-H

遺物名	表土	2層	ピット	不明
カムイヤキ				1
青磁		1		
土器				1
木炭			1	
近世	4			
石			3	2
銅錢				1

12-H

遺物名	表土	2層		不明
チャート				4
石		3		2
近世				1

10-G

遺物名	表土	2層		不明
チャート				
石				

11-G

遺物名	表土	2層	3層	不明
チャート		2	5	
カムイヤキ		2		
青磁	3			

13-H

遺物名	表土	2層	ピット	不明
カムイヤキ	2			
チャート		3		
染付け	2			
瓦	1			
貝	1			
石	2	1	4	
木炭			1袋	

14, 15-H, I, J

遺物名	表土	1層		不明
カムイヤキ	7			
青磁	2			
白磁	1			
鉄	17			
貝	12			
石		多数		
染付	9	2		
チャート	3			
木炭		1袋		10
近世	多数	17		

第4表 調査区出土遺物一覧表

21-G, H

遺物名	表土	2層	ピット	不明
青磁		5		
白磁		4		
滑石		2		
鉄		15		
貝	1			
石		小石		
染付け	3			
近世	24			
瓦	1			
木炭		2袋		

13-G

遺物名	表土	2層	ピット	不明
カムイヤキ		11	5	
青磁		2		
白磁		4		
鉄		4		
貝	7	9		
石	多数	多数	16	
滑石		2	2	
瓦	15			
染付け		3		
近世	43	54		
木炭		多数		
チャート		2		
鉄宰		5		
土器			2	

15-I

遺物名	表土	2層		不明
カムイヤキ	4			
青磁	1	2		
白磁	1	1		
鉄	8			
貝	2			
石	22	2		
チャート	1			
サンゴ	5			
瓦	4			
ふいご	1			
近世	28			

19-H

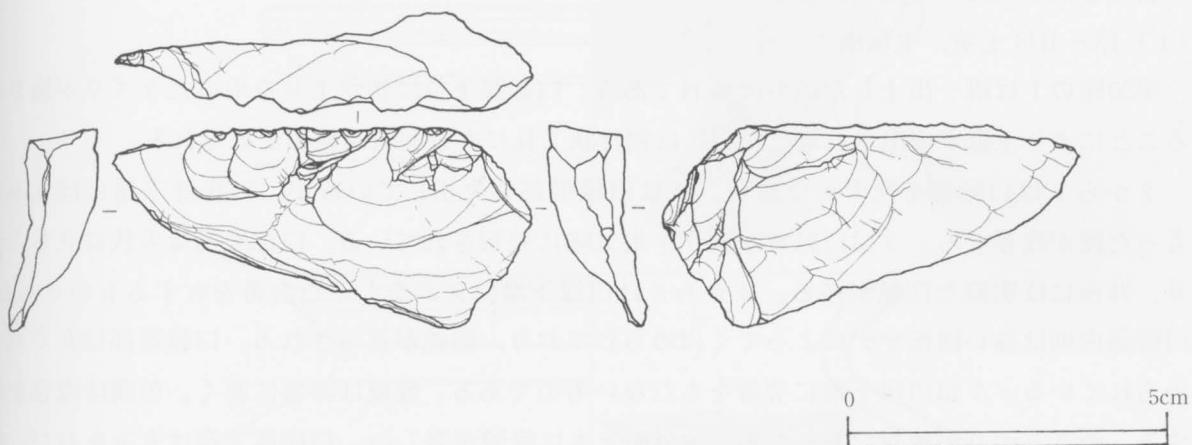
遺物名	表土	2層	3層	4層	ピット	土構
カムイヤキ	1	13	5			9
青磁	3	1	2			
白磁	3	1	1	1		1
滑石						1
土器					10	
鉄宰	4					
貝	2	1				
石	多数	多数	4		13	多数
染付け	5	6	4			
木炭	1	1			1袋	1袋
チャート	4					
瓦	4	1				
近世	34	27	6			

第5表 調査区出土遺物一覧表

旧石器

第29図は11-G区において旧石器の調査を行った資料である。今回出土した資料の中では大形の資料である。第5層マージの褐色土層からは5点の出土であるが砂礫層などからもチップは出土している。第図は原寸大で最大幅cm, 最長cm, である。剥離され、チッピングされているが完全な製品になっていないフレイクかコアと思われる。

発掘面積が小規模であったが、成果は大きい。今回は赤木名グスクの調査が主であるため、今後の課題として、残すことにした。



第29図 11-G区 旧石器 1/1



マージ層から出土したチャートのチップ

徳之島カムイヤキ古窯産製品

熊本大学 新里 亮人

今回の調査で、13-H区の遺構から硬質、軟質の陶器が一定量検出された。これらは、胎土に0.5から1.0mm程度の白色鉱物（石灰岩か？）を含み、色調は外面青灰色、芯部赤褐色を呈するものが多い。内面に特徴的な格子目文の当て具痕を残す資料が多数認められる。以上の所見から、徳之島伊仙町に所在するカムイヤキ古窯産の製品と見て大過ないであろう。出土点数は、接合資料を1点と数えると、総数112点で、器種は、碗形1点を除き全て壺形に属する。壺形器種の部位ごとの内訳は、口縁部6点、胴部97点、底部8点、取手1点であった。以下、図化可能な14点の資料を出土状況ごとに報告する。

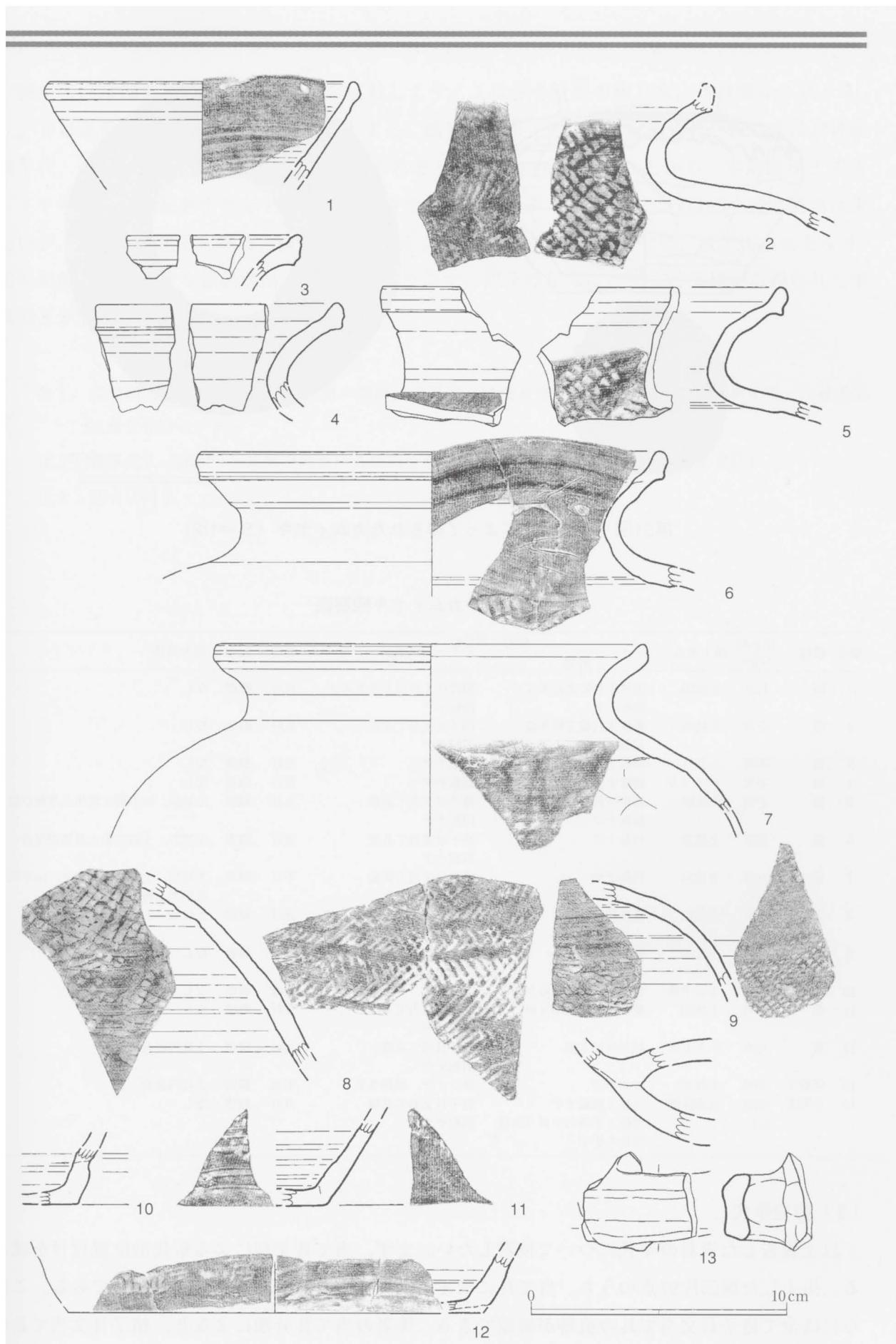
(1) 13-H区土坑、平場出土資料

第30図の1は唯一出土した碗形の資料である。口縁部下位に籠状工具を用いたケズリが施されることにより玉縁が表出される。内面には割竹状工具による回転調整が認められる。

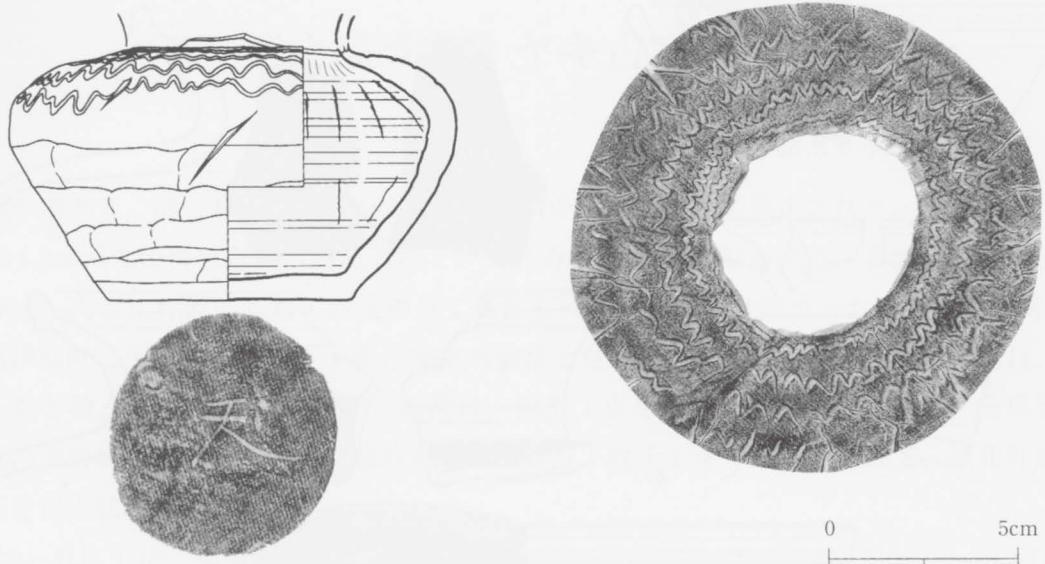
2から7は口縁部を残す壺である。2は口縁端部を欠損しているが、口縁部下端には丸みをもった段が残存する。3は口縁部下端が平坦気味に整形されている。口縁端部は舌状に立ち上がり、外面には明瞭な凹線が残る。4から6は口縁下端に丸みをもった突帯を有するものである。口縁部内面は強い回転ナデによってくぼめられており、圈線が巡らされる。口縁端部は丸くおさめられている。7は口縁下端に突帯をもたないものである。焼成は非常に悪く、色調は橙色を呈する。焼き上がりが軟質であるため、内外面ともに摩滅が著しい。口縁部下端は丸みをおび、口縁端部は丸みをもって上方へ立ち上がる。胴部内面には粘土継ぎ目痕に沿って、左方向へ移動する当て具痕が観察できる。これは、粘土紐を積んだ後、回転台を左方向（時計回り）へ回しながら叩いて成形した痕跡と見られる。8、9は壺胴部の破片である。8は外面に綾杉文、9は細格子目文の叩き目が残されている。内器面にはともに格子目文の当て具痕が認められる。10から12は底部の破片資料である。いずれも焼成は良好で、内面には回転ナデが施される。13は取手の破片である。取手付の壺は沖縄県伊佐前原第一遺跡^{注1}等に類例が見られる。

(2) 表面採集資料（採集地調査中）

第31図は、表面採集によって得られた小形の壺である。口縁部を欠いているが、ほぼ完形に近い、残存状態良好な資料である。内面には格子目文が刻まれた当て具痕が微かに認められる。肩部内面に残る当て具痕は三日月形の形状を呈する。これは円形の当て具の縁辺が利用されたためであろう。肩部を屈曲させる際、当て具の縁が押し当てられた痕跡と推察される。胴部上位にはヘラ描きによる波状沈線文が施される。波状沈線文は頸部から胴部に向かって、一筆描きで描かれている。肩部外面は丁寧な回転ナデ、胴部中位から底部にかけては籠状工具によるケズリ、その後に手持ちナデが施されている。そのため、ナデの終着点には明瞭な指頭圧痕が認められる。ナデ痕の切り合い関係から、調整は胴部から底部の順に、器体を右方向（反時計回り）に回転させながら施されたことがわかる。底部外面にはヘラ描きによる「天」の字が刻まれている。これは、文字またはヘラ記号であるのか判断しかねるが、切り合いから復元できる描き順は現在と同じであるため、文字として認定できる可能性は高い。今後、類例資料の検討が必要となろう。



第30図 土坑、平場出土のカムィヤキ (S=1/2)



第31図 表面採集によって得られたカムィヤキ (S=1/2)

第6表 カムィヤキ観察表

番号	機種	復元径 (cm)	出土地点	成形、調整痕		焼成	胎土	接合関係
				外面	内面			
1	碗	12.0	土坑80	籠状工具によるケズリ 回転ナデ	割竹状工具によるケズリ 回転ナデ	良好	緻密	なし
2	壺	不可	土坑93	斜位平行線文叩き痕 回転ナデ	格子目文當て具痕 回転ナデ	良好	緻密	なし
3	壺	不可	土壘外	回転ナデ	回転ナデ	良好	緻密	なし
4	壺	不可	F-5 土坑	回転ナデ	回転ナデ	良好	緻密	なし
5	壺	不可	土坑84	斜位平行線文叩き痕 回転ナデ	格子目文當て具痕 回転ナデ	良好	緻密	土坑84, №不明土坑出土遺物が接合
6	壺	18.0	土坑37	回転ナデ	格子目文當て具痕 回転ナデ	良好	緻密	土坑37, 土坑29出土遺物が接合
7	壺	16.8	土坑74	回転ナデ	格子目文當て具痕 回転ナデ	不良	緻密	土坑74, 土坑71, 土坑3, №不明土坑出土遺物が接合
8	壺	不可	土坑42	綾杉状叩き痕	格子目文當て具痕 割竹状工具による回転調整	良好	緻密	土坑42, 土坑76出土遺物が接合
9	壺	不可	土坑36	細格子目叩き痕	格子目文當て具痕 回転ナデ	良好	緻密	なし
10	壺	不可	1の平場	割竹状工具によるケズリ	回転ナデ	良好	緻密	なし
11	壺	不可	土坑70	縦位平行線文叩き痕	格子目文當て具痕 回転ナデ	良好	緻密	なし
12	壺	16.2	F-5 土坑	綾杉状叩き痕	格子目当て具痕 回転ナデ	良好	緻密	土坑内接合
13	壺取手	不可	土坑101	ヨコナデ	ヨコナデ, 指押さえ	不良	緻密	土坑内接合
14	小形壺	底径 6.4	表面採集	上位:回転ナデ 下位:手持ちケズリの後 手持ちナデ	格子目文當て具痕 回転ナデ	良好	緻密	なし

(3) 推定年代

以上報告した資料の年代について検討したい。まず、當て具文様による年代的位置付けを試みる。出土した胴部片97点のうち、當て具に刻まれた文様の判別が可能な資料は47点である。これらには全て格子目文當て具の痕跡が確認できる。筆者の當て具分類によると、格子目文當て具の年代は11世紀後半代から13世紀前半代までに位置付けられている。したがって、破片資料については13世紀前半代までの年代が与えられる。

続いて口縁部形態から細かな年代を検討しよう。1は筆者分類の碗B式、3は壺IIc式、4, 5, 6は壺IIIa式、7は壺IVc式に対応する。碗B式と壺II式は12世紀前半代、壺III式は12世紀後半代、壺IV式は13世紀前半代の年代がそれぞれ与えられている。以上から、本遺跡出土のカムイヤキは、12世紀前半代を下限、13世紀前半代を上限とするといえる。口縁部を残す資料は少ないが、各型式の出土比率は、碗B式、壺II式を合わせて29%，壺III式57%，壺IV式14%となり、12世紀後半代に属する製品が出土資料の主体をなす。以上の結果は、当て具文様から得られた年代観と矛盾しない。

- 注1 當銘清乃編 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 注2 新里亮人 2002「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『九州考古学会発表資料』
- 注3 註2に同じ

赤木名グスク出土の植物遺体（速報）

札幌大学 高宮 広土

赤木名グスクは、奄美大島笠利町に所在するグスク時代の遺跡である。今回、約6.6リットルの土壤サンプルが、土坑から回収され、植物遺体検出のためにフローテーション処理された。ここで、フローテーション法によって回収された植物遺体分析を簡単に報告したい。

まず、土壤のサンプル量は、6.6リットルと多くはなかったが、貴重な資料を得る事ができた。計227（粒／片）の植物遺体が回収され、その密度は、1リットルにつき34.4（粒／片）と、大変高い。さらに、以下に詳しく述べるように、これらは全て栽培植物のものであった。赤木名グスクの植物遺体には、4種の栽培植物が含まれていた。

イネ *Oryza sativa*

計188（粒／片）のイネ穎果が同定された。その内36粒は計測可能な穎果であった。表1にみられるように、長さ（mm）×幅（mm）×厚さ（mm）の平均は、 $4.3 \times 2.5 \times 1.7$ であった。また、63粒は、ほぼ完形であったが、計測は不可能な穎果で、89片はイネ穎果の破片であった。イネ小穂軸も、1片検出されている。2片は、イネかと思われたが、決定的な特徴を欠落しているため、イネ？に分類した。今回検出された植物遺体では、イネが最も多く、イネ？を含めると、約88%以上となる。写真1のイネ穎果の長さ（mm）×幅（mm）×厚さ（mm）は、それぞれa) $5.1 \times 2.8 \times 1.8$ 、b) $5.6 \times 2.6 \times 1.8$ 、およびc) $4.7 \times 2.5 \times 1.9$ である。

オオムギ *Hordeum vulgare*

オオムギ穎果が1粒検出された。写真2の長さ（mm）×幅（mm）×厚さ（mm）は $4.8 \times 2.7 \times 2.2$ である。写真2aは背面、写真2bは腹面である。

ムギ類

オオムギかコムギか判断する事ができなかったが、その何れかであろう植物遺体をムギ類とした。計2片をこのカテゴリーに含めた。

アワ *Setaria italica*

イネに次いで、最も多かった植物遺体がアワであったが、その数は計26粒であった。その内8粒が計測可能で（表2）、長さ（mm）×幅（mm）×厚さ（mm）は $1.0 \times 1.0 \times 0.8$ である。

キビ *Panicum miliaceum*

計7粒のキビが検出された。その内3粒が計測可能で（表3）、その長さ（mm）×幅（mm）×長さ（mm）の平均は、 $1.8 \times 1.6 \times 1.2$ である。写真4の長さ（mm）×幅（mm）×長さ（mm）は、

1.8×1.6×1.2である。

表4に今回検出された植物遺体をまとめてみた。前述したように、約6.6リットルの土壌サンプルから、これほどの栽培植物が検出された事は、赤木名グスクのころには、かなり集約的に、イネを中心とする農耕が存在した事を今回の分析結果は示唆するものである。さらに、用見崎遺跡（6～8世紀）のころは、おそらく狩猟採集の時期であったので（高宮 1997），奄美大島においては、用見崎遺跡の時期と赤木名グスクの時期に農耕が始まったようである（少なくとも、赤木名グスク的な農耕）。今後のこのような調査により、奄美大島においても狩猟採集から農耕への変遷を解明することが可能となるであろう。

謝辞：

このような機会を与えてくださった中山清美氏に、心から感謝申し上げます。

引用文献

高宮 広土

- 1997 「用見崎遺跡（奄美大島笠利町）におけるフローテーション法の導入とその成果について」『考古学研究室報告 第33集』若杉あづさ（編）pp.46－48。熊本大学文学部考古学研究室：熊本市



写真1 a : イネ



写真1 b : イネ



写真1 c : イネ

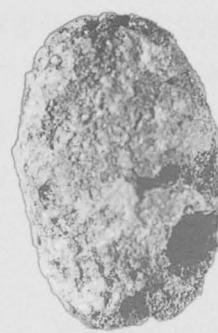


写真2 a :
オオムギ (背面)



写真2 b :
オオムギ (腹面)



写真3 : アワ



写真4 : キビ

赤木名グスク出土の植物遺体

表1：イネのサイズ

長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
5.1	2.6	1.8
5.1	2.8	1.7
4.7	2.5	1.9
4.5	2.5	1.9
4.2	2.7	1.7
4.6	2.6	1.9
4.5	2.3	1.9
4.1	2.3	1.9
5	2.7	1.7
4.5	2.2	1.8
4.2	2.2	1.3
4.3	2.4	1.7
4	2.2	1.2
4.9	2.7	1.9
3.3	1.5	1.1
4.9	2.5	2.2
4.3	2.3	1.8
4.3	2.5	1.5
3.7	2.4	1.7
4	2.3	1.8
4	2.4	1.5
4.5	2.4	1.5
4.6	2.5	1.8
4	2.1	1.4
4.2	2.7	1.8
4.3	2.6	1.7
4.3	2.8	1.6
3.9	2.4	1.7
4.2	2.3	1.6
4.5	2.7	2.1
3.2	2.4	1.9
3.9	3.1	2.3
4.5	2.6	1.8
4.6	2.7	2
3.9	2.1	1.7
3.8	2.2	1.4
平均	4.29	2.45
		1.73

表2：アワのサイズ

長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
1.1	0.9	0.8
1	0.9	0.4
1	1	0.8
0.9	1	0.8
0.9	0.8	0.4
1.1	1	0.7
0.9	0.8	0.4
1	0.8	0.6
平均	0.99	0.9
		0.61

表3：キビのサイズ

長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
1.9	1.5	1.1
1.6	1.6	1.2
1.8	1.6	1.2
平均	1.77	1.57
		1.17

表4：赤木名グスク出土の植物遺体：まとめ

イネ(粒／片)	イネ?	イネ(小穂軸)	オオムギ(粒)	ムギ類(片)	アワ(粒／片)	キビ(粒／片)	計(粒／片)
188	2	1	1	2	26	7	227

奄美大島の遺跡土壤のプラント・オパール分析

—赤木名城、用見崎遺跡、宇宿小学校校内遺跡の遺跡土壤について—

宮崎大学農学部 宇田津徹朗

藤原 宏志

橋本 将幸

1. はじめに

最近の稻作起源研究の成果から、我が国には、水田稻作が伝わる以前（およそ3500年程前）に、水田を伴わない稻作（おそらく焼畑や畑での稻作）が存在していたことがわかってきており、この稻作がどこから伝わってきたのか、その伝播ルートについては明らかにされていない。

中国：草鞋山遺跡における水田址発掘により、すでに6000年前には、長江下流域で、原始的な水田稻作が始まっていたことが確認されている。時代の勾配関係のみから、ここから日本へ段階的に稻作が伝わったとすることも可能である。

しかし、稻作技術という点から考えると、水田稻作の技術は焼畑や畑作とは異なるものであり、焼畑や畑での稻作は、やはり、同様の稻作が営まれていた地方から伝わったと考えるほうが合理的である。

中国の南部には、現在でも焼畑や畑で稻作を行っている地方があり、ここから稻作が日本へ伝わったのであれば、台湾、琉球列島を経由して日本へ稻作を伝えたルートが存在したはずである。

この問題について調査研究を進める上で、奄美諸島は、大変興味深い地域である。また、伝播ルートとは別に、いつ頃、当該諸島で稻作や穀物栽培が始まったかという点についても、その解明が待たれるところである。

ここでは、筆者らが、笠利町教育委員会の協力を得て、奄美大島に所在する用見崎遺跡、宇宿小学校校内遺跡、赤木名城の遺跡土壤について行ったプラント・オパール分析結果を報告するとともに、これらの遺跡における稻作の可能性について検討を行う。

2. 材料と方法

1) 分析試料

分析試料についてであるが、用見崎遺跡および赤木名城については、現地採取を行い、宇宿小学校校内遺跡については、笠利町教育委員会で保管してあった土壤を用いた。

分析に用いた試料は、以下のとおりである。

用見崎遺跡 : 2 試料

赤木名城 : 6 試料

宇宿小学校校内遺跡 : 2 試料 合計 : 10 試料

試料の採取については、笠利町教育委員会の中山清美氏の説明にしたがって行った。赤木名城については、試料採取地点と現地の状況を図に示した（別紙）。

2) 試料の分析

採取した試料は、調整処理を施した後、プラント・オパール定量分析を行った。

プラント・オパール定量分析法 (Quantitative analysis of plant opal)

プラント・オパール定量分析法は、風乾分析土壤 1 g 当たりに含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールを定量する方法である。

定量法には、ガラスビーズ法を用いる。ガラスビーズ法では、風乾分析土壤 1 g 当たりに約30万個のガラスビーズを混入する。混入するガラスビーズは、直径がプラント・オパールと同じ30～40ミクロンであり、組成も同じガラスである。そのため、ガラスビーズは、分析試料の調整作業にともなう物理的・化学的影響をプラント・オパールと同じように受けられることがある。したがって、土壤中のガラスビーズとプラント・オパールの数の比は、調整前と調整後で変化しないという仮定が成り立つ。

この仮定から、顕微鏡観察によって計数されたプラント・オパールの数とガラスビーズの数から、風乾土壤 1 g に含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールの量を算定することが可能である。

土壤にガラスビーズを混入した後は、水と水ガラスを加え、超音波（250W, 38KHZ）を20分程度、照射する。水ガラスを混入するのは粒子を分散させ、超音波処理の効果を高めるためである。また、超音波を照射することにより、プラント・オパールに付着した粘土粒子を除去することができる。超音波を照射した後、ストークス沈底法により、10ミクロン以下の粒子を除去する。その後、試料を乾燥し、定量分析用試料とする。

プラント・オパールの給源植物の同定（検出されたプラント・オパールがどの植物に由来するものかを決定する）は、光学顕微鏡を用い、100倍～400倍に拡大したプラント・オパールの大きさ、形状、裏面の模様などを総合して行う。

今回、同定と定量を行ったイネ科植物は、イネ (*Oryza sativa L.*)、ヨシ (*Phragmites communis*)、タケ (*Bambusaceae*)、ススキ (*Miscanthus sinensis*)、キビ族 (*Paniceae*) である。

3. 定量分析の結果

添付の表は、各試料について行った定量分析結果を表している。表中の「P.O.数/g」の欄が、各試料に含まれるプラント・オパールの密度（1 g 当たり）を表している。

分析の結果、赤木名城については、すべての採取試料からイネのプラント・オパールが検出された。一方、用見崎遺跡および宇宿小学校校内遺跡の土壤については、用見崎遺跡の水田跡と言われている地点からの採取土壤を除き、プラント・オパール自体が全く検出されなかった。

また、水田跡と言わされた地点からは、ススキ、タケ、キビ族などに由来するプラント・オパールはある程度の密度で検出されたが、イネについては今回、検出できなかった。

4. 考 察

今回行った分析の結果、赤木名城の土壤からイネプラント・オパールが検出された。一般に低湿地における水田遺構探査（イネプラント・オパールの存在する密度と範囲から古代水田の埋蔵域を探査する）の場合、土壤 1 g に含まれるイネプラント・オパールが5000個を超えると水田が存在する可能性が極めて高いと判断される。

この値を基準として、分析結果の値をみると、当該遺跡土壤から検出されたイネプラント・オパールの密度が極めて高いことが分かる。

しかしながら、試料の採取地点の立地から考えるとこの場所で稻作が行われたと判断することは難しい。特に1の平場については、その検出量の高さから考えると、かなりの量の稻藁が持ち込まれたことによる結果と推定される。

「そえぐるわ」については、検出密度が低く、一時的に陸稲などが栽培された可能性を完全に

否定することはできないが、うね跡などの検出がない現状においては、今回の結果は、「そえぐるわ」への稲藁の持ち込みや1の平場や土壌からの土壤の流れ込みによるものと考える方が妥当であろう。

いずれにせよ、今回の結果から、赤木名城の時代、城周辺で稻作が営まれていたことはまず間違いないものと考えられる。

なお、用見崎遺跡および宇宿小学校校内遺跡については、採取土壤に含まれるプラント・オパール自体の密度が極めて低く、今回の結果から、具体的な検討を行うことは難しい。この2遺跡については、現在、分析を進めている土器の胎土分析の結果と併せて再度、検討を行いたい。

最後に、用見崎遺跡近くの水田跡と呼ばれる部分についてであるが、今回は、試験的に近くの断面から試料を1点、採取しただけであり、この結果から、水田の存否を判断することはできない。この点については、さらに正式な土壤採取と分析を行う必要がある。

プラント・オパール定量分析結果

用見崎遺跡

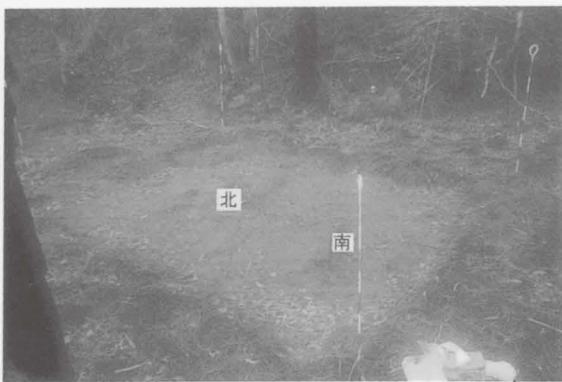
層名	深さ(cm)	層厚(cm)	G.B.数/g(個)	植物名	P.O./G.B.	P.O.数/g	仮比重(g/cc)	P.O.数/cc	地上部乾重(t/10a・cm)	種実重(t/10a・cm)	種実生産量(t/10a)
水田の跡地？(伝承)	—	—	298,486	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	0 2 0 11 8	455 1,312 0 7,216 5,248	0 1,312 0 7,216 5,248	1.000 1,312 0 7,216 5,248	0 5.642 0.000 0.346 0.651	0.000 2.532	— —
文化層	—	—	303,273	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	0 0 0 0 0	524 0 0 0 0	0 0 0 0 0	1.000 0 0 0 0	0 0.000 0.000 0.000 0.000	0.000 — —	

赤木名グスク

層名	深さ(cm)	層厚(cm)	G.B.数/g(個)	植物名	P.O./G.B.	P.O.数/g	仮比重(g/cc)	P.O.数/cc	地上部乾重(t/10a・cm)	種実重(t/10a・cm)	種実生産量(t/10a)
観察断面1	—	—	300,029	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	14 0 0 12 27	418 0 0 8,613 19,380	10,049 0 0 8,613 19,380	1.000 0 0 8,613 2,403	10,049 0 0 8,613 2,403	4.663 0.000 0.000 0.413 2.403	1.336 0.000 — —
そえぐるわ北	—	—	315,765	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	1 2 0 7 10	312 2,024 0 7,084 10,121	1,012 2,024 0 7,084 10,121	1.000 2,024 0 7,084 10,121	1,012 2,024 0 7,084 10,121	0.470 8.704 0.000 0.340 1.255	0.135 3.907 — —
そえぐるわ南	—	—	300,382	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	1 1 0 1 2	509 590 0 590 1,180	590 590 0 590 1,180	1.000 590 0 590 1,180	590 590 0 590 1,180	0.274 2.538 0.000 0.028 0.146	0.078 1.139 — —
Iの平場	—	—	300,194	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	20 2 0 21 17	320 1,876 0 19,700 15,948	18,762 1,876 0 19,700 15,948	1.000 1,876 0 19,700 15,948	18,762 1,876 0 19,700 15,948	8.706 8.068 0.000 0.946 1.978	2.495 3.621 — —
土壌外ピット上	—	—	302,831	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	7 5 1 5 24	384 3,943 789 3,943 18,927	5,520 3,943 789 3,943 18,927	1.000 3,943 789 3,943 18,927	5,520 3,943 789 3,943 18,927	2.561 16.955 0.547 0.189 2.347	0.734 7.610 5.507 57.077
土壌外ピット下	—	—	303,568	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	4 4 0 3 31	366 3,318 0 2,488 25,712	3,318 3,318 0 2,488 25,712	1.000 3,318 0 2,488 25,712	3,318 3,318 0 2,488 25,712	1.539 14.266 0.000 0.119 3.188	0.441 6.403 3.309 48.023

宇宿小学校校内遺跡

層名	深さ(cm)	層厚(cm)	G.B.数/g(個)	植物名	P.O./G.B.	P.O.数/g	仮比重(g/cc)	P.O.数/cc	地上部乾重(t/10a・cm)	種実重(t/10a・cm)	種実生産量(t/10a)
宇宿小校内1	—	—	302,269	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	0 0 0 0 0	503 0 0 0 0	0 0 0 0 0	1.000 0 0 0 0	0 0 0 0 0	0.000 0.000 0.000 0.000 0.000	— —
宇宿小校内2	—	—	300,972	イネ キビ族 ヨシ タケ ススキ	0 0 0 0 0	525 0 0 0 0	0 0 0 0 0	1.000 0 0 0 0	0 0 0 0 0	0.000 0.000 0.000 0.000 0.000	— —



そえぐるわ



1の平場F5ピット外観



土壘外ピット外観



観察断面1



赤木名グスク

図 試料の採取地点（赤木名グスク）

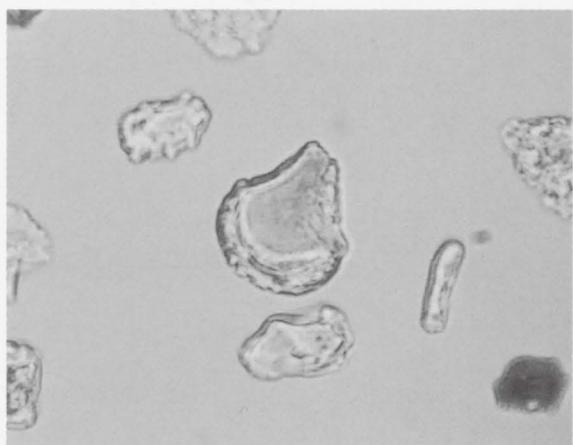
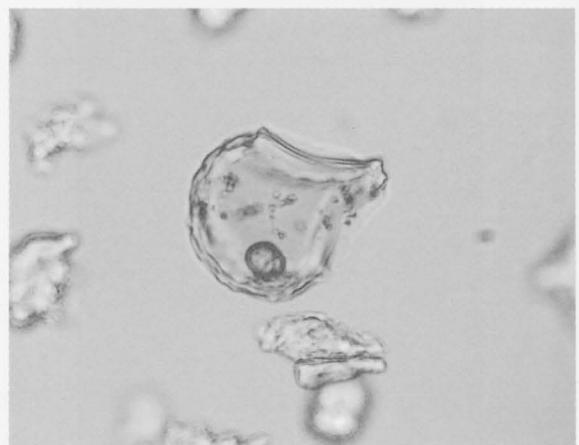
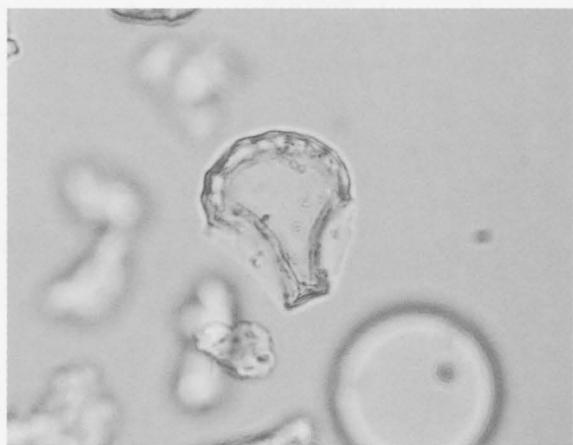
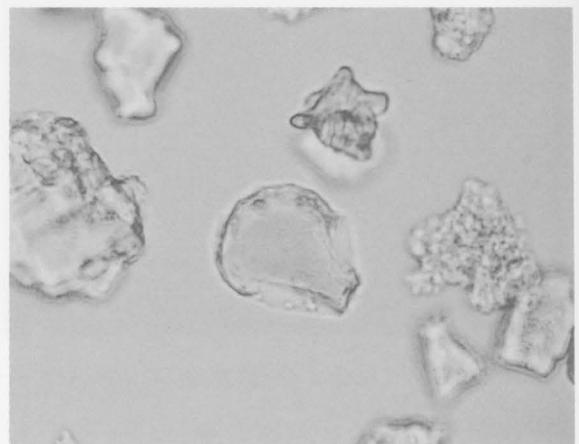
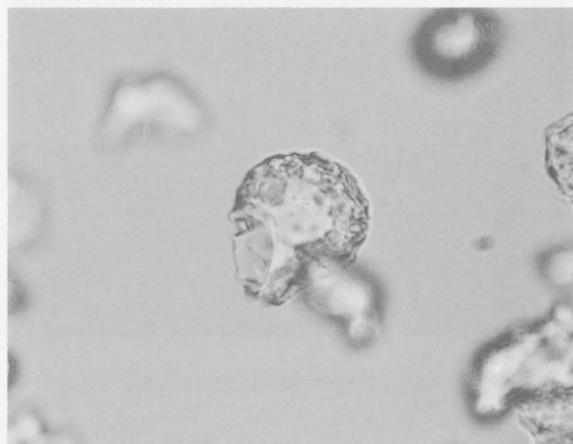


写真 赤木名グスクの土壤から検出されたイネのプラント・オパール

ま　と　め

赤木名グスクが登場した12、3世紀の時代を沖縄ではグスク時代として時代区分されている。奄美においても南西諸島が3つの文化圏を展開し、同一の文化圏として位置づけられている。そのことから奄美の12、3世紀を沖縄のグスク時代と同様に時代区分することに違和感はない。奄美のグスクは大和の影響を受けつつ沖縄と深い関わりを持ちながら展開する課程が注目される。今回の赤木名グスクの調査は奄美グスクの特徴とされている掘切を有し、平場のある地形として確認されていた。さらに、今回の調査で新たな発見が相次ぎ、グスクとして議論するのに、より具体的な地形図を仕上げることができた。

遺構の確認においては曲輪、帯曲輪、腰曲輪、掘切、堅堀、台など本土の中世城館の特徴を有する新たな発見が多かった。これらの遺構はこれまで発見されていたが考古学的な視点から地形測量が行われ、図化し、今回明らかにされたと言うべきかも知れない。

それだけ今回の調査は地形測量に主力をおいた調査を行った。

奄美・沖縄のグスク時代は大和の平安時代後期から鎌倉、室町時代にかけた中世の時代にあたる。日本の中世社会が東シナ海一帯に繰り広げていた政治、社会は南北朝時代から武家社会を取り込み中世城館にも大きな転換を求められる時代でもある。

東シナ海を中心とした国際社会の波はやがて南島も含めた大きな力が奄美をも呑み込んでしまったのであろう。奄美大島は東シナ海交易の南の拠点として、その役割を果たすべく基地となり、その中心的役割を果たしていたとする視点も可能である。

今回の発掘調査による成果は地形図の他、曲輪1、2の遺構からの遺物出土もあり、今後注目される。

発見された遺構・遺物は土坑や多数のピット、カムイイヤキ、滑石、黒漆カムイイヤキなどの資料を得た。遺構から出土するこれらの遺物がいずれも12、3世紀のグスク時代初期の資料にあたる。このことは伊仙町カムイイヤキが奄美のグスクにどのように取り入れられようとしているのか謎が多い分野とも結びつく。カムイイヤキがグスク時代の遺跡から出土するのは「下山田Ⅲ遺跡」の砂丘遺跡に生活跡が検出されている。カムイイヤキと奄美大島のグスク時代の遺跡、城は今後大きなセット関係を示す資料として発展していく可能性が残る。カムイイヤキ同様に同時期とされる取手を有する滑石なども赤木名グスクから出土している。九州から沖縄まで広く分布する滑石はカムイイヤキと共に伴しており、その流通経路など東シナ海を取り巻く南島と九州を結ぶ中世のカギを握っている資料のひとつである（第32図）。

宇検村倉木崎海底遺跡出土の白磁や青磁など、交易品のルートも注目される中、赤木名グスクが九州中北部の山城と共に通する防御施設などが注目されている。大和は南北朝時代の山城のほとんどが近世のお城に取り込まれ、石垣を有する天守閣を持つ城に移り変わった。その中、赤木名グスクは中世日本の原型の姿をそのまま残す貴重な山城と類似するとの意見も頂いた。

今回の調査は地形測量を中心に行い、縄張図を作成した。今後、奄美のグスク研究が沖縄のグ

スク、大和の山城の影響などが注目される。言い換えれば、沖縄や大和で不明な中世が奄美に求められると言ふことでもある。

今後の研究課題が多い中、測量された赤木名ゲスクにおける現地形の姿の時期がいつ頃なのか、また、築城時の範囲の問題なども残されている。出来上がった現地形の赤木名ゲスクの姿が14、5世紀の九州中、北部の山城と類似していることは多くの方々からもご指導を受けている。このような奄美のゲスクについて高梨修氏も名瀬市のゲスク分布調査の成果から、^{注1}ゲスク名称や形態などについての指摘がなされている。

まだまだ奄美のゲスク研究には多くの問題点が指摘されるだろうが、これらをクリアするための基本的作業を行い、全体的な奄美のゲスクの特徴としての論考が行われる日も近いだろう。

築城技術と稻作、製鉄などの技術をもった集団がなぜ、奄美大島に入ってきたのか、どのような集団なのかも注目される。このことは奄美大島に多く残されている平家の落人伝説や東シナ海を基盤にした倭寇勢力なども視野に入れた調査が必要であることを示しているとも言える。

注1 高梨修「奄美大島名瀬市ゲスク詳細分布調査報告書」名瀬市教育委員会 2001年

GUSUKU on Amami Island

Kiyomi Nakayama (Kasari Museum of History and Folklore)

Gusuku on Amami

The islands distributed between Kyushu, Japan and Taiwan are collectively known as the South western archipelago. Kokubu Naoich recognized three prehistoric cultures that developed in this region: the Northern, Central, and Southern cultures. The prehistoric cultures of the Amami and Okinawa archipelagos belong to the Central culture. Amami island is located in the northern part of the Central cultural Zone. Amami island, like the other islands in the Central Ryukyu Cultural Zone, witnessed the emergence of the Chifdom like societies, known as the Gusuku societies. One of the characteristics of the Gusuku societies is that they constructed Gusku. The word “Gusuku” means “castles” in Okinawan dialect. This period is known as the Gusuku period.

Until today, many researchers in Okinawa have discussed and argued about the emergence of the Gusuku. Based on archaeological data and analysis of written documents, it seems to be agreed that the Gusuku on Okinawa island emerged in about the twelfth century AD. One of the factors which contributed to the emergence of the Gusuku on this island is the exchange systems developed between Okinawa and mainland Japan and China.

While the research on Gusuku on Okinawa island has been intensively conducted for the last thirty years or so, little was known about the Gusuku on Amami island until recently. However, during the past several years, we have gradually collected data on the Gusuku on Amami island. We have not only analyzed written documents and folk tales but also conducted archaeological research in order to understand the emergence and development of the Gusuku here. At the same time, recently each city, town, and village has conducted the research on the distributions of Gusuku. Therefore, in the near future, we can grasp the approximate number of the Gusuku on Amami island.

Only three Gusuku sites have been excavated on Amami island. Today, I would like to show the topographical settings of these sites briefly and talk about the excavation at the Akakina Gusuku site in detail. The site was intensively excavated between 1999 and 2002. Then I would like to summarize the characteristics of the Gusuku on Amami and talk about the future research topics.

The topographical settings of the Amami Gusuku

a) Manya Gusuku

This Gusuku is located behind the village on the hill.

b) Youan minato Gusuku

This Gusuku is located on the tableland an the tongue shaped cape.

Akakina Gusuku

The Akakina Gusuku excavation has been conducted for four years as the important archaeological site research. The main objective of the research is to map the Gusuku in the topographic context. One of the reasons for not being able to discuss about the Gusuku on Amami has been the lack of detailed mapping of the Gusuku there. Therefore, the purpose of the research was to elucidate the topographical context of the setting of the Gusuku which are surrounded by moats.

The Gusuku is on a mountainside at an elevation of about 80 meters. Two flat areas were the main activity areas. On the western and eastern slopes of the flat areas, multiple terraces are constructed. An earthwork is constructed solidly at the border of the flat areas, which is also surrounded by enclosures. At the northern part of the flat area, a lookout is constructed. Its elevation is about 80 meters above sea level. The moats begin here. Three moats are recognized. Further north of these moats, there is a platform, whose elevation is about 100 meters. From here you can view the Akamina village as well as the Pacific Ocean. Whether it was used as a lookout, signaling, or rituals is not known at this point. Five moats are recognized north of the platform.

On the lower part of the western side of the lookout, three-stepped terraces are constructed. Three lines of moats are constructed vertically from the terrace. Also parallel to the northernmost vertical moat, a stone wall is built, which probably functioned as the retaining wall. It is extremely rare that early Gusuku in the Central Ryukyu region possess a stone wall. The whole mountain seemed to be used to construct the Gusuku. The Akakina Gusuku seems to be a large scale Gusuku.

In order to identify archaeological features, excavation was conducted. Consequently, it is understood that the cultural layer can be subdivided into upper and lower layers. From the upper layer, we obtained celadon and Kamuiyaki pieces. The latter was manufactured on the Tokuno Island between the 11th and 13th century AD and widely distributed in the Ryukyu archipelago; from the lower layer, Kamuiyaki pieces, soap stones, and white-glazed porcelain pieces were recovered. However, no celadon pieces were obtained. Several post holes and pavements are unearthed. It is not still clear how widely the pits are distributed at the site.

The Characteristics of the Gusuku

Recent studies on the Gusuku sites on Amami Island imply the following characteristics about the Amami Gusuku.

- 1) The initial part of the Gusuku construction was influenced from the Kyushu hilltop castles; the later part was influenced from the Okinawa Gusuku.
- 2) The Amami Gusukus can be classified into three categories in terms of topographical setting of Gusuku.
 - a) on the mountain tops with moats.
 - b) on the hill behind villages
 - c) on the tableland an the tongue shaped cape
- 3) Multiple Gusuku were constructed around the good bays. Whether or not they shared the territory together or each of them possessed small territory is not well understood yet.
- 4) The function and size of the Gusuku were more numerous and larger than it had been thought in the past

The processes by which and by whom these Gusuku were constructed is not clearly understood. Moreover, why did they construct Gusuku on Amami island? One of the reasons why the large sized Gusuku were constructed here might be the exchange with the northern Kyushu people who by this time belonged to the state level society. Or, the Amami Gusuku culture might have influenced both Okinawa and Kyushu societies. As it has been demonstrated from the Kurakizaki underwater site, Uken village, Amami island most likely played a significant role in trade between the continent and Japan. At about this time, groups of traders actively worked in the Ryukyu archipelago and soon after private trade developed in Japan. These trade systems likely played an important role for the development of the Gusuku since the location of Amami island was ideal for conducting trade in the East China Sea.

The Akakina Gusuku possessed two main enclosures, which were surrounded by the additional enclosures, lookout, moats, and stone walls. The archaeological data indicate that they were conscious of the ocean in front of them. These pieces of information indicate that the early Gusukus on Amami island seem to possess the similar characteristics with the hilltop castles in northern Kyushu. Considering the relationships with Hakata, which was the centre of trade in Japan, it might be possible that the Early Gusuku on Amami are the key to understanding the development of the Gusuku in the Central Ryukyu region. Since the Gusuku on Amami seem to be important in our understanding of the development of the Gusuku, in the future, it is necessary to study the Gusuku from multiple angles and with cooperation from other related disciplines.

Thank you very much.

(IPPA 2002年9月17日 第17回台湾大会発表資料より)

写 真 図 版

赤木名グスク遠影



調査前の曲輪
(1999年)



伐採作業
(1999年)



図版－2



第1掘切
(2001年)



第2掘切
(1999年)



第3掘切
(1999年)



曲輪 1 南側より
(1999年)



曲輪 1 北側
(1999年)

図版一 4



曲輪2 南より
(1999年)



曲輪2 21—G・H区
(2000年)



曲輪2 19—H区
焼土
(2000年)

曲輪 1
城道
(1999年)



曲輪 2
土墨
(1999年)



豎掘り
(2000年)



図版- 6



曲輪1 13-G区
ピット遺構
(1999年)



ピット内出土カムィヤキ
(1999年)



ピット内出土滑石
(1999年)



曲輪1 13、14—J区
土壙
(1999年)



曲輪1 13—G・H区
(2001年)



曲輪2 13-H区
土坑
(2001年)



土坑内
カムィヤキ出土
(2001年)



土坑内
黒うるしカムィヤキ出土
(2001年)

曲輪1
玉縁口縁白磁
(2000年)



曲輪1
グスク土器
(2000年)



曲輪1
滑石出土
(2000年)





曲輪1
土壠断面
(1999年)



曲輪1
土壠断面
(1999年)



曲輪1 9-K区
土壠外、炭化木出土



曲輪2 19-H区
東側より
(2000年)



曲輪2 19-H区
西側より
(2000年)



北側台
(2001年)

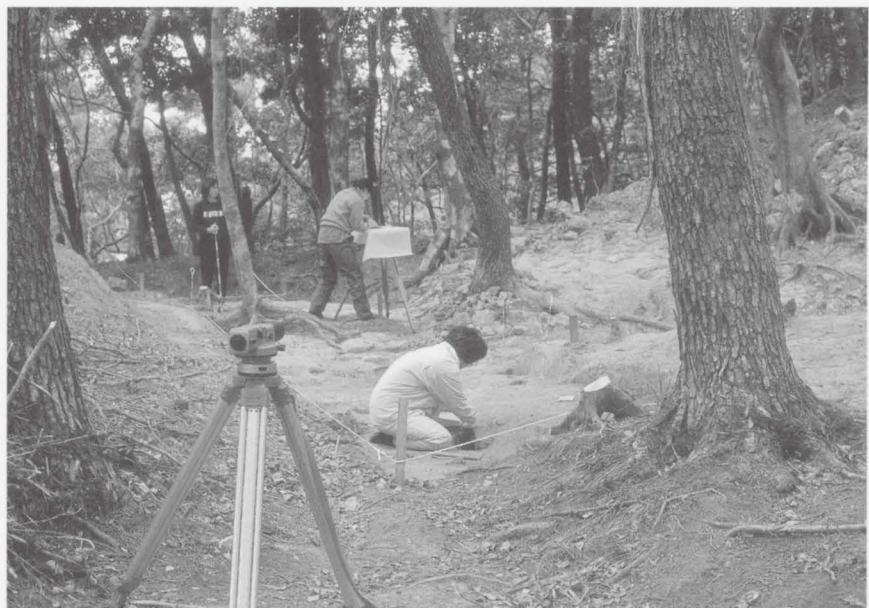


北側台下
石積遺構
(2001年)

発掘調査作業
(1999年)



測量作業
(1999年)



発掘体験学習
(赤木名中学校)
(2000年)

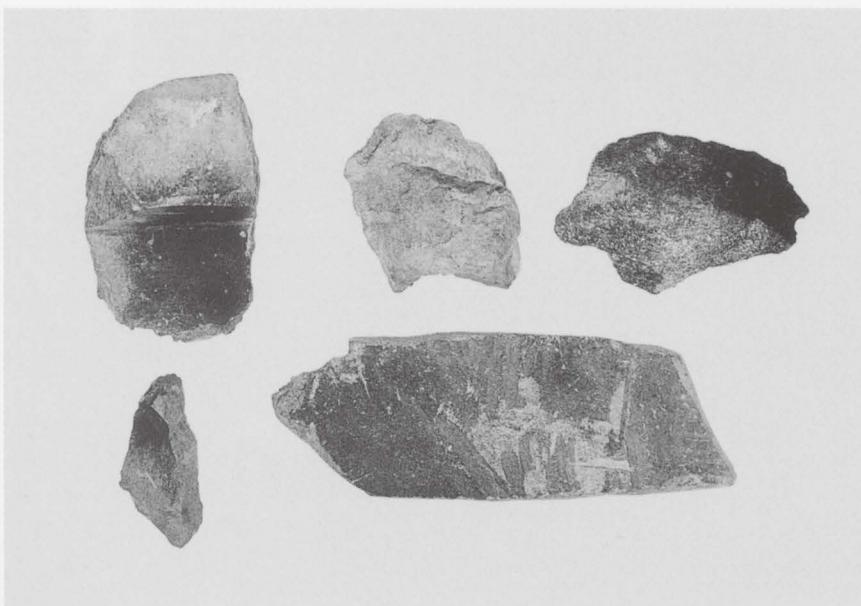




曲輪1
カムィヤキ

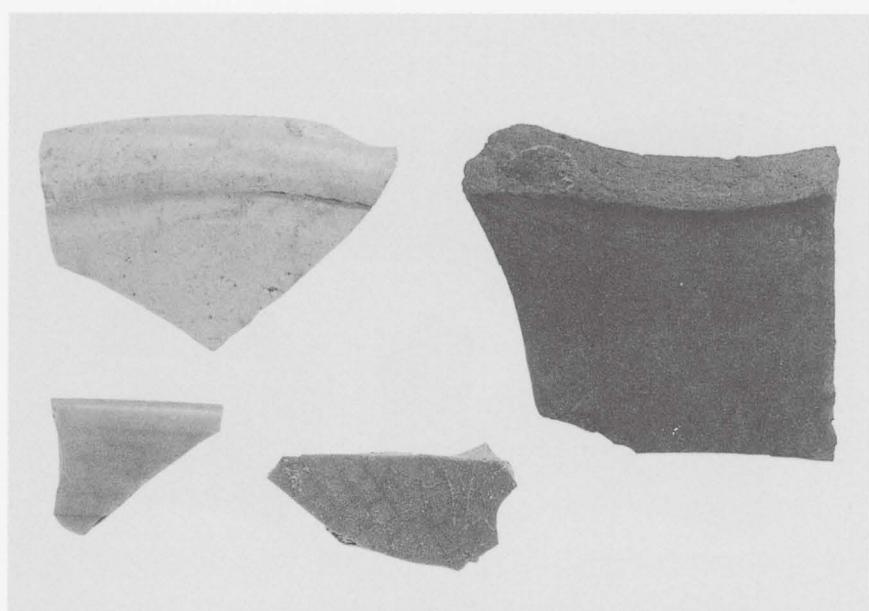


土坑出土
黒漆カムィヤキ



骨石

磁器とカムィヤキ



玉緑口綠磁器

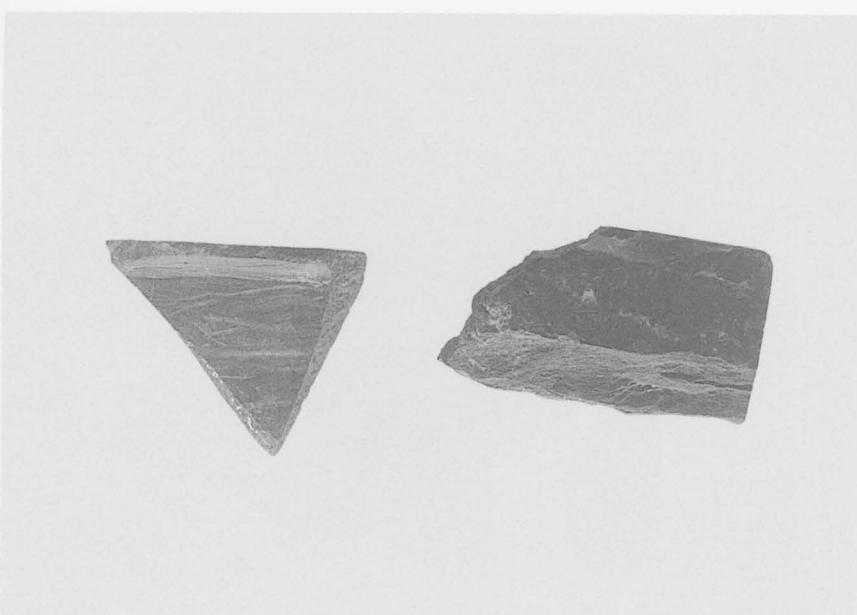


青磁





カムイヤキ



石製品



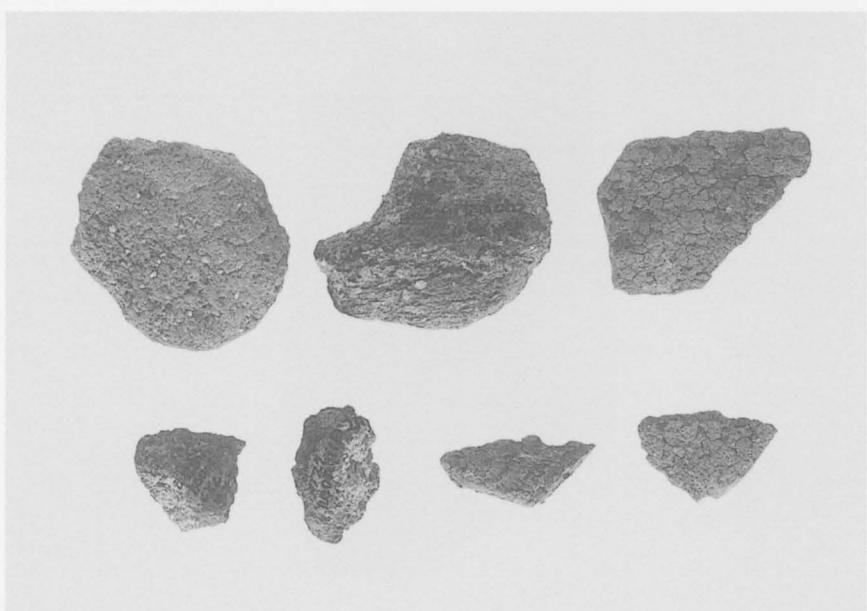
鉄滓



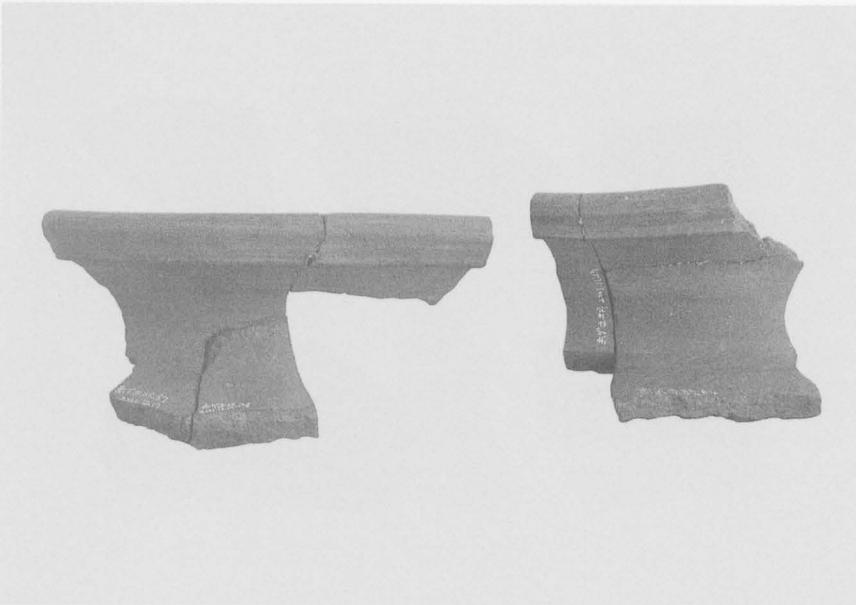
カムイヤキ



カムイヤキ



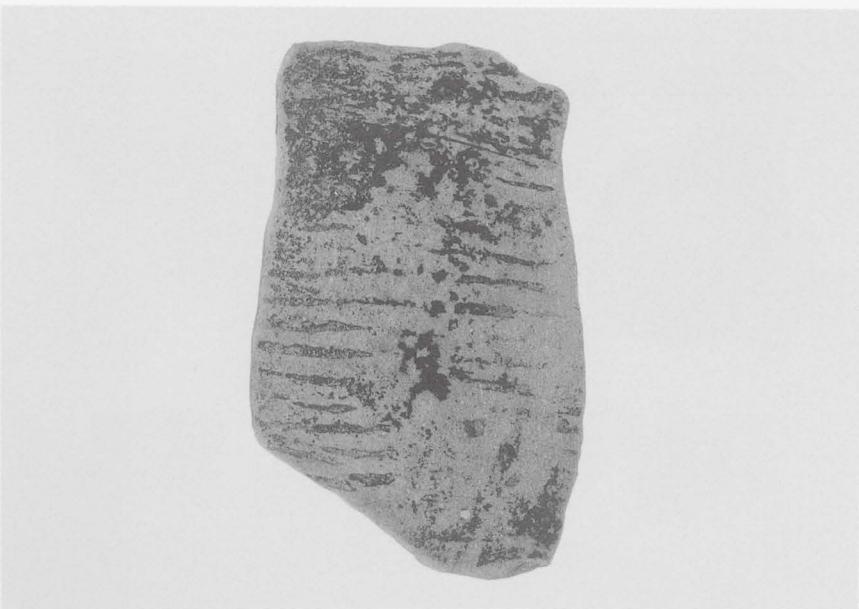
グスク土器



カムィヤキ口縁部



赤褐色カムィヤキ



黒漆カムィヤキ

笠利町文化財報告第26集
赤木名グスク遺跡

編 集 笠利町歴史民俗資料館
〒894-0624 鹿児島県大島郡笠利町須野字シラガデン
TEL0997-63-9531

発 行 笠利町教育委員会
〒894-0512 鹿児島県大島郡笠利町中金久52-7
TEL0997-63-1242

発行年月日 2003年3月

印 刷 潤上印刷株式会社
鹿児島市樋之口町6-6
TEL099-225-2727

